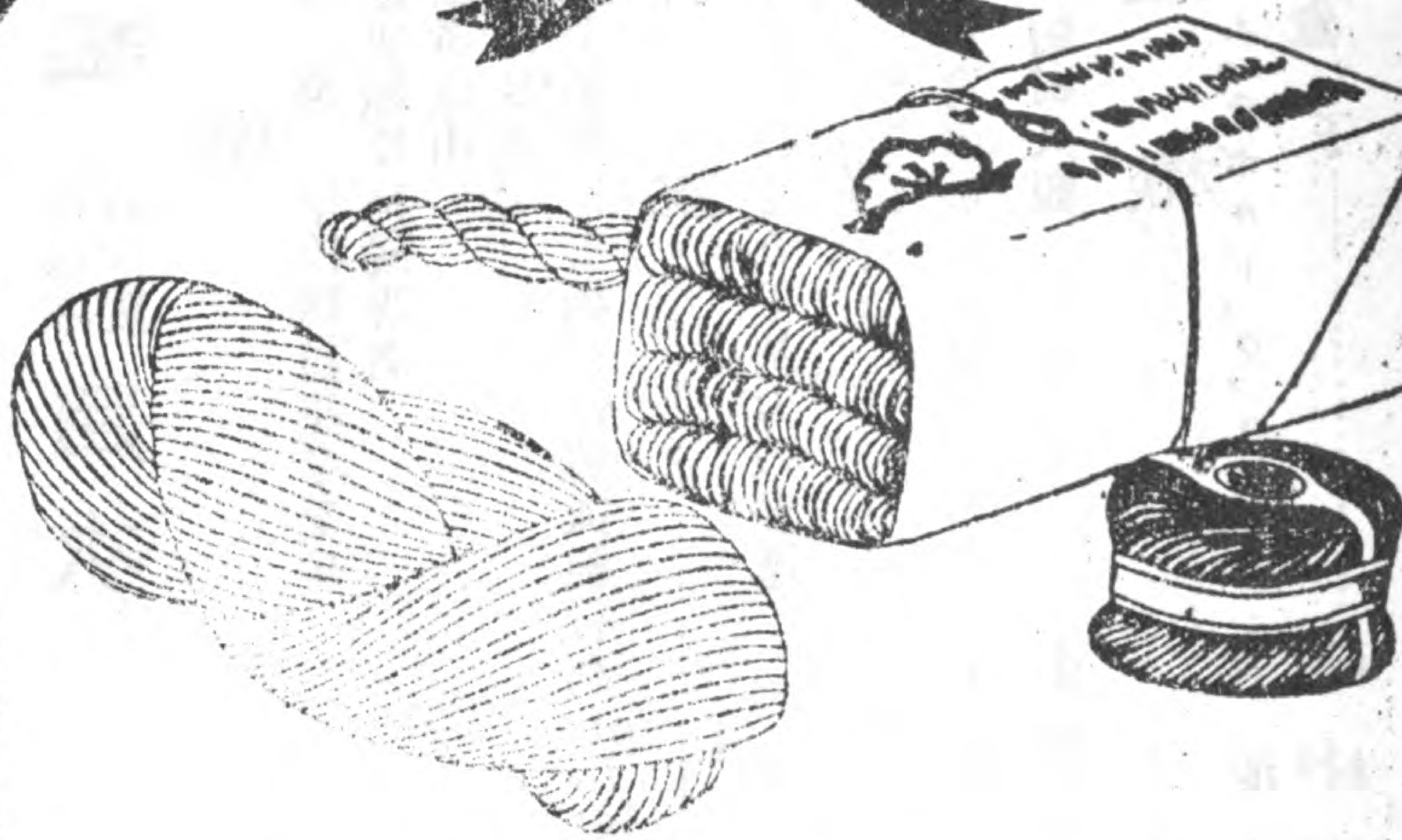

女學
第拾三巻第十四號



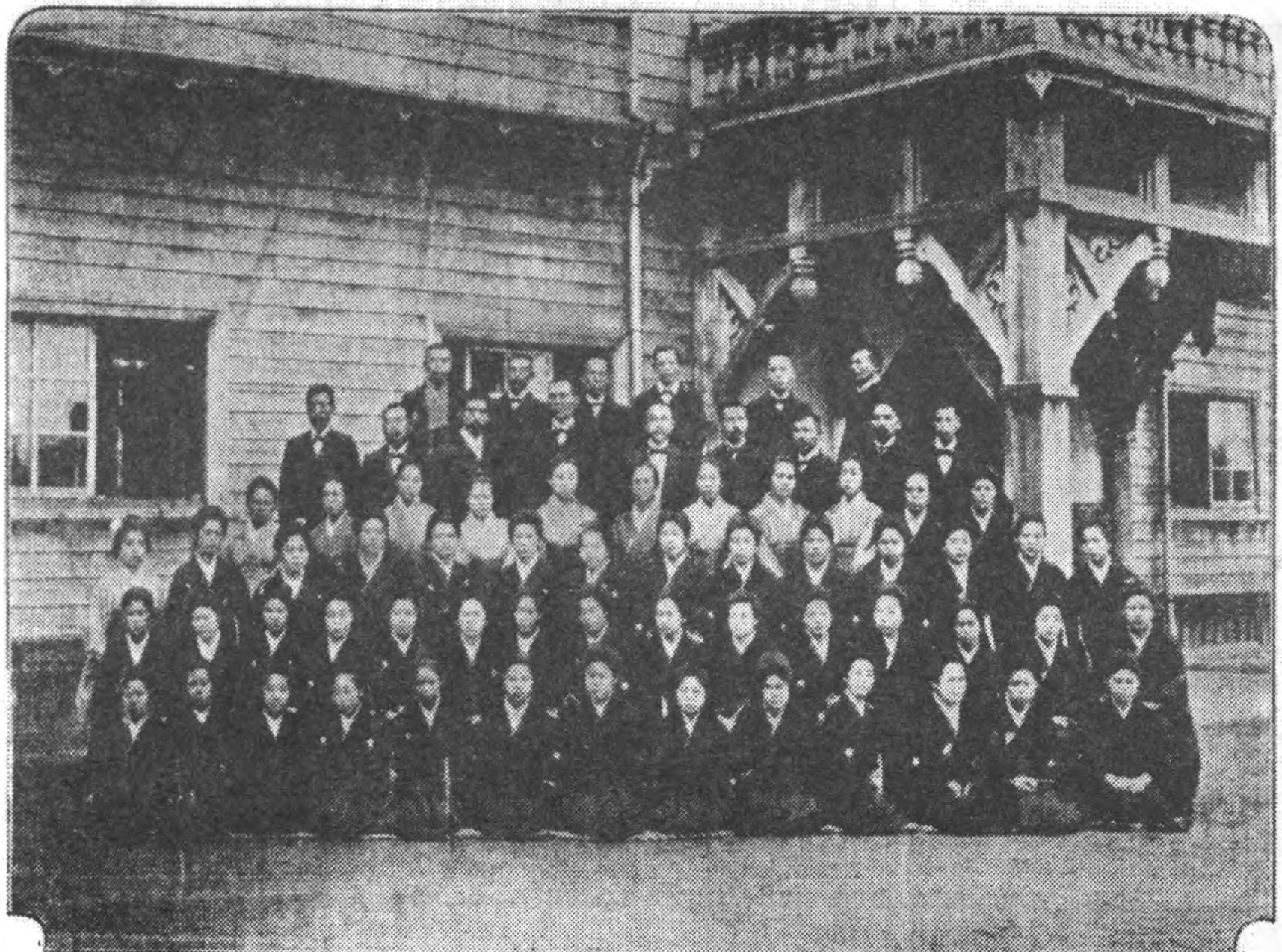
女鑑 第拾參年第廿四號 目次

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
半頁　金八圓
一頁　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年十二月十四日印刷
明治三十六年十二月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

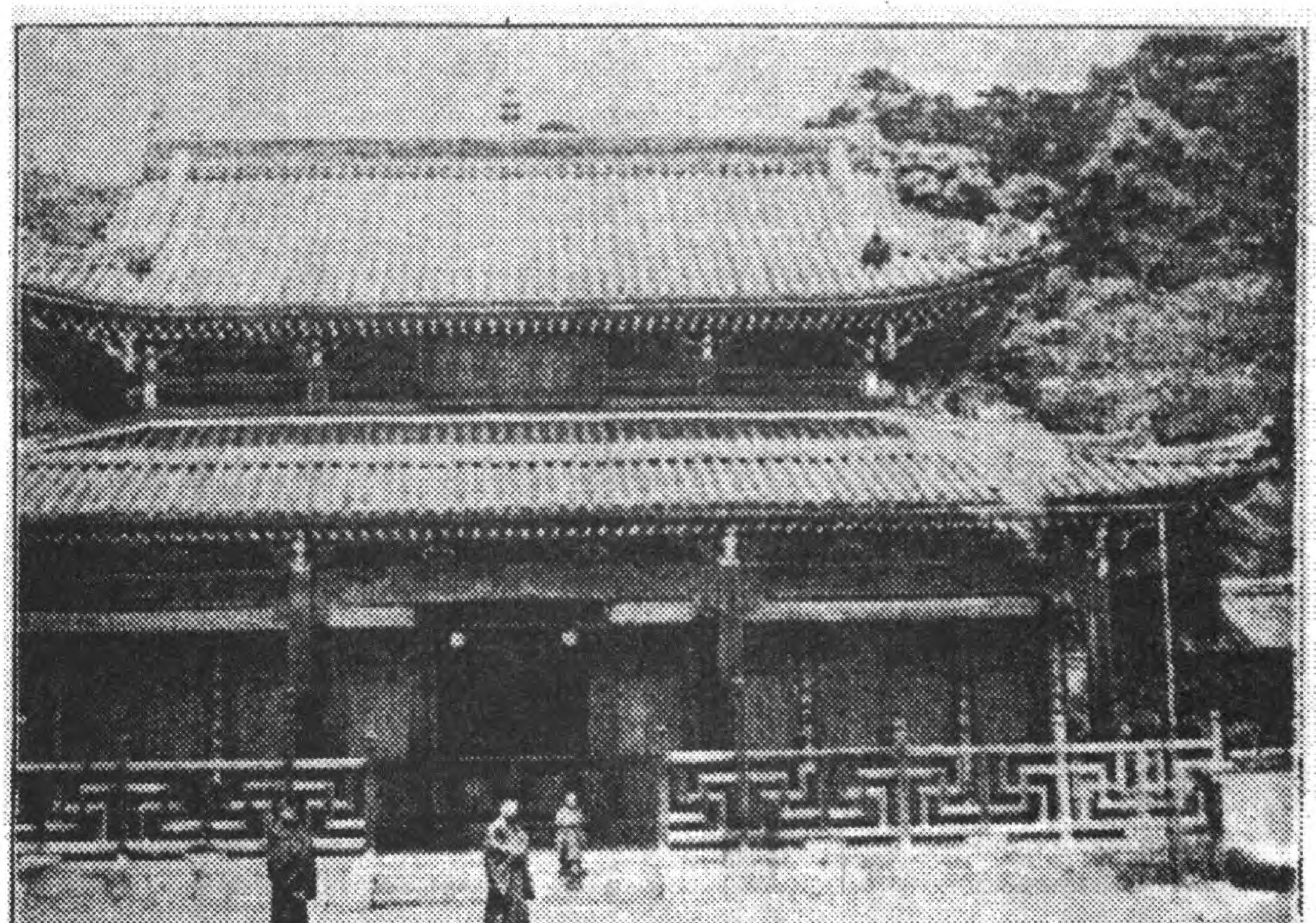


岡山縣立岡山高女學校職員並卒業生

女鑑兼題投稿優等者



岩谷梓子



宇治黄檗山

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

驚林軍醫總監發明

複方克快丸

りうまちす根切
梅毒根切
根切

半劑試み

大効なければ服す可らず

（一五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢）

五年十年長病二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

本店 東京市淺草區みな木町
支店 大阪市高麗橋松屋町通

順天堂合資會社

全快禮狀時に新聞掲載す……一劑七十五錢半劑卅五錢

日本唯一

催眠術通信教授

▲講義錄毎月參回發行▲卒業二ケ月▲月謝金四拾錢▲修業後施術不能の時は月謝返金す▲會則郵券貳錢▲講義錄第十版出でたり

東京市下谷區谷中坂町三十六番地

大日本催眠術協會

大宮兵馬著

●國語漢文假字遣ひ法

菊判大和綴
定價十八錢
郵税四錢

大林弘一郎著

●中等國文學史

菊判總クロース
定價六十錢
郵税八錢

華族女學校講師
大宮兵馬著

中等日本文典

菊判總クロース美本
定價五十五錢郵税八錢

本書は、文典初步及文典の二冊を以て合本とし、中學程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと努めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治卅五年二月の發表の中學校教授要目にも準則すること勿論なり、委しくは本書を閲讀して知るべし。

新潟縣師範學校
教諭平野秀吉著

●國語聲音學

菊判總クロース
定價六十錢
郵税八錢

華族女學校編纂

●國語假名遣ひ一覽

四六倍三切折本美本定價十二錢郵税二錢

井上頼圀校訂 小澤政胤著

國學家略傳

（菊判洋裝總クロース美本）
（定價一圓五十錢郵税十錢）

本書載する所は、慶長以來明治二十八年までの、有識故實家、神道家、詞學者、文人、歌人等五百四十名、人名の末には、其の著書目録をあげ、かつ引用書目を明示したり。或は之れを國學者人名辭書ともいふべく、また、列傳體國學史とも稱すべし。本書一たび出でも、國文學研究者に、暗夜に電燈を得たるの思ひあらん。師範學校、中學校、高等女學校、其他各種の學校に於ては、無二の參考書たるべし。

發行所 東京京橋區築地 國光社

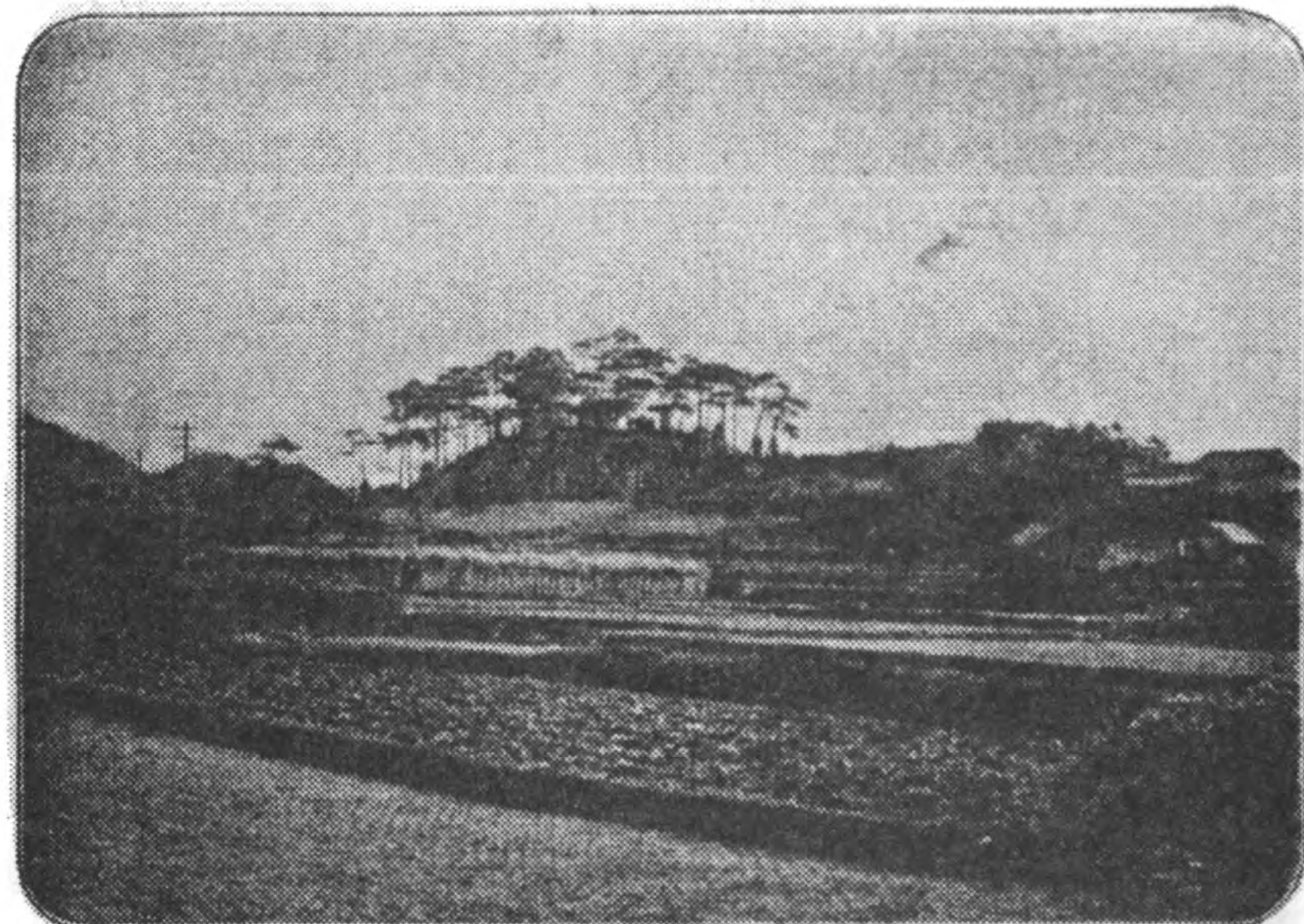
福本日南先生著

筑前志

總クロース金字
入最上美本壹冊
定價壹圓貳拾錢
小包料金拾錢

筑前は九州の要衝に當り上世夙に太宰府の設置せられし處應神帝以來鎭西の治と外交の政とを綜統せり爾後都督府鎭西府探題府奉行府等皆此に於てせざる無し日南先生此地に生れ高遠の見と該博の識とを以て研究多年遂に此著あり志たる七爲曰く氣風曰く國志曰く地名考曰く都邑曰く古歌曰く雜記曰く入筑記而して氣風は九州人の天漬に溯り人種の本源より發擢し其說は質に天荒を破り國志は神武天皇より筍田六輔に至り其間の內政外交治亂興廢偉人傑士碩學名匠包括網羅せざる無し地名考は從來和漢學者の謬妄を一排し前人未發の見を立て都邑は博多福岡の沿革を敍して掌を指すが如く古歌千載の萠藻を發し併して史誌の參考とす可く讀みて雜記に至れば百貨の市に遊ぶかの如く古今に出入し東西に徵證し制度文學風尙博く兼該して遺さず入筑記は先生歸鄉の作夙に世の傳稱する所なり先生の本志を著す和銅の遺制を再興し益軒の事業を大成すに在り其志の在る所と其書の價値と兩ながら察す可し是れ筑前志たると同時に九州志なり史學文學家は固より論なく政事家實業家敎育家殊に九州の人士は必ず一讀せざる可からざる新著也

冬野の景色



讃岐富田茶臼山神代の古蹟



同水主神社

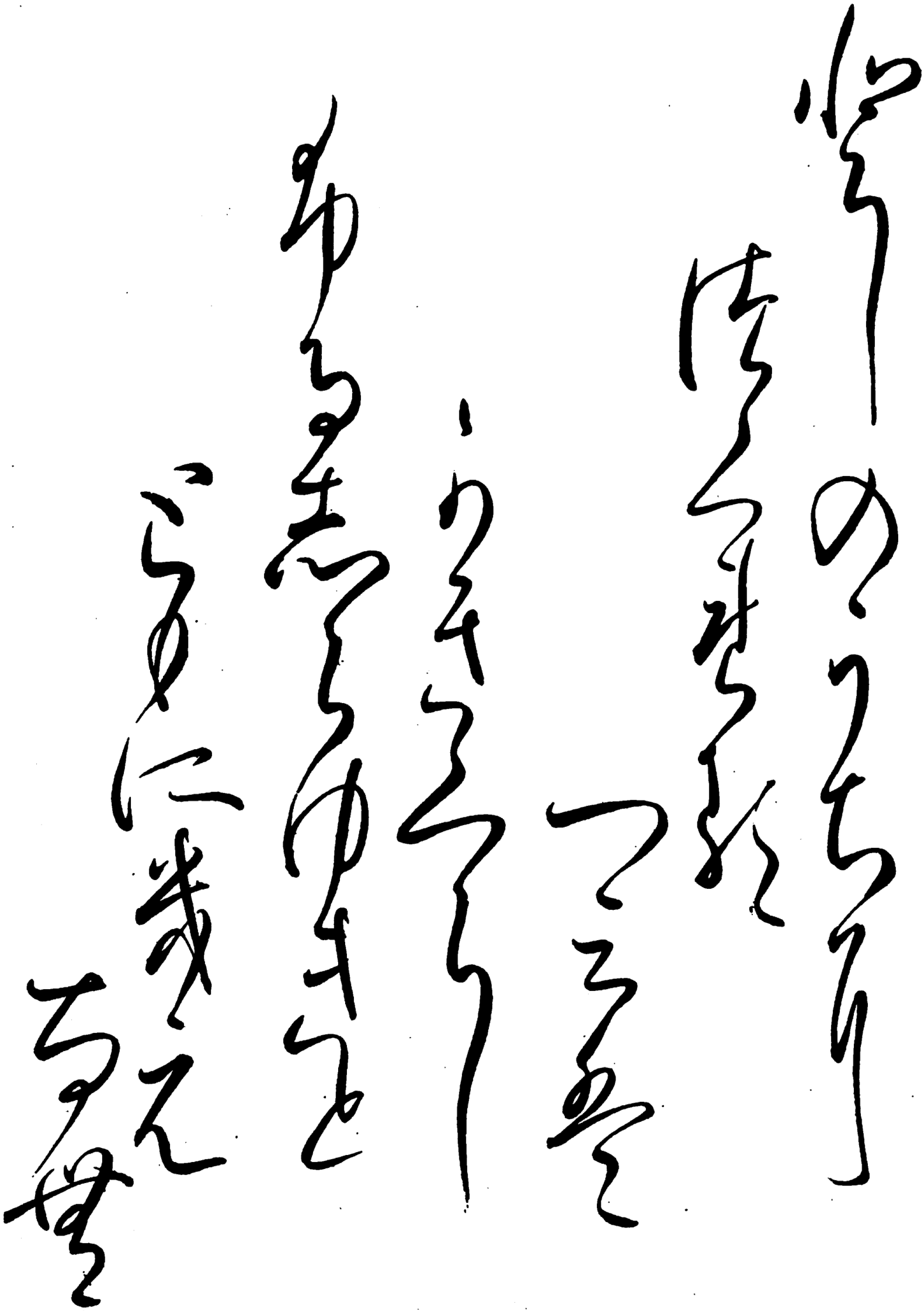
東京美術學校美術祭餘興凱旋行列



募集當選繪畫



東京府豊多摩郡澁谷村女子工藝學校　植村香



宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

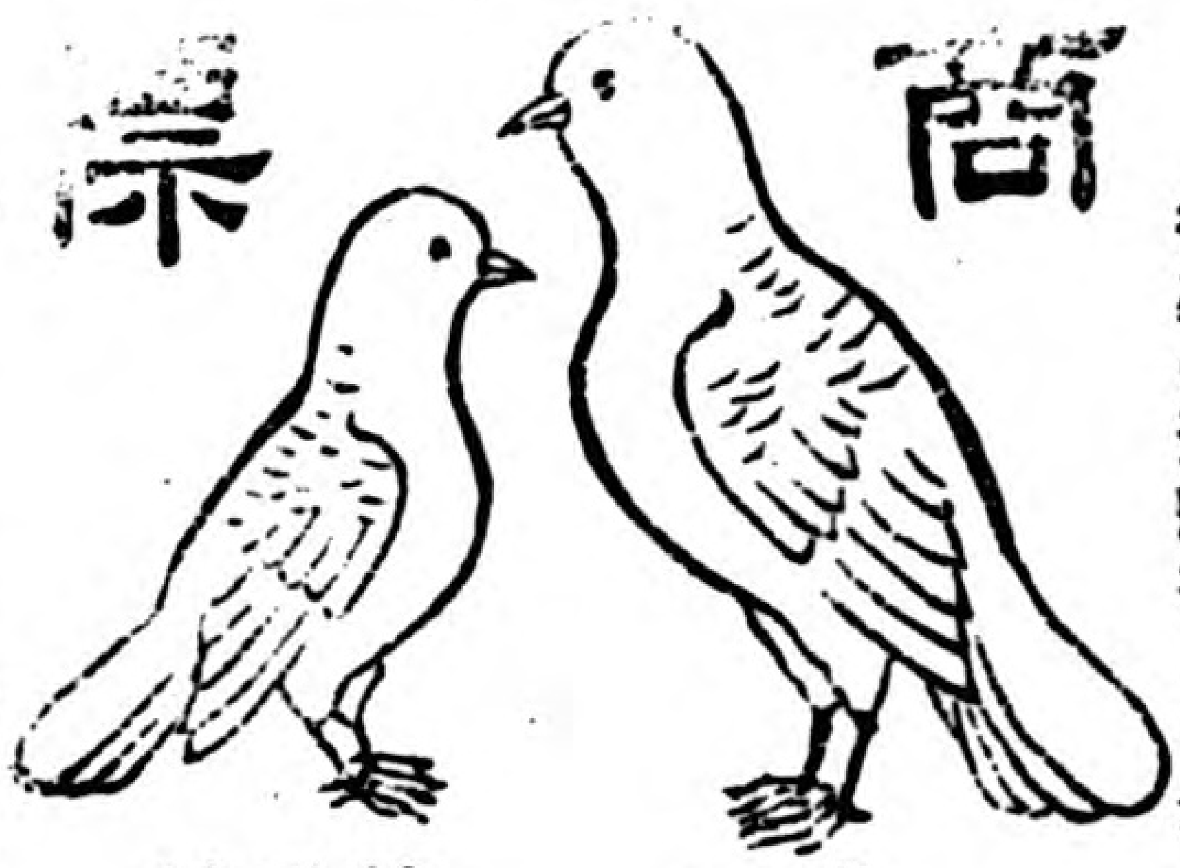
廣告

玉子ウドンコ。フノリに優る
奇々妙この髪洗毛髪を大事になさる御方の大必要衛生
品他に類なき自慢なり
從來の洗粉等とは全く違ひ且つ小量にて湯水澤山不用毛髪の汚油を落すのみならず赤毛硬毛曲毛には一度御用ひれば直に特効あり故に髪を大事になさる御方は早く御用ひ遊されてこうのこのうそでなき事早く知り玉へ

八妙髪あらいくせ直し

販賣店到る所にあり

商



標

純粋茶山花
愛油
美麗油

衛生食料品に尤適用

此の美れい油は茶山花の實より搾取りたるものにして此の茶山花の特効として髪の毛を黒く艶を出す事恰も烏羽色の如くにして曲わる毛硬毛も軟になる事は皆様御存の通り故弊店に於て美麗油と稱し廣く全都の御婦人方の御望を滿さん為産地へ特約し搾取一手大販賣仕候間、目下流行の椿油と御實驗の上髪洗とゝもに御愛用の程願上候

東京市日本橋區小舟町三ノ四

發賣本舗　西村房次郎

大日本圖案協會編纂

圖案

毎號　定價金廿錢　郵税金壹錢

發行所
發賣所　東京築地二丁目　國光社

女鑑

第十三年
第廿四號

本年に於ける 女子勢力の發達

憐れなるかな、東洋の婦人等よ。彼等はみな男子の奴隷なり、玩弄物なり、賣買の物品なり。とまで、心ある歐米の人々をして嘆息せしめたる時代もありしに、支那朝鮮の婦人等が、實際奴隷たり、玩弄物たり、賣買の物品たるが如き有様あるに引換へて、獨りわが日本國の女子のみは、長足の進歩を僅々の歳月の間にあらはして、「女子の勢力」を社會に發表するの氣運に向ひたるは、頗る人意を强うするに足るものある也。

去年の暮に當りて、予輩の切に憂ひしところのものは、過ぐる數年間に於ける女子教育膨脹の反動が、事實となりて、本年以後にあらはれんことにてありき。女學生攻撃の叫びの聲が、端なく某新聞紙上に連載せられしより、譬へば火の原野を燒くが如く、炎々たる勢を以て、玉石の別

なく、一切の女子教育を燒盡さゞれば已まざるの光景ありしは、當時予輩の甚だ寒心せしところなりしに、事實は左まで大ならずして、打撃の創痍は意外に淺く、眞正に女子教育に從事するものは勿論、平素人も我れも心甚だ慊らざるの觀ありし不完全なる學校までも、依然として、其の運命を持續して今日に至れるを見れば、女子教育の地盤が、既に强固なる域に達して、基礎の容易に動かざるを證して餘ありといふべし。

この一事にても、我國の女子教育が、大に面目を改めて、著しく進歩の氣運に向ひたるを知るに足るべきに、之に加えて、女子の一大勢力が、衆目倶瞻の前に於て、遽然として發現したるは、本年に於ける一大現象として、また女子社界に一新紀元を開きたるものとして、永く記臆せざるへからざるものあるなり。何をか一大現象といひ、一新紀元を開きたるものといふや、他なし、下田歌子女史の創意にかゝる癸卯園遊會の成功は則ち是れなり。

仔細に論評を加へんには、予輩また意見なきにあらずと雖も、そは今こゝにいふの必要なしとして、兎も角、深窓に養はれ、翠帳紅閨の裡に生育ち給ふ、やんごとなき姫君や、令夫人等が、俳優若くは舞姫のすなる高座の舞臺に上りて、舞の手や、音曲や、活人畫などを演ぜられて、下司下郎と卑められたる平民にまで、見物を許されたるは、確かに古來未だ曾て見ざるところの一新事例にして、その勇氣の程こそ實に感ずるに餘ありといふべけれ、されば、その勇氣に因りて、贏ち得たる寄附金、入場券の揚高は巨萬の多きに上りて、一切之を歌子女史の監理せる學校の

基本金に寄與したるは、此會開催の目的を達したる一大成功といふべく、而して是れ畢竟歌子女史の勢力が、與つて力あるは、いふまでもなきことなれど、その弟子たる姫御前達が、師の君の恩に報ゐんが爲めにとて、互に説きつ勸めつして、遂にかゝる活潑なる空前の擧動を敢てせられたるは、實に女子の勢力を社會に發展したる一大現象なりといふも、決して過言にあらずと信ず。

若しこの會をして、十年若くは十五年前に起らしめば、或者は冷評し、或者は熱罵し、或者は怒號して、遂に不成功に了ると共に、女子教育に對する反對の聲は、忽ち四面に生じて、殆んど救濟すべからざるに至りしなるべし。而かも昨年に於ける女學生攻撃の火の手が、やうやく消えて、餘燼なほ温かなる時なりしにも拘はらず、前古未曾有の大成功を以て、歡迎せられたるは、女子教育と、社會進歩の氣運が、著しく發達したるを證して餘あるにあらずや。

予輩は本年の女子教育が、かゝる形勢を以て、終始したるを悦ぶと同時に、來る三十七年に於ては、尚ほ一層の進運を見むことを切望せざるを得ず、而して斯の如くに日進月歩せんには、吾國の女子が、その智識に於ても、その品位に於ても、優に歐米婦人と肩を駢ぶるに至らんことは決して遠き歳月の後にはあらじ。

予輩不敏と雖も、豈一日も女子教育の爲に謀つて忠ならんとを希はざらむや。玆に本年の終刊に臨みて、讀者諸嬢の健康を祝すると同時に、硯を滌め、筆を洗ふて、更に來るべき新年の文壇に立ちて、益々女子教育の爲に盡瘁せんことを誓ふのみ。



女子教育の前途に就て

下田歌子演説

近來女子教育の盛なのは誠に喜ぶ可き事で、モー再び先年のやうな慘憺たる衰運に陷る事は無からうと思ひます、御承知の通り女子教育は一度非常の蹉跌を來しましたが、總じて善い事は何事に限らず、一旦は衰頽しても、何處にか根を殘し、其れが何時の間にか必ず芽を吹かし葉を生ずるもので、決して其塲ぎりに廢れる者ではありません、されば今日一般女子の頭腦に、普通教育の一通りは必ず心得て置かねばならぬと云ふ觀念の起つて來たのは、時勢の然らしむる處で、是上もない結構な事です。

併し私は考へます、此頃女子教育の勃興したのは、一は流行の氣味がありはせぬかと……、ヤレ娘のお友達が東京の學校に入つたから、宅のもやらねばならぬ、ヤレお友達がどこそこの學校を卒業したから、宅のも卒業させねばならぬと、父兄が子女を教育するに付ての觀念は、先づ斯んな者であります、是れで

は全く流行に餘儀なくされて敎育を施し、其れが又流行を喚び起すので、詮ずる所、近來の女子敎育は流行の氣味を免かれないのです、ダカラ、引受けて敎育する者が誠に張りあひがない、私の娘をどうか人の妻としては良妻たり、人の母としては賢母たるやうに、敎育してくれろと云つて附托さるれば、托せられた方も大に敎へ甲斐のある話だが、今日の父兄の賴み方はそうでない、前申したやうに、お友達が學校に這入つたから、娘もどうかお願ひ申しますと云ふ筆法で賴み込まるゝから、誠に心細い話です、斯んな淺薄な考へであるから、學校に這入るのも誘ひ合つてドット這入るが、引く時も又誘ひ合つてドット引く、是れでは一向賴母しくない、どうも近來の女子敎育は流行の氣味があつていけません。

私は一體日本の女子敎育と云ふ者は、其の生れ方が既に根本的に間違つては居ないかと思ひます、元々我國の女子敎育と云ふ者は、當路者に於て、始めから一定の考へがあつて起されたのではなく、唯だ外國との交際に付て、國家の體面上から起された者であるから、古來の歷史、國情などには何等の顚着無く、外國の敎育制度を、其儘直譯的に持つて來られたのに過ぎないのです、故に其間に種々の矛盾衝突多きは固より敎育其物に付ては、テンから精神と云ふ者が少しも籠つて居ないのです、今其一例を擧げて見れば國語の敎へ方です、元來我國の國語は、支那から傳來した者が多く、其間には種々の込み入つた事情があつて、實に不規則千萬の者である、然るに之を歐米通りの杓子定規に當てはめんとした事があります、其事の行はれ難きは見易すき道理であるのに、直譯の弊は終にこんな事に迄及んで、馬鹿を見ました。

斯くの如く、我國の敎育は、據ろ無き時勢に驅られて、小兒に大人の衣裳を着せ、其れが身丈に合はぬからと云つて、之を短く切つたり、又は長く延ばしたりして、今日に及んだのでありますから、滿足の結果を得ないのは固よりの事でしよう、故に凡べての敎育制度、唯だ其外形計りを摸倣して、骨子は全く拔き

去られて居るのです、徳育、智育、體育に精神のなきは固より、其精神教育と云ふ者が、既に精神の存在を見認むる事が出來ない。

併し之には又、萬已むを得ない事情があるので、當局者は此事情の爲めには、餘程頭腦を痛めたに相違ないと思はれます、西洋の學校教育は、宗教を根本として居ないのは殆んど無い位で、教育と云へば必ず宗教に關係して居ます、個人としても亦宗教を信せぬ者は極めて少なく、無宗教の人であれば、世間に對し些の信用も無い、我國には宗教を信せぬ者にも、猶ほ信ず可き人がタントあります、然るに西洋では宗教以外の人には、信ず可き人が殆んど無いと云つて宜しい、西洋で私は無宗教家であると云へば、一體に人間が猛烈であるから、非常に恐ろしい人の樣に思ふ然るに日本人は、自分は宗教家で無いと云つても、外面から適當に許すれば、矢張り宗教家である、無宗教の人で、自分は如何なる事があつても、決して人道を踏違へないと云つて、驚く可き程意思の堅固な人がある、又自分の心に疑惑起りて決し難き時は、天に訴へて冥々の裡に判斷を仰ぐ人がある、是等の人は、如何に自身は宗教家でないと云つても、必ず宗教家であります、其の故如何んとなれば、我國には古來宗教のやうな神道及び儒教と云ふ者があつて、其れが純粹の宗教たる佛教と並び行はれて、長く人心を支配して來た、故に我國人は、必ず此の神、儒、佛、孰れかの教に薫陶されて居るに相違ない、だから其中で道念の最も堅固な者は、宗教家でないと云つても、徹頭徹尾、宗教家に相違ないのであります。

我國情が今申した通りであるのに、宗教を根本とせる、泰西の教育を輸入するに付ては、當局者は當初餘程苦心したに相違ない、教育の精神迄も摸し取らんとすれば、勢ひ外教を鼓吹せねばならぬ道理となる、是は餘程考へものであるから、已むを得ず其骨子を拔去つて、其外形丈けを取つた、今日の教育が即ち其

れである、然るに教育に對する此の曖昧千萬なる態度は、輸入當時に止まらず、今日猶ほ持續されて居ますから、教育の基礎と云ふ者が、何時迄も定まらず、極めて薄弱であります、是は實に我教育界に取つて慨げかはしい事です。

教育の根底が既に斯んな薄弱な者でありますから、今日女子教育の淺薄に流るゝのも無理ならぬ事で、是では迚も完全な人物を作り出す事は出來ません、凡て形式的に出來て居る今日の教育では、一般に常識を備へしむる丈けの事は出來ますけれど、其以上の事は到底出來ません。

ソコデ私は、眞實人の母たり、人の妻たるに足る丈けの道を修めんとする人が欲しいので、敎へる人も習ふ人も、餘まり花を持つと云ふ事に、心を傾けぬやうにしたいのです、卒業證書を當てにして學問するやうでは、眞實の修養は覺束ないのです。

古今東西に渉り、尊敬す可き人物は隨分澤山ありますが、就中、私が最も感服に堪へないのは、彼のワシントンです、手腕も智識も勇氣もあの通りありながら、其心術の高潔なる一點に至つては、他の英雄豪傑中多く其比類を見ざる位ゐで、實に日月と光を爭ふと云つても宜しい、己れは國家に對してあれ丈けの大勳功を立てながら、少しも其功勞に誇らざるのみか、功名富貴を見る事唯だ眼前の塵である、是れ程の大人物がどうして生れたでしようか、其れを推究すると、全くワシントンの母がエライのです、其處で米國の國會で、ワシントンの母の紀念碑を建つる事が議決された、處が、其碑文にはドンな事を書いたらよからうか、是れが又一問題となつた、然るに其結局が面白い、何も書かず、唯だ『ワシントンの母の碑』是れ丈で十分だと云ふ事が、滿場一致で可決せられた、實に適當な碑銘ではありませんか、唯だ單にワシントンの母と云へば、其母の偉大な事は、云ひ盡くされて少しも餘ます處がない、其れ以上には、ドンナ

大文章家でも、言ひ顯はす事が出來ない、然るに其のワシントンの母と云ふのは、どれ位な氣高い人であつたかと云ふに、ワシントンが國民から推されて、米國の大統領となり、功名世を蓋ふに至つたのにも拘はらず、彼れは七十有餘の高齡で、猶ほ田舍に在り、汗水垂らして農作に從事し、ワシントンの功名は恰かも他所事のやうに、殆んど與り知らざるが如き有樣であつたのです、鄕人がワシントンの功名話をして、彼の母を祝した時母は答へまして、私の子息は善良である、又親切である、ダカラ決して國家に對し、不忠實な事は致しますまいと、實に味ひ有る言葉ではありませんか、彼れの母の偉大なる心から見れば、ワシントンの功名は寧ろ通常の事で、別にエラクも何も無かつたでせう、斯くて彼の母は、猶ほ一心に農業を勵げんで居りますから、或る人が之に忠告して、ワシントンもあれ丈けの人となられたのに、ソーわくせくお稼ぎなさるにも及びますまい、お年もよられてゐるのに、少し骨休めなされてはどうですと云へど中々承知致されません、イヤ忰も追つ附け歸つて來ませう、あれも長い間、國家の爲めに苦勞致しましたから歸つたら、セメテ一年なりと、骨休めをさせたいと思つて、こうして稼いで居るのですと申しましたア、此一言を味つて御覽なさい、功名富貴唯だ是れ塵ほどの價ひも無いではありませんか、是れ丈けのエライ母があつたればこそ、始めてあれ丈けのエライ人物が出來たのです。

ソコデ、今日のやうな淺薄の教育で、ワシントンの母のやうな、エライ人物を作り出す事が出來ませうか中々思ひも寄らぬ事です、然るに昔はソウでなかつた、昔の我國民は、別に何も取る所は無かつたとしても、精神丈けは誠に立派な物でした、所謂る義の爲めには金錢などは塵芥程にも思はなかつた、其間の高潔な心事は、近松の淨瑠璃にも唄つてあります、仁義忠孝の道さへ立たば、まつそう飯の切米も百萬石にまさりしとは知らざるかなど、誠に凛乎たる氣象が顯はれて居るではありませんか、足利氏の十三世と云

へば頗ぶる亂脈を極めた時代でした、然るに其間ですら賢婦人が隨分顯はれて居ます。
女子教育は今日誠に隆盛を極め、府下無數の女學校は、何處も女生徒を以つて滿されて居ます、然るに斯く教育の盛んな割りに、賢婦人の顯はれないのはナゼでしよう、是れ全く前申した通り、教育の仕方が凡べて形式に流れて、精神を缺いて居る結果です、其れで私は望むのです、父兄も生徒も、どうか花を持つと云ふ事を止めにして、極々着實な考へで、學問をして貰ひたいので、學藝が出來て、唯だ生意氣になる計りでは、女子は教へぬ方がましだと非難さるゝやうになります、是では折角の教育が、唯だ害物になる計りで、何の用にも立ちません。
それで私の學校では、此月から、料理課と看護課とを設けましたが、是れは皆な家庭に切實な事計りを教へる積りで、教師も亦た非常の熱心を以つて教授する積りです。

（此一編は去る十一月十四日神田青年會館に於ける女史の演説を筆記せしもの文責は凡べて記者に在り）



東洋的婦人觀

土肥羊次郎

男女同權論の本家本元たる、泰西各國に於てすら、……婦人は深遠の觀察力なく又た連續的觀念なし……と云へる語がある、如何にも婦人に對して、一種侮辱の音を帶ぶるらしく、甚だ不愉快に聞かるゝであらう。去り乍ら、仔細に詮索すれば、強ち女子は男子の奴隷、或は玩弄物として生れ、到底平等の自由を握つて、社會に騈馳するの資格なきを意味するにあらずして、寧ろ男女其の體質を異にし、其の稟性を別にせる結果、即ち其執る職業に於ても自ら差の存すべきを道破せるもので、決して絕對に男性を優勝視し、女性を下劣視し了つた譯ではない。佛蘭西のラブラジエーは此の點に於て、最も穩當に解說して曰く、……凡そ婦人を教育せんには家庭の實務を重んずべし織物、裁縫、料理、經濟、牧畜等則ち重要の課目なり……と、知るべし、男女兩性が造化に稟くる者不同なるに伴ひ、即ち其の執る事業に於ても、內外各々畛域を異にし、互に其の守るべき所を守つて、家庭の平和を增進し、社會の基礎を確立するに於て、忘るべからざる工夫に關するを。

元來、社會組織の大本理から論ずれば、苟も人間たる以上、男子たると、女子たるとを問はず、齊しく一箇單位を爲すに於て、固より優劣輕重の別がない、然るに東洋一般の風習として、女子は全く男子の附屬物、厄介物、玩弄物たる如く取扱はれ、而して女子も亦た之を甘んじ、自ら輕んじ、自ら侮り、徒らに媚を獻じ、哀を乞ふて、男子の庇護的助力の下に、腑甲斐なくも一身の運命を托し、男子の強制的頤使の下に、理非を擇まず盲從するのは、兩性本位の原則上、不條理至極の沙汰である。

若し夫れ兩性體質の差異、若しくは職務の類別に至つては、ツマリ造化自然の配合で、男子其の者の行動が、常に外進的、主動的、命令的なるに反し、女子其の者の行動が、常に內守的、受動的、服從的なるもの、畢竟家庭の構成上、若しくは社會の組織上便宜の分擔を課せらるゝに外ならずして、之を以て

女子は男子に對し、先天的に奴隷視さるべき運命を擔り、玩弄しさらるべき義務ありとするは、誤謬の大なる者である。
論者或は將に云はんとす、遠く古來の歷史に徴し、且つ又た現在の實態に見るに、東洋に於ける女流の勢力とて、却々侮り難き者がある、然るに今口角沫を飛ばし、殊更八かましく辯難を費すは、恐らく杞人の憂に屬せずやと、論者よ、併し記臆せよ、論者の所謂る勢力は、一種の變式的の者で、純正にして嚴格なる意義の上より、正當に認むべき眞箇の勢力健全の勢力でないと云ふとは、特に記臆を願ひたい。言を換ゆれば、東洋に於ける女流の勢力は、所謂る牝鶏晨を告ぐるの類で、要するに男子其の者が、色に迷ひ愛に溺るゝの結果、知らず識らず狃れ狎れて不分の慾望を擅ふに過ぎない、論より證據、女子を寛縦して爾か振舞はしむる所の男子も、男子を無視して爾か振舞ふ所の女子も、共に其の主意ありやと問はゞ、茫然自失答る所を知らぬ者、比々皆是の有様である、是れ世に彼れが所謂る勢力の、曖昧にして根據なき好證左ではないか。
綠鬢一髪大象を繋ぐ、狂げて勢力と云へば、云ふべからざるにあらじ、國を傾け城を傾く漢の武帝、雨となり雲となる楚の襄王、此の句以て婦人の勢力を形容し、婦人の位置を説明せる者としたならば、其の愚や及ぶべからずである、而も吾人が理想上に於ける、完全なる婦人の勢力てふ者は、造化の眞意に胚胎し、天地の正理に恪遵し、所謂る人格の相互尊重權より、公平に認めらる女流の價値に外ならず、從つて彼の纎弱なる嬌婦艶娘が、春暦秋波、一送一迎、以て一國の帝王を飜弄し、以て滿路の痴夫を醉倒せしむる如き淺浮なる一時の情的基礎に置かれたる、婦人萬能の狂ひの叫びは、之を勢力と云はんよりも、寧ろ一種の魔力として、吾人の大に排斥する所である。
世紀の進むに伴ふて、萬事改新の曙光に向ひ、健全なる時代的精神の下に、總ての發展を遂げつゝあるの今日、東洋一般の婦人觀のみ、獨り舊弊の不理窟に葬られ、依然として機軸を一轉する能はざるは、頗る憾むべきである、即ち所感を記し、大方の醒覺を促す。



マダム、デボルド、ヴァルモール

菊池

四十年の間佛蘭西の一婦人にして優美、悲劇、しかも芳氣鮮かなる詩篇を作りて時人を驚歎せしめたるあり、名作は屢男子のそれよりも、人口に膾炙せられ、大家はいづれも感きはまれる言辭をもて、この光榮ある婦人の才能を稱贊しき、ヴィギーは「卓絶の機智よ」と讃歎していやを申べ、ブリズーは「金の鐘」と呼び、ウーゴーは「鬼神を泣かしむる女性の技倆よな」とやさしき響に耳を傾けぬ、そもこの有名なる詩文家を誰とかする、これなんマダム、デボルド、ヴァルモールにおなる。

マルスリヌ、デボルドは一千七百八十六年六月二十日ドゥエに生まる、家貧うして父は粧飾畫を職とし、性質誠實にして才氣もあれば、人々の信用厚く、市民に選ばれて、貧窮者の保護管理人となりけるに、程なく革命の亂起りければ、貴族の依頼を受けて其の所有物を保護し、證書をば己が家の敷石の下に隠し、さて世の治まりたる後悉く所有者に復したりき。

父は元來寺院を粧飾する畫工なるに、革命によりて寺院閉鎖せられたれば、職を失ひて貧困一方ならざりき、命すら繫ぐすべだにあらぬを、かくとし人に語りもせば、それ王黨よと直に繩目にかけて斷頭臺に導くべければ、憂愁畏懼の氣色を見えしめじと強ちに表を繕へり、されば本意ならずも民黨の倶樂部に交らひたるとありしも、偏へにそが恐ろしき怒に

[illegible]れざるがためなりき。大宴會の催ありけるに、七歳なるマルスリヌは眞白なる衣服を着て、わざやかなるリボンを帶に、髮の間にほのめかし、群集の中に立ちて、爽かなる辯舌もて、滯りもなく、民の光榮を演ぜしに、人々搏手喝采し、争ひて少女を撫愛し菓子など與へたり、「我れ一生の間たゞ一度政事に交らひし」と記したるもこの日のことなりけるよ。夙に慧敏なりしマルスリヌは獄屋に苦しみける兵卒を見て、稚な心に哀れを催したれば、兄なるフェリキヌと謀りて曉に起き出で丶平等主義を得られんものとパリを指して急ぎけるに、ふと叔父に出逢ひけり、當年八歳に成りたるマルスリヌは兄とたゞ二人家路を背に知らぬ旅路を辿ることの不審しうて、叔父はその由を尋ねたるに、しか〳〵と答ふれば、折しも側を過ぎる大佐とは親しき間柄なれば、兒等の義俠を語り、はた兵士の放免を歎願しけるに、大佐は質朴なる兒童の心ざしに感じ、やがて兵士を解き遣りぬ。

貧はます〳〵迫りて家族の困難例へんやうなし、父の兄弟に印刷所を有てる人ありて十萬餘の家産を相續せしむる嗣子なければ、デポルドに若し信仰を改めて新教を奉ぜば、悉く財產を與ふべしと交渉しけるに、父は熱心に公教を守る信仰厚き人なりければ、一家擧つて伯父の求めに從はざりき。巷に物乞ふばかり貧窮に陷るとも金に信仰を賣らず、財產に精神を朽ちせずと心のみは勇めども、今日を送りて明日をいかにせんと集ふ親子は首を傾たげ、手を拱きて思案にくれぬ、はては一家飢に死なんか、門並に立たんか、吁哀なる運命に達せりや、殖民地なるグアドルップに移住せる親戚の今は多く財產を積みたりと人の語るを聞き、母自ら赴きて事情をも打明けてん、いかにもして資金を借用して來んものと、姑と夫に三人の子を殘してマルスリヌを連れ、盡きぬ涙の別れの袖、二人は米國指して旅立ちぬ。

行く先遠き旅路にうち出で丶リールに達せるが、こ

の地にて知己の女優に出逢ひたるに、旅費を求めんにはしばし娘に劇を演せしめなば、そが收入によりて渡米の金を得らるべし、と勸められぬ、まことマルスリヌは十三の少女なれども怜悧にして擧止大人めき、愛嬌含める顔はせ、音樂に適へるやさしき聲は技藝界にそが發達を確かめたり、背教せんは心苦しとて、かくも貧困に陷りたるに、こたび娘をしも舞臺に上らしめ、人の刺毀に露さんはさすがにつらしと母は涙にくれぬ、さりとて旅金を求めん道もあらねば自ら娘を監督せば心迄も俳優根性に陷らざらめ、さなり、と己が心に頷き、潔き乙女の役を擇びて演劇に出しぬ。

穎敏なるマルスリヌは上達すみやかにして所々演劇に雇はれ、母と共にボルドーに赴きけるが、雇主マルスリヌに配當金を與へざりしかば、嚢中を叩いて暮しけり、さてかくてあるにあらねば、或日マルスリヌは懼る／＼給金の幾分を賜はれよと請ひたるに、雇主憤り、つれなくも少女の頬を打ち、罵詈して歸らしめぬ、マルスリヌは涙を押へて家に歸れるが、パンだに買ふべき錢すらなく、母子飢渇に堪えずして氣絶しけり。

朋輩なるチゼ孃はかくとも知らず來り母子の倒るゝを見て驚き、ひたすら看護に手を盡して、有りし金を與へたり。

友に救はれ、やう／＼蘇生したるマルスリヌは日ならず劇場にあらはるゝを得、糊口を凌ぎけるが、ある名優を讃美せんと詩を作りて送りぬ、こはマルスリヌ十四歳のときなりき。

やさしき少女は信仰もまた熱かりしがゆゑに、バイオンヌのある夫人情をかけ、母子を家に寓せしめて旅費さへ與へたれば、感謝してグァドループへと出發しぬ。

海路遥けき本國を離れグァドループに上陸しけるに、暴徒起りて民は屠られ、家は燒かれ、賴まん徒弟も劔に斃れたるより、その妻すら己が隠家を求めて二人を保護する事はなか／＼に難かりけり。

たよれる徒弟は死にはて、惡疫さへ流行して死亡者數知れず、さすがの母子も落膽にくれぬ、母は旅路の疲れよりあへなく疫病を煩ひて身まかりたれば、船長の夫人マルスリヌを憐みて家に伴ひゆき、便船に乘せて佛國に歸らしめぬ。

マルスリヌはリールに赴き女優を訪れて母の死をはじめ旅路のさまを語り出でたるに、女優いみじう同情を表はし、旅費を調へて故郷に歸らしめぬ。

ありし古の影だになく、我が家はます〳〵窮困に陷り兄は軍隊に入りて活計の手助をし、父と二人の姉はかすかに煙を立てたりき、母君を他鄉に殘しまつりしことの悲しさにとマルスリヌは泣き伏して之語り出でられず、父子はたゞ夢かとばかり茫然たり。

マルスリヌは將來に理想を有ちけるが、家窮し、慈母さへ失ひたれば、さうなく俳優の中間入りをして自らは節儉を守り、父を養ひ、二人の姉をば己が側らに招きて衣食を與へたり。

藝能いよ〳〵上達しければ少女十八歳の時パリの大劇塲（Opera-Comique）に招かれ音樂をも學び、金鐘の反響とも云ふべかりし聲のうるはしさをもて、頗讚高かりけり。

三十五歳にして俳優ヴァルモールと結婚し、二人の女兒を擧げたれば、劇塲に出でず、家に在りて母の義務を盡さんと敎育に意を注ぎぬ。

かくてデボルド、ヴァルモール夫人は家事の暇には詩文小說を作りて書をあまた著はし、當時有名なる詩人文家者ラマルチヌ、ウーゴー、サントブーヴ、チヱ、バルザック、ラマンチ、ミシユレー及び音樂美術の大家など悉く夫人と交際を結べり、普佛戰爭の後、獄に繫がれたる人々を救はんと皇后マリ、アメリに書を呈し、またナポレオン三世に書を送りて慰め、就縛せられたるものを見舞ひたり。

夫人はげに不幸の人にして少きより老ゆるまでの年月はこと〳〵く犧牲に供せられたるも、神を信ずること深くして艱苦のつらさに失望せしとだになく、柔和信實をもて人と交はりたれば、女優の間にいと

徳すぐれたる婦人と仰がれたり。

一千八百五十九年身體頓に衰弱を來たし六月晦日遂に病床に斃れぬ。

葬儀は質素なれど、マルスリヌの光輝ある名聲は、そが著書と共に長く傳はりたり、一千八百九十六年ドウエの市民は詩人デボルド、ヴァルモール夫人のため、公園に立像を建立したりといふ。

松浦りち女

西村梅軒

享保の頃なりし。下谷金杉に住みて古金物商買をなし世を渡たる丹波屋八兵衛といふもの丶娘におそのと呼ぶものあり。十三歳の年より松平紀伊守信庸の息女にみやづかへしける。この息女幼少より心たけく、武藝をはげみ、馬術にも通じ、世に類ひ少なき女性なり。ことはりかな、母は名高き加州中納言利常の孫にて、漸く物心つきたる五六歳の頃より武道の修練をはげませたりとぞ。されば使ふ女にもみな劍道馬術をならはせ、平常腰物を佩させ、打かけさげ髪にて居らしめける。か丶る家風に養はれければその身も疾より兵法をならひ、武具を嗜みけり。その後息女永井伊豆守直信に嫁ぎて内室となりたれば、その息女に附添ふて近習となり名をおりちと改めぬ。然るにりち女は生れ得て利根才智のものとて、よく内室の意に愜ひければ、給金の外に金銀衣類などを戴だくことも珍らしからざりし。かくて數年を暮らしける程に、内室懷胎するに及びしも、妊娠の婦女は身のこなし肝要なりとて、相變らず馬に乗り武藝を習ひすこしも怠たることなかりしが、乗馬の節はりち女つねに口を取りて大切に守護したり。さて内室にはその氏神たる神田明神へ安産の祈禱を爲さんためおりちを代參に遣はされけるが、その時りちはさげ髪かひどり大小差乗物にて屋敷を出で、やがて拜殿の脇に乗物を据へさせ、侍女に刀を持たせ、脇差ばかりにて神前に進み、靜かに代參の拜を行ひ、

目錄は若黨に相渡し、別當神主へ對面してそれ〲に挨拶したる後いとまごひして、拜殿より刀を佩して表門まで立出で、人形屋にて繪草紙、小人形など調のひ、此處より乘物に打乘りて歸へりける。參詣の男女之を見ていづれの武士の娘かとほめぬものこそなかりけれ。

りち女すでに三十歲近くなりしが、父は先き逹てみまかりしかば、母一人を弟と二人にて養ひ、やう〱貧しき煙を立暮らしぬ。然るにりち女容儀よく落附きたる性質ゆゑ、かねて人々妻に望むもの多けれども、内室之を離すことを惜み心の儘ならじ。時に奥向用逹の町人某媒酌となりて、りち女の母に對ひ之を貰ひたき由逹つて望みければ、この趣 内室に願入れしに首尾よくお暇たまはりしより、りち女は神田三河町に住みて伊勢屋又右衛門といふ仕舞物商賣をなせる有福なる町人と緣組することゝなりける。りち女元來武家に居りて生長し氣骨ある女ゆゑ、町人に嫁ぐことを望まずといへども、母先き逹て約束せしゆゑ是非なく嫁入りしぬ。内室この時支度金、手道具等かず〱たまはり、其の上家中小菅藤右衛門といふものを親分に定められたり。然るに婚禮の節もりち女は下げ髮かひどり大小を帶せるゆゑ人々いかゞに思ひけれども、慣るゝに從ひ町人の氣風にならんといひて其儘に濟ましぬ。かくて暫らく月日を送りしも、りち女は平日脇差を離さず、武士氣いささか弛むべくも見えざりければ、町家には不相應なる事なりとて、又右衛門も無據あかぬ別れを爲して暇を遣はしける。然るに當時本所に住みて千石を食める松浦源吉といふ旗本武士、りち女の事を傳へ聞きて呼迎ひたき由傳手を求めて申込みければ、これ幸の事なりとて、直信夫婦にも早速許諾され、此度は親分を替へ、松浦彥右衛門といふ用人の娘分にして嫁がしめしが、これりち女に取りては誠に本望の至りなりき。

ある時麴町一丁目より出火、また番町よりも火災起りたる事ありしが、折節西北の風烈しくして土砂を

吹揚げ、猛火八方へ飛び、遂に外櫻田邊まで燒け出でければ、處々方々の早乘さながら櫛の齒を引くが如し。この時りち女夫源吉へ向ひ申しけるは、

『しばらくお暇下され度し、直信の屋敷わやうく、奥方の身の上さへ心元なし、何卒様子見屆け來り申し度し』

源吉之を聞きて應へけるは、

『こは怪しからぬ事をいふもの哉、遠方といひ、大火といひ、女の身にてかゝる騷動の中へ行き、夫れのみならず、其方參る内に先方燒失するやもはかり難し、さすれば何處方と尋ねやうもなかるべく、かたぐ〜以て無用ならずや』

りち女重ねて、

『其の儀すこしもお氣遣下さるまじく、私一人乘馬にて參り、先方の安否相分り候はゞ、早速歸宅する樣致すべし』

と頻りに望みて已まざれば、源吉も心の内に決心する所やわりけん、

『さることならば其方の心任せにせよ』

とて强ひて拒みもせず納得したり。りち女痛く打喜び、

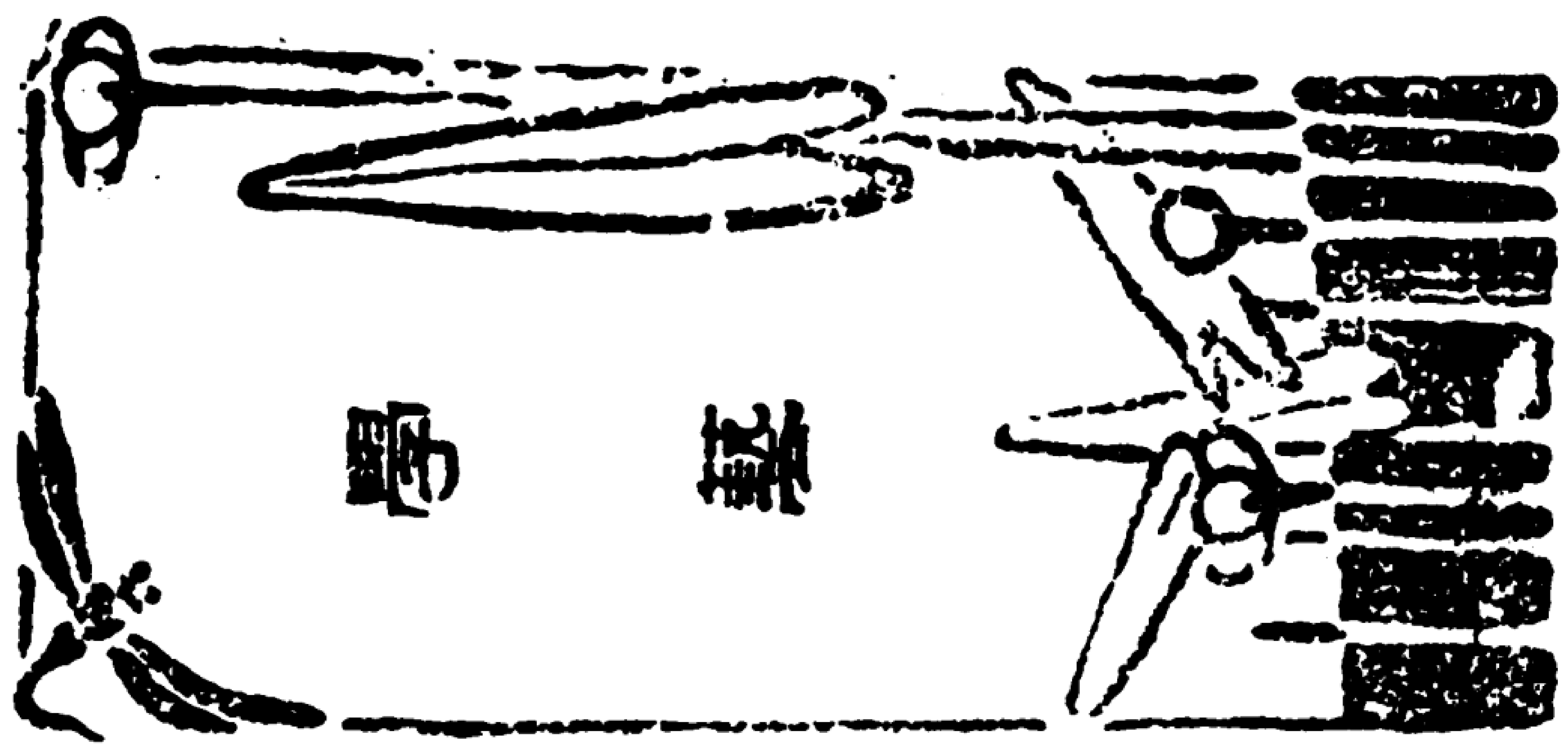
『さらば足速き口附二人、長刀持一人召連れ申すべし、早く馬用意せよ』

と云ひけるまゝ悠々と玄關に立出でける。その扮裝鬱金羅紗の火事羽織に、同じ色の胸掛、九陽の定紋茶緞子の野袴に、まへうらの五枚しころの頭巾を着、大小を佩し、馬引寄せてひらりと打乘り『口附の者追々に參れ』といひ捨てゝ門外に出で、途中處處にて馬に息を入れ、やがて日比谷門外へ乘出し輪を入る處まで驅附けたり。振返へり見れば、跟隨ふ家來は源吉近習の侍にて、一人は長刀を持、二人は口取となり、番所より水を貰ひて馬の口を洗ふ。りち女怪しみながら『何として其方達は此處に來りしや』と問ひければ、侍等『主人には內密の單騎にて驅出されたるを氣遣に思ひ、私共にお供仕るやう仰付けられ參りたり』と答ふ。りち女之を聞きて微

笑を催しながら『开は大儀の至りなり』といひつゝ馬頭を立て、一散に直信の屋敷を指して馳せつきける。

此の時永井伊豆守直信の邸宅も最早危きまで烈火吹掛けゝれば、侍數多出でゝ門をかため、梯子よ水よと上を下への騒動中なりしが、松浦彦右衛門りち女の來れるを見て、奥方は只今當所より濱町の屋敷へ避難させたり。併し間長からざれば、今頃は木挽町邊をお越しならんといふ。りち女心得たりと乘返し山下町の方へ馳向ふ所に、猛火已に松平信濃守、阿部伊豫守の兩邸に飛び移り、黒煙の內に火焰まじりて八方を燒拂ひ、その勢の怖ろしさ云はん方なく、滿天爲めに曇りて物の色も見えざりけり。りち女三人の侍に向ひ『押掛けの房に取付來れ』といひつゝ悽まじき火煙の裡を難なく乘拔けるが、直信の奥方馬上雄々しく近侍の女四十餘人を召連れながら、今や木挽町廣小路へ着し暫らく休息し居る處へ馳附きこれぞと見るより馬より降り、頭巾脫ぎて奥方の馬の脇に近づけば、直信奥方も馬より降りて挨拶せんとするに、りち女馳附け腰を押して降ろさず、奥方頭巾を脫ぎて會釋すれば、本を忘れず、主君と思ひ、安否を伺はん爲め參りたる趣委細に述ぶ。奥方之を聽きてりち女が舊誼を忽がせにせざる眞心に感じ、御家人の禮儀にて慇懃に挨拶ありける。奥方此處より更に濱町屋敷へ向ひければ、りち女も後乘りして濱町へ送り乘らせ、やがて用事相濟みたればお暇申して本所の自邸に歸へりぬ。馬上の扮裝いかにと見れば、長刀を右手に持たせ、二人の侍を左右に立て、頭巾をぬぎて侍に持たせ、風に亂だるゝ黒髮を差櫛にてかき撫で、砂塵の爲め顏汚されたれども生來の艶色しのぶべくもあらず。大勢の往來する中を侍と噺しながら泰然として行く樣子を見『天晴れ大名の奥方ならん、燒出だされ立退き給ふ所ならん健氣なる振舞かな、武家の女性はみなかくあらんこそ』と、往還の男女皆ふりかへり口々にほめぬ者てそなかりけれ。

(完)



TRANSLATION OF JAPANESE INTO ENGLISH.

By A. Miyamori.

和 文 英 譯

No. 2.

貯 蓄

人には思ひがけなき事起りて．俄に餘設の金錢の入用なることあるものなり。故に常に無用の費を省き．金錢を貯蓄して萬一の變に備へんことを謀るべし。

SAVINGS.

In one's life sometimes occurs an unexpected event and in consequence suddenly arises the necessity of extra money. We must, therefore, always avoid nseless expenses and save money in order to meet such emergencies.

No. 3.

女子の體育に就て

若し「女子敎育に就て何か第一大切なるか」と問ふものあらば我は「體育なり」と答ふべし。「第二の大切なるものは如何」と問ふものあらば我又「體育なり」と答ふべし。我が帝國婦人の最大缺點は身體の柔弱なるにあり。其他品性上に於て多くの缺點あれども槪して體育上の缺點之れが原因たらずんばあらず。世の女子敎育に従事する士は熟考を要す。

ABOUT THE PHYSICAL TRAINING OF WOMEN.

If I were asked, "What is the most important thing in the education of women?," I should answer, "Physical training." And if I were asked, "What is the next in importance?," I should again reply, "Physical training." The greatest weakness of Japanese women lies in the delicacy of their health. They have many imperfections in character, but, generally speaking, most of these are due to their physical weakness.

Physical development is a subject which should claim the earnest attention of all who are concerned with the education of women.

No 4.

櫻　花

櫻花の美なることはいづくも同じけれども．我國の櫻は最も美はしくして世界第一と稱せらる。

櫻花には花びら五枚ありて一重なるものあり或は花びら十枚ありて八重なるものあり。

日本には櫻花の名所多けれどもわけて名高きは大和國の南にある吉野山なり。

THE CHERRY-BLOSSOM.

The cherry-blossom is a beautiful flower in every country, but that of Japan is considered the most beautiful in the world.

Some cherry-blossoms are single with five petals and others are double with ten petals lying one upon another.

There are in Japan many places noted for cherry-blossoms, but the most noted is Mount Yoshino in the south of the province of Yamato.

MAXIMS.

格　言

5. A man conducts himself abroad as he has been taught at home.

人は家庭にて敎へられたる如く社會にて行ふものなり。

6. A man should never be ashamed to own that he has been in the wrong; it is but saying, "I am wiser to-day than yesterday."

人たるものは誤に陷りたるを自白することを耻づべからず．之を自白するは「余は今日は昨日よりも賢くなれり」と言ふに等し。

7. A man who displays his own merit is a fool, and a man who does not know it, is a fool.

己れの長所を衒ふものは愚人なり而して己れの長所を知らざる者も愚人なり。

8. The defects of the mind, like those of the face, grow worse as we grow old.

精神の缺點は顏面の缺點の如く老ふるに隨て益惡しく成るものなり。

9. Self-conquest is the greatest of victories.

己れを制するは最大の勝利なり。

家政學大要講義（續）

磯部武者五郎

三十一　調理法

食物の調理は偏頗せざる樣注意すべし、其の献立は海のものと山のものと取り合せ、肉類は蔬菜の類と取合せ、濃厚の物は淡泊の物と取り合せ、ありふれたる物は珍らしき品と取合せ、脂肪質蛋白質のものは澱粉質のものと取合せ、鹽味は砂糖の味と取合せなどするを以て宜しきを得たるものとす。

献立を定め然る後に料理に着手すべし、料理の目的は食品をして消化し易くなし滋味を生ぜしむるにあり、料理の大體についていへば汁の物はなるべく內に含む所の滋養分を外滲出せしむるを目的とし、煮物炙物等は其をして外に滲出せしめざるを目的となす。

三十二　加味品

食物の味を助くる品は鹽、醤油、味噌、砂糖、飴、蜜、酢、酒、味啉、酒油、鰹節、昆布、椎茸の煮出し汁等なり。

三十三　食時

食時は朝は午前六時より八時迄の間晝は十二時、夕は午後五時より七時迄に爲すべし。

食事と食事との間は五時間の隔りあるを要す、消化早き物を食しても三時間以內は決して爲すべからず間食は嚴禁すべし。

三十四　食量

朝食は極めて輕き物を食し、晝は稍重き物を用ひ、晩は一家經濟上許す限りの料理を爲して食ふべし、飮食物の分量は人々の職業勞逸に由りて異るべけれども、すべて八九分即ち腹八分目に飮食すべし、座業の人は少食を善しとす。

食後は十五分間位休息すべし、食後直ちに職業を執るときは折角食せし物不消化となりて胃病を起し身體の健康を害することあるべし。

（完結）



羽田三緒子

滄浪生

余は羽田三緒子女史を、主婦として稍完璧に近い人と思ふのである。

彼女は、さう名高くはない。併し彼女を知る人は皆いふ、彼女は主婦として一點の非難はない。武士的女房の面影は彼女の特色であると。

市井の巷に、萬人の口から、様々にいひ囃さるゝ花は、却つて人知れぬ野路に、雲をかけたる花に及ばない。時輝くレデイの中に彼女を觀るに時として、此感がする。

余は、今、彼女の面影を、少く描いて見やう。父は、國學者として名高い、故石河正養氏である。

石河正養氏は、石州津和野の藩士で、夙に我國國學の白眉として知られたる大國隆正の門に遊び、今の福羽美靜子と併び立つて、双璧といはれた。

偶々七卿落は演ぜられ、長州征伐の軍は催さる。而して、津和野藩は僅かに、壁一重を距てゝ、長州と相對した。

長州勢は、後方の山を占領して、二挺の大砲は、眼下に城市を下瞰して居る。

此時に於ける石河正養、羽田均等の働きは一方ではなかつたが、彼等は竟に長將高崎春太郎（井上馨の事）と交渉し一兵を血塗らずして、見事、此難局を切抜け、龜井家の社稷、依て以て名分共に全く津和野の生民、又其堵に安んずるを得たのである。

名木は二葉より香ばし、彼女生れ得て、活潑、才操又人を凌ぎ、芳名藩中に聞えて居た。

七卿落のあるや、父正養氏は、屢々窃かに、長州に彼等を慰藉し、傍ら慨世の志を抱いて他日の飛躍を期した。

かゝる人の家庭とて勤王の精神充ち滿ちて、武藝はいふまでもなく、歌道などは、壯んに奬勵せられた。是を以て、彼女、十二三才にして、已に、薙刀を見事に使ひ、和歌も可成りに遣つた。

津和野藩の勤王家、羽田均氏は、彼女の夫である。均氏に嫁するとき、母は彼女に一振の短刀を與へてかくいふた。

「萬一破鏡の嘆もあらば、これにて、自刄せよ」

されば、彼女は夫に事へて、琴瑟の調相合ずば、死より外道なしと思つて、嫁いだ。

武藝は出來る、文藻の嗜みは淺からず、夫れに鐵の如き一心を以て居る、女丈夫とは、これなんめりと思はるゝから、羽田均氏も甚たく、其爲人を愛し、どんな秘密でも、打明けて相談した。

「汝は、他の婦人とは違ふから、安心して、何でも談する」

かういふ言葉を以て、均氏が、其勤王運動に關する大事の事柄を話したさうである。で、夫均氏が上方に參り、兵馬の間を往來する間は彼女は克く、其留守をまもつた。

均氏は維新後、勤王の一人として、今上より叙位の沙汰を辱ふしたが。不幸天壽なくして早く世を去られた。

均氏亦石河福羽氏等と共に歌道を好まれた。

虫の音も千草も枯れて行秋の
　哀は月に殘りけるかな

とは氏の詠歌である。

百世の苦樂をかけたる夫に先立れて、さびしい身となつてから、彼女の眞價は、始めて善く發輝された。

「千里の道は一歩よりす。」「塵も積れば山となる。」彼女は、此二箴規の上に、凡ての家政を處理したのである。

些少の奉還金は、元より、夫均氏と出來能ふ丈、巧みに活用して居た。

而して未亡人となつた彼女は、これより非常の決心と勇氣とを以て、一切家政に當つた結果、十年内外の間に、中等以上の資産を造り、今では赤坂一ツ木に、名打たる財産家となつて居る。故に羽田家の富は全く彼女の一厘を粗末にせないといふ。甚だ倹素の美德によりて造られたのである。



彼女の居間には、幾個となく、紙撚で綯ふた縄の束がある。此紙撚の原料は、皆状袋の、故書を細かく斬つて仕舞ひ置き、雑談や何かの閑々に之を出して、手づから紙撚を拵へたのである。

恁んな、辛い仕事は、トテも輕薄な根氣のない今時の婦人には出來ない。

されども彼女は、克くいふ。何も好んで恁んな事を仕度くはない、けれども人は習慣で、根氣で拵へる仕事に慣れるとドンな辛いことにも堪へる。辛いことに堪へるでなくては、到底成功はしないと。

夏の日の暑いのにも、尚汗を拭きつゝ庭の芝生に、雑草を抜いて居る。

下女が、オヤ貴女がなさらなくてもといへば甚だ氣嫌を損ふ。彼女は、衣食住に不自由がないからとて、無爲惰眠するのは大嫌いである。それゆゑ克く庭男と一緒になつて、庭を掃除する。

亡夫均氏は、神として、家内に祭り、朝夕恭々しく之を拜し。子女にも、少しも之を等閑にさせない。

「生るが如くして仕ふ」とは克く古書にいひ傳へられたことであるが、羽田家に於ては全くこれを見る。而して何事でも、過去の談が始まれば、忽ち亡夫の偉なることを説いて、先づ子女に、家名を揚ぐることを奬勵する。

彼女は甚だ親族の義理合を思ふこと強くて、常に一家獨り榮へて、他家の零落するは、一門のため悲しむ可きことであるといふ。

此精神であるから、祖を同うしたものは、何處迄も根幹枝葉の集りて、一樹を爲すが如くに一門を譬へて、成る可く親族を引立つるといふ精神である。

であるから、彼女は、其家の女王なるのみならず、又全く其一門の柱である。

汚い卑しいといふは、非常の嫌いである。故に彼女に交つて汚い卑しい所があると、如何なる男でも容赦はしない。

ある高利貸が、金子の事ならぬ用事で、彼女の許に行くと、彼女は我を忘れて、

「汝は可い男だソンナ容色を持つて居ながらナゼそんなに汚い卑しい仕事をするのだ」

と叱り付た。

であるから、彼女を知る男は、其少しく傷持つときには、彼に會ふことを嫌ふ、蓋し叱らるゝからである。

彼女に一人の令孃がある。種子といひ、目下華族女學校に學ばれて居る。

其仕付は、嚴として武士風に育つるのであるが、又克く寛大なる自由を與へ、ある程度迄は、令孃が心の儘に伸びるやうにするのである。

令孃は學問も克く出來琴をも學び、殊に家政に心を傾けしめ、殆んど凡てを任せて居る。從つて裁縫簿記などに精を出さしめて居る。

令孃が緒琴の調妙に、月は高く庭の松梢にかゝる

時、此方は三十一文字を並べて、敷島の古を忍ばるゝのである。

長男如雲氏は五六年前、英國に遊學して居れたが彼の地にて大に覺る所あり奮然書冊を抛つて商業に志し、今は銀座の菊屋てふ罐詰屋を開いて居る。先年如雲氏に綾小路家より嫁を娶つたが、最早一男一女あり。琴瑟相和し、淸らかなる家庭は此上更らに融々たる光を加へた。

其次の福太郎氏は、高等商業學校を出でゝ、目下實業に心を傾けてゐる。

夕飯が濟んで、床に這入る前になると、彼女は、其召使者を集めて、孔孟の倫理を引いて、種々の教訓を與へる。

それで、此說法に感じて、其品性を高くし、給金などは貯蓄して、其一生の計を爲すものがある。爾うすると、彼女は、益々之を愛して、其身の立つやうに、十分面倒を見るのである。

女といふものは、餘程怜悧の人でも克く世間に疎いものだ。

されども、彼女は、なか〳〵分つて居る。男子の叶はないほどに上下の事情、果ては、經濟上の智識がある。故に株の買入、其他の掛引等一として、時勢に遲れては居ない。

ある人曰く、彼は女丈夫である。若し彼をして、男子たらしめたならば、立派なものであらうと、どうもさう思はれる。

彼女は、ハイカラが非常に嫌いで、女學生の口に喋々女權を說いて、而して其素行のよくないのを觀る每に、あれでは女ではないと嗟嘆する。

且つい ふ。女はやさしくして強いが可い。今のものは、強いやうで弱い。而してやさしくないと。

一家の經濟を克く有つことほど、女の務に大切なるものはない。彼女はそれに付ても克くいふ。今の女學生のやうに、大ざつぱでは、到底六かしい、一錢の金を貯うといふのと、亡くするといふのが一ヶ月にどれ丈の損益となると思ふ乎。自分の旦那樣が

立派に成功して、行くを祈る心あらば、先づ一家の經濟を克く有つといふことが第一の肝要であると。

彼女は、四五年前迄は、滅多に避暑には、出懸けなかつた。出入の者が、これを勸むると、彼女は嚴然として、細民を見よ、この暑いのに汗を出して車を曳いて、而して、其住む家宅は、風の通らない、臭い、裏通りに犬小屋のやうな長屋ではないか。我等は眺望佳なる庭を控へ、涼風を容るゝに餘あり。又何を贅澤に避暑などをする必要があるかといふのである。

然るに、近頃は、少しく健康が疲れて、二週間位宛、箱根に行くことゝして居る。

彼女は、忙しい家務を處理する傍ら、出來能ふ丈世に盡して居る。

已に永い間、婦人衛生會の幹事である。二三年前は、大に韓國留學生の墮落を慨き、同國の學生を食客に置き世話をして居た。此外に彼女は、愛國婦人會赤阪支部の幹事にて多數の慈善會に、入會し居らるゝ。

蠶業の歷史

有本松濤庵

近頃多くの先輩に會ひます度每に、女子の風俗が奢侈に流れる、といふ事を聽きますのと同時に、常に諸孃が身に纏つて居られる美くしい衣服……その美くしい衣服は何うして出來るものであるか、といふ事を御存じない方が澤山有るやうに見受けるのです。これは甚だ感心しない話で、頗る不心得千萬だと思ひます。で、せめては織物の糸を取る處の蠶を養ふ業は、何時頃始つて何うなつたか位の歷史は、我邦の女子として心得置くべき事と思ひます。

養蠶の歷史に就いても極く古い事は分りませんが、今を去ること四千五百年程前に、支那の皇帝が其皇后西陵氏に命じて、蠶を飼はしたと云ふ事が書物に

の載つて居ります。又彼の書經に桑土既蠶と云ふ文字もあり、又禮記の祭義に、天子諸侯、必有二公桑蠶室一近而爲レ之築レ宮、仭有二三尺一、棘牆而外閉レ之とあるのを見ましても、隨分古くから支那に養蠶の業が行はれて居たといふ事が分ります。

我國では、遠く天照大神が天御杵命と天八千子姫とに命じて、蠶を飼はしたとありますが、其後人皇十四代仲哀天皇の御代までは、此事が傳はつて居ません。で、丁度仲哀天皇の即位四年に、秦の始皇十一世の孫なる功滿王と呼ぶ人が、我國に歸化した時に、蠶種を献上したのを始とし、應神天皇の時に百濟の弓月君が、其國百二十七縣の養蠶家や機業家を連れて歸化した事は明かに歷史の示すところであります。

それから雄略天皇と申すは、非常に養蠶に御熱心な方でありまして、其皇后は御自身で蠶を飼ひ糸を繰り、其上に漢織呉織衣縫等の職工を漢土から傭ふて、機織までもなさいました。斯くて推古天皇の時代になりますと、最早下々の百姓にまで行はれまして、聖德太子は彼の有名なる憲法に、時を撰みて民を使ふは古の正典、春より秋の間は農桑の暇なし、若し時を違ひて民農業を爲さず、養蠶せざれば、何をか衣食せん、と掲げられました。

又孝德天皇は絹織を以て貢献に當らしめ、元明天皇の和銅四年には、敎師を四方に派して養蠶機織の業を敎へ、續いて醍醐天皇の延喜年間になりましては、實に非常なる隆盛を極めました。

處が朱雀天皇の末年から世が亂れ、天慶、保元、平治、應仁等の騷動が起つたゝめに、天下一日も安きを得ぬといふ有樣で、人民は疲弊し、遂に蠶業は中絶の姿となりました。然るに德川氏の時代になりましてから、稍勃興の有樣とはなりましたが、彼の名高い勤儉令の結果として、多數の百姓町人は半襟の外、絹物を用ふることを禁ぜられましたから、安政六年鎖港の制を解きますまで、たゞ單り奥州の上杉鷹山公、四國の野中兼山等が、慰み半分種繼ぎ半

分に行つて居た外は、殆んど火の消えた様な有様でありました。併し又彼の安政六年に横濱港を開いてからといふものは、形勢がスッカリ變りまして、遂に今日の盛況となつたのであります。以上我邦に於ける養蠶に就ての歴史でありますが、さて今の歐洲諸國は甚麼であるかといふに、これも丁度我邦の如に支那から傳つたのであります。即ち耶蘇降生紀元五百二十七年から五百六十五年迄の間（今より千三四十年前）今の土耳古の首府コンスタンチノープルに、第一世ジャスチニアン帝と云ふが居られましたが、當時支那は養蠶が非常に盛であつて、波斯國あたりまで絹糸織物を持つて行つて商買をする有様でした。然るに其時支那の法律として、若しも他國へ蠶の種紙を持出したものは殺



して了うといふので、如何に波斯王が種紙を望むでも、たゞ支那人の云ふ通り織物を高く買はなければならない始末でありました。それでも尚波斯は此商買の行はれるために景氣がよく市場の賑ひは他の眼に羨まるゝ位。で、土耳古のヂャスチニアン帝の如きも其一人で、如何にもして波斯の市場を我コンスタンチノープルに奪はうとして、百方手を盡して居りました。斯る時に土耳古の僧侶が支那から歸つて來て、國王が非常に養蠶を望んで居られるといふ事を聞き、幸ひ自分は永い間支那に在て、養蠶の事も機を織る事も覺えて居るので、直ちに國王に謁見し、其事を委細奏上に及びました。チャスチニアン帝は、大いに喜ばれましたが、併し養蠶を始めるにも種が無くては致方がありません、

と云つて固より支那の法律は容易に種紙を持出すことが出來ず、右つ左つ思案の結果、止むを得ず、窃かに此種紙を盜んで來るやうにと僧侶に命じました。僧侶は驚いたけれども、王命否み難く遂に再び支那に行つて、僅かばかりの種粒を自分の杖の中に入れ、二年を越へて國に歸り、ヂヤスチニアン帝に献上致しました。是に於て、僧侶が教師、國王は生徒といふ有樣で、一生懸命に養蠶を奬勵しましたから、暫くの間に國の東南部即ち今の希臘地方に廣まりました。これが抑も歐洲に養蠶業の初まつた起源であります。

夫から後百三年程の間は、他國に傳はりませんでしたが、紀元千百年から二百年までの一世紀間には、シヽリーの王ロージヤーの爲に希臘は亡ぼされ、其時に養蠶業も共に奪はれました。そこでロージヤー王は、職工の養蠶家をシヽリーやチープルスに移し、パレルモーの宮殿近くに工場を設けて、非常に奬勵したので、遂に伊太利半島に傳はつて今日の盛況となりました。

佛蘭西に傳はつたのは夫から後の事で、丁度紀元千三百四十年頃であります。其後ルヰ第一世は、鋭意其隆盛を計りまして、職工を伊太利から招いて之を民に敎へ、尚フランス一世やヘンリー二世なども隨分力を盡しましたが、併し佛蘭西養蠶の勃興とも云ふべきは、實にヘンリー四世以後であります。即ち彼のバルセレミー、ラフエマスとオリヴハー、ド、セレーの二人が王を扶けて蠶業の發達を爲さしめたといふことは、同國歷史上明かな事實であります。夫から後幾多の變遷を經て、遂に世界中に於て品位の第一等國となつた譯であります。

以上が養蠶業の歐洲に傳つた歷史であります。

尚終に一言云ふて置きたいのは蠶といふ字の事ですが、西洋には蠶といふ字は無く、我國で、かひこまたはかふこと云ふ訓を蠶の字に附けました時代は、慥かなことは分りませんが、かの萬葉集の養子の歌に、

垂乳根の母かかふこのまゆこもり
　こもれるいもを見んよしもかな
とあるのを見れば、此時代には既にかふこと呼んで居たことが判ります。（をはり）

刺繍

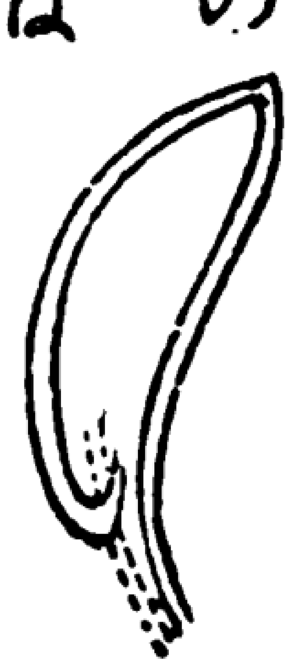
上村百世子

菊花金糸練習

此の形は前號に載せて御座いますからはぶきまして此綴ぢ方の方法を申上ます、是は矢張り前と同じく金糸二條を綴ぢますので、



此の圖に有る如く眞中の小さき瓣より初めます、綴ぢ初めは周圍から致しまして、中は前の綴ぢたる金糸とならべて、一度とぢ、中心の所まで致しまして、次の瓣に轉ります、次の瓣は

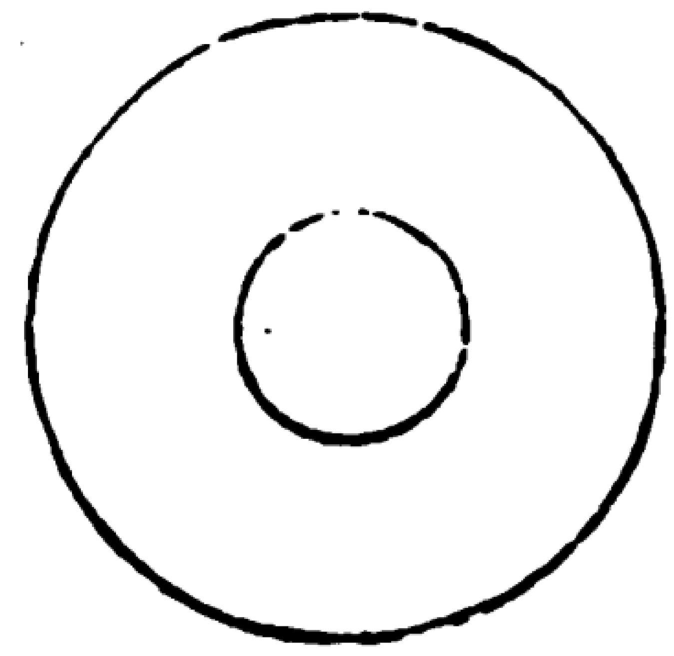


圖の如く周圍をとぢたる金糸の眞中まで參りませぬ中に、内側に返して二度くる〳〵と綴ぢ、後眞中に向つて致すのであります、大なる瓣に成るに從て、内側を綴ぢますのに、何度も返して致します、前に木綿糸の練習の時と同じく、花瓣の向き合ふ樣に、又花瓣が一點によく集合する樣に綴ぢ目の成る可くそろふ樣に注意して、綴ぢるので有ります、未色々綴ぢ方が御座いますけれども、之は一番手輕な縫ひ方で引出し縫と申ます。

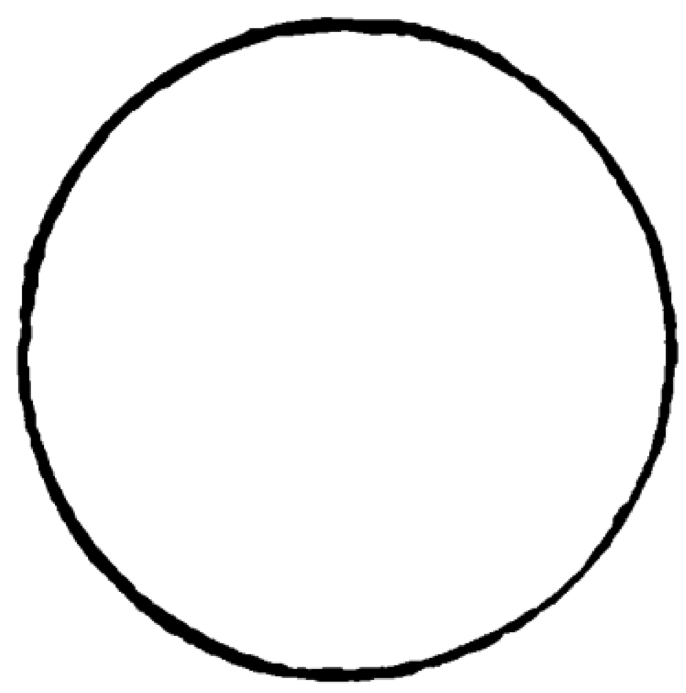
蛇の目金糸の練習及び丸形の練習

蛇の目を綴ぢますには、形を布片に附けまして内側の輪に從つて綴ぢ、周圍の線までぐる〳〵と綴ぢ、とぢ目のそろふ樣に注意して、綴ぢるので有ります。次に丸形は其眞中から初めまして、外側まですき間の無い樣に綴ぢるので有ります丸形の物はよく形ちの出來ぬもので有りますから其初めに注意してなさらなければ成りませぬ。

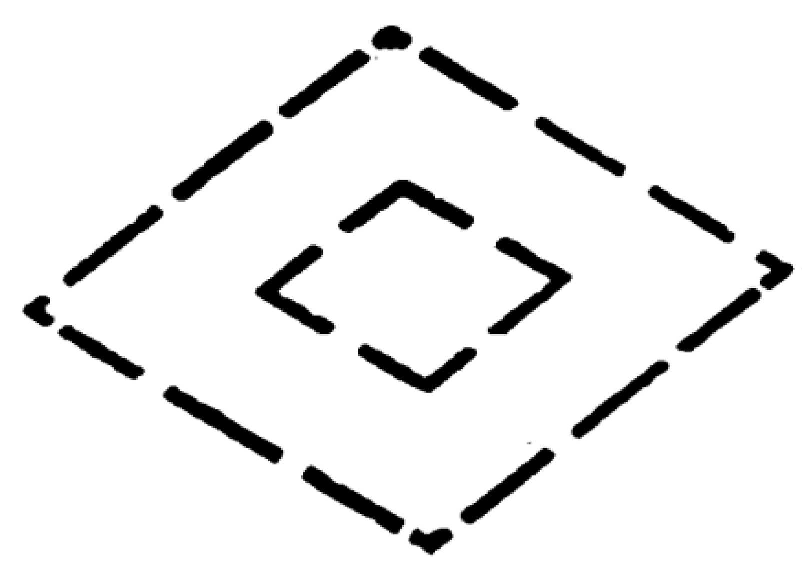
刺繡



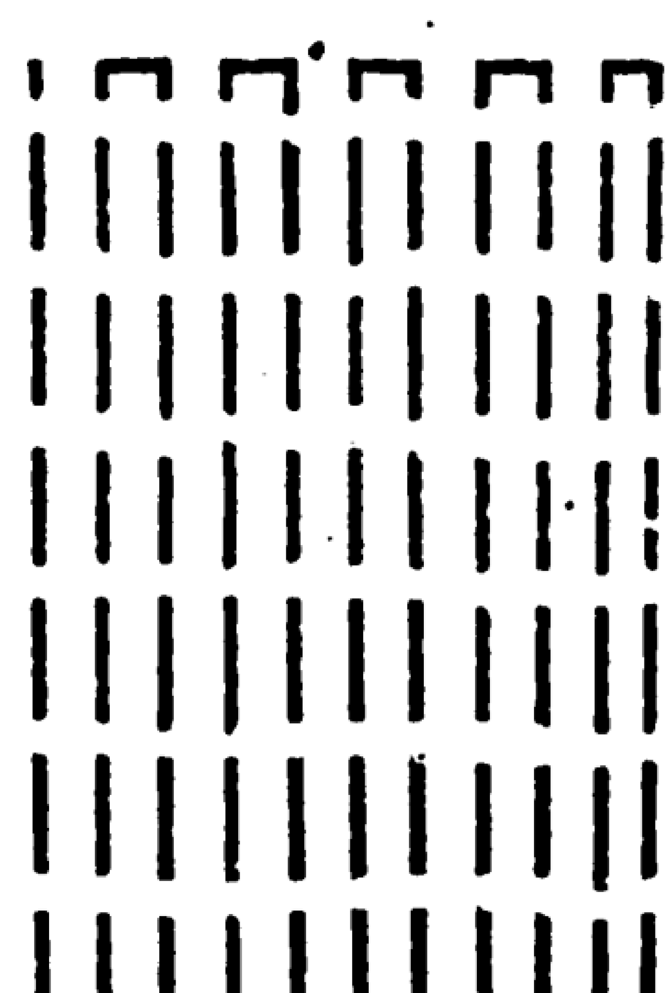
蛇ノ目



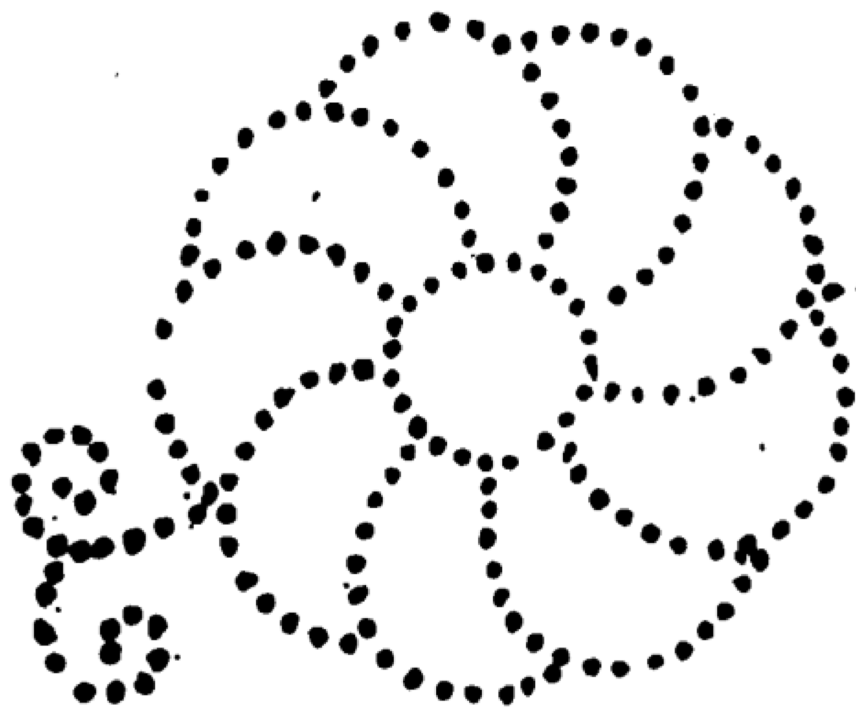
丸形



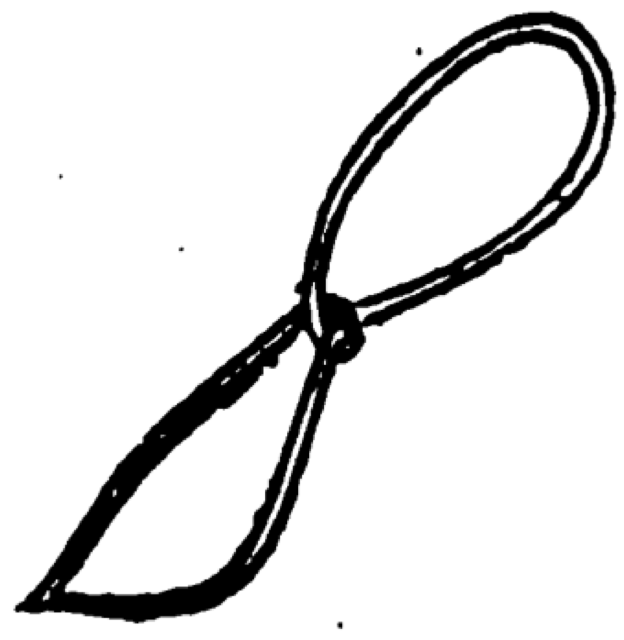
菱形



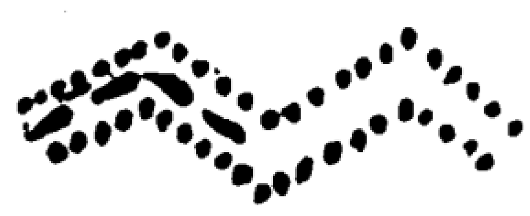
簾形



サカラ形



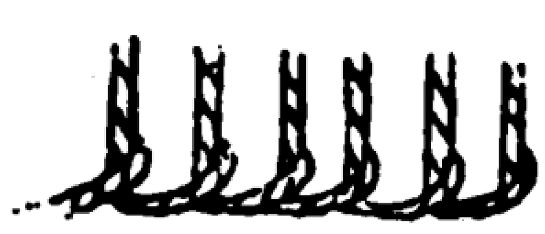
サカラ下ヨリ引図



スカーラ初



スカーラ形



スカーラ出来上リ



菊瓣ノ綴ヂ方

練菱形金糸練習

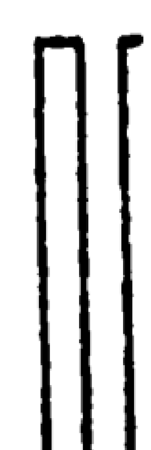
菱形は蛇の目と略似て居りますけれども角がなかなかむづかしいので有ります、是も矢張り內側の輪廓から初めまして、外側の輪廓通りに綴ぢるので有ります、



圖に有る如く、角の少し手前まで二條を綴ぢ、其角の所は金糸一本をとぢ、又其角は一寸はなれたる所にて、二條を共に綴じるのであります、よくメウチを用ひて、其形をなほし、角の目立つ樣に致します、是も成る可く綴ぢ目に注意して致さなければ成りませぬ。

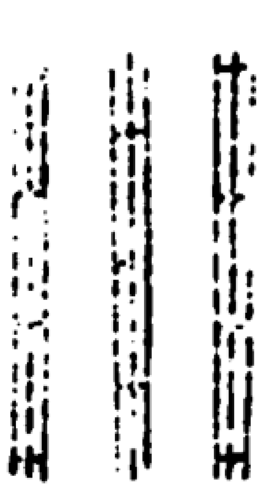
簾金糸練習

簾の綴ぢ方はなか／＼仕にくきもので有りまして、金糸の練習の中で一番むづかしい形で有ります、是がよく綴ぢられる樣に成りますと、綴ぢますものにおかしいものは出來上りませぬから、是は成可く多く數を致しました方がよろしう御座います、此の形は前に有りました角の多く有りますもので御座います、綴ぢますには



初メ

圖に御座います樣に形の初めから致します矢張り初めに金糸一本を綴ぢ次に同じ所にて二本を共に綴ぢ、次に角の極めて手前の所まで綴ぢて參りまして、角の所にて前と同じく一本をとぢ、すぐきはを二本共にとぢまして、次の角にて一本綴ぢ、際を二本共にとぢ、後は二本をとぢるのであります、二本づゝとぢます線はすこし長いのですから、曲りたがりましたり、角の丸く成りたがるものですから、注意して致します綴ぢ目は、簾の樣に成て居りますけれども、はなれて居ましても矢張り



互ひちがひに成る樣に致します。是で金糸は終りましたので御座います。

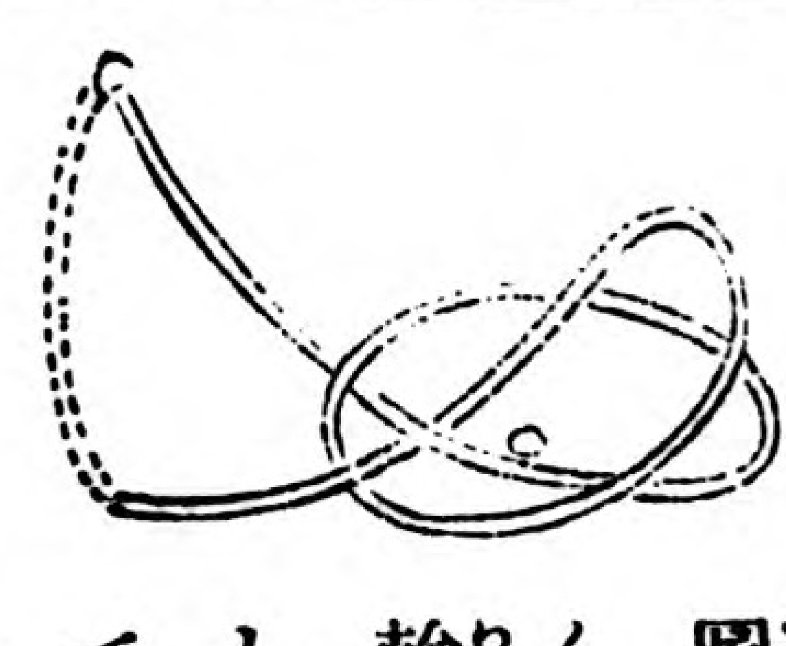
さがら縫ひ練習

さがらはいば縫ひとも、俗に申まして極手輕な襟を縫ひましたり、いたしますけれども、多くは手柄に

致します、是は練習で御座いますから、其方法だけを申上ます、形は當地には御座いますけれども、地方に成りますと無い事が有ります、左樣で御座いますから、間に合せならば、針の目度でつきて、穴をわけて致しますれば、一寸は間に合ひます針は矢張天太を用ひまして糸はかま糸で有ります、かま糸を四本合せに致しますより方にはあまいからいと申ます、あまいと申ますのはよくよりのかゝらぬ事を云ひ、からいと申まするのは極よりのかゝつたのを申ますから、之から糸のより方の時は、此の言葉を用ゐますから一寸申上て置きます、



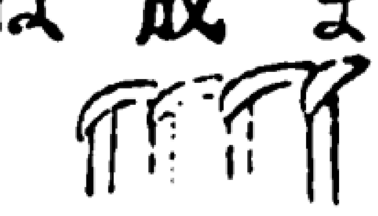
手柄のかま糸のよりはあまく致します、下よりは五六度にて上よりは六度ばかりに致しまして用ひます、前に左よりと右よりとの事を申て置ましたからはぶいておきます、此手柄は左よりに致します、ゆづ初め針留をいたしまして、圖の如く糸を輪に致しまして、圖に示したる丸きしるしの所を針にて掬ひましてそれをはなさずに元の形に入れまして、其針を下から引ます次第に、糸が短く成つて參りますけれども、其れをはなさずに終りまで持て居りまして、全



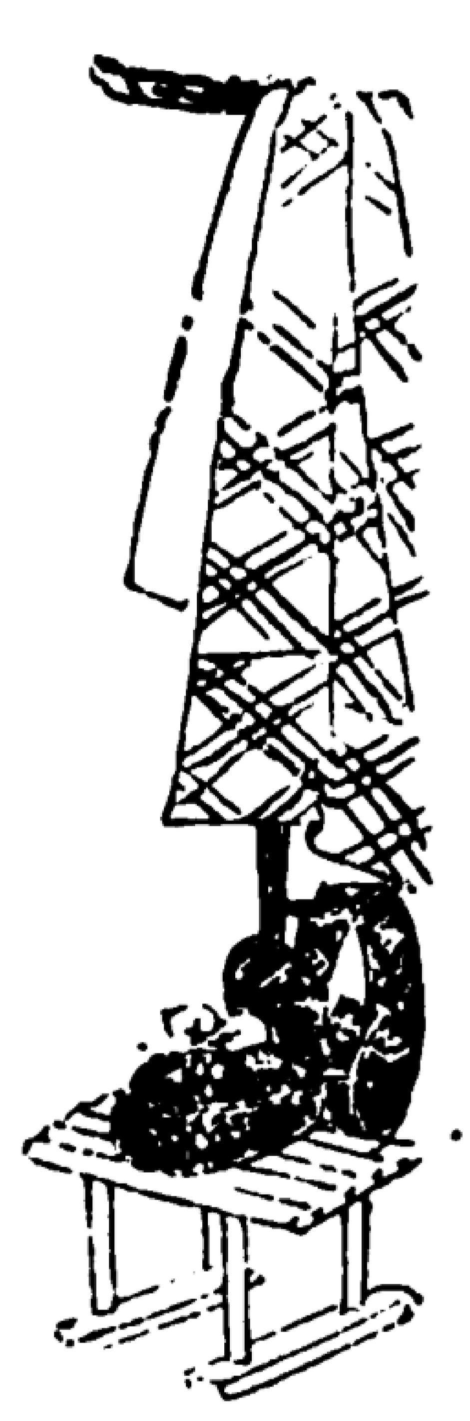
く引けました所ではなします、玉はなか〳〵そろひませぬもので有ります、そろへて致す樣にしたいと思ひますには、よく注意して針を入れます方向をどれも同じに入れ、糸の引方に氣を附けていたします、是は數の重るにつれて見よく成るもので有ります、次にハンカチーフの縫ひ方を申上ます、先づスカーラ縫ひと云ひまして、ハンカチーフのつまり端し縫ひなので御座います、スカーラ縫ひの糸は、矢張りかま糸で御座いまして左よりであります、是はかま糸の太さと細さとに由りて異て參りますけれども、凡そ出し合せと申まして、二本で致します、是もあまよりに致しまして、七度程に上下共いたします、形は圖に示したる如く山の如き形ちであります、之を布片に付けまして、針は太八を用ひて縫ひます、之はあまり裏表のよく知れぬ樣に致すものでありますから、糸の先きの結び目にいたしませずに、



圖に有る如く上より針を出し、下より出し、又下に出して上に出し、それを輪としてとなりに入れ、其間に下より針を出し、次へと入れ、又其輪の間に入れます、次第に順に從つて致します、曲ります所に成りますと外側の方の針目をひらかし内側の針目を込ませて致します、針目は成る可く注意してあまり込みましても、おかしう御座いますし、又あまり間がはなれても、いけませぬから適度に致します、輪として針を出し、すぐ其所にて圖に有る如く針を下に出し上へ下に二三度出し、表にて糸を切



す、糸が短く成りましたときはるので有ります、此の時初めますには前に針留をなしたる如く先きに留めました所から、針を出し次第に前の如くいたします。



だいどころ

女子美術學校講師　石井湧太郎

口取物

松風細魚
木目羮
玉くわゐ

入用原料品

五人前分

細魚大	五尾	長芋中	一本
くわゐ	十五個	細工紅	一ト匙
ザラメ砂糖白	五十匁	角天	二本
白味りん	一合	岩茸	少々
くちなし	三ツ	醤油	五勺
けし	五勺	食鹽	少し

第一、松風細魚

細魚は先づ水にて外部をよく洗ひ、鱗をふいて（ふいてとは取る事）頭を落し腹を割つて腹わたを出し、之れを開らきて中骨を取り、次に腹骨の付きたる黒き處をすき取りて尚よく水にて洗ひ鹽を少しく振りかけて置くべし、暫くしてのち此の鹽を洗ひ落して布巾を以て其の水氣を拭ひ、扨て之れを金串に刺すなり、此の金串の刺し樣は縫折とて、細魚の兩端を少しく折り返して串をうつものなり、之れを火にのせて白燒となし、其の身の少し焦げたる頃、刷毛を以て皮の方へてりを敷くべし此のてりと申すは醤油に味淋を何れも二勺づゝ等分に合せ、鍋に入れ火にかけ、半分程に煮詰めたるものにして、此の汁を煮つめる時鍋に焦げ付かざる樣に注意する事肝要なりと知るべし、然しててりを布きたる上より、けしを土器にて少し煎りたるものを振りかけるなり、之れを松風と云ふなり。

第二、木目かん

長芋の中位のもの一本をよく洗ひ三四本位に切りて、鍋に湯を沸かし、此の中に入れて充分柔らかになるまで茹でる、（茹湯は成丈け多くするをよしとす）三十分間位にして、芋の柔らかになりたる時、温湯の中に取り其の皮をさすりむきになすべし、此のさすり剝と云ふは割き竹へらの如き物か或は角なる箸の如きものにて其の皮を擦り剝

くを言ふなり、此の如くして皮を剝きたらば、小口より一分位に切り、之れを馬尾篩にて裏漉にすべし扨てザラメ砂糖百二十匁を水一合二勺にて溶解し、布巾にて漉し、又白角天の水に浸し置きたるを絞り上げ、之れを成るべく微細に刻みて、角天二本ならば水三合にて煮とかし、之れは尾馬篩にて漉す、砂糖汁と角天汁とを合せ、尚一度火上にかけて攪き廻すべし、此の時白味淋四勺を入れてよし、尚食鹽五分（極少量）を加ふべし、扨て前に漉し置きたる芋粉を此の汁の中に入れて充分に溶き緩め、尚固りわる時は馬尾篩を以て其の固りを漉し潰すべし、此の如くして少時煉り混ぜたる後。鍋を火上より下し、杓子にて充分攪廻しながら煽ぐべし、然して鍋の外側に手を觸れて試み、其の熱度の餘程さめたる時ブリキ箱、或は重箱等に流し込むべし、而して其の汁の幾分を鍋中に殘し、之れに上等紅を混入て、前に流し込みたる、其の上に横に細く赤縞を畵くべし、扨赤縞を幾本となく畵きたらば、竹箸を以て縱に（此の横縱を忘るべからず）其の縞を流動かすべし、斯くすれば恰も木目の如く出來得るものなり、但し餘り遲緩に過る時は角天固結て自由を得ぬ者なり。

第三、玉くわゐ　なるべく形ちの丸きものを撰びて用ふべし其の皮を剝き取手を取り水に十分間程浸してよく晒し、之れを摺鉢に入れて水を少し加へ、飯杓子を以てそろ〳〵と動かすべし、斯如すれば皮を剝きたる庖丁目を去りて形ちよくなるべし、之を湯の中に入れて二十分程茹るなり、其の充分柔らかになりたる時、鰹魚節の煮汁にて一度煮込み、後ち醬油、味りん、さとう等を加へ、甘味に煮上ぐべし、或は又茹たる時に山梔子を以て黄色を持せ、煮上る時に醬油を用ひずして食鹽を用てもよろし。盛り方、之れを皿に盛るには初めに流し固たる木目かんの充分温氣を去て固りたるを、形より拔き、之れを細長く切りて三卷（三卷とは三個と同じ）程を積み、前に松風さより一個、玉くわゐ三つ位にてよろしかろふと思ふ。

雜録

米國通信

澁谷馬頭

（一）シャトルの仲秋

『又無く哀なる者は斯る所の秋なりけり』と紫式部こそ書き置きためれ。シャトルには浮世の營み繁くて海は少し近けれども、波の音は夜晝絶間なく行きかふ馬車電車の響に分れて、異郷にさすらふ身もいとど更け行く秋を知らず。

日漸く暮れて、圓かなる月の花やかに、レニヤの山邊に差出るを見て『今宵は望の夜也けり』と思ひ出で、暦を開き見れば、一日おくれて十六夜にぞありける、月の光に今日の新聞を取りあげて、大きなる文字を拾ふ、巴里發の電報は『露國は取かへばやを日本に申込みたり』と知らせ來りぬ。

斯る程に、いと分きて大なる滊笛の音の聞えて、滊船の到着をぞ知らすなる、滊船發着表によれば、之は我が郵船會社の信濃丸の來着しつる也、月の明るき夜に更科や姨捨山に縁ある名の船を迎へて『二千里外』の故國を思ひやるも、徒らに光る源氏を學ぶにあらず、誠に高麗もろこしの野邊に馬のかみの心の走ればなり、此通信の諸孃の御覽になる頃は如何なり行くらん、外交上の事柄は、空の月の晴れくもるが如く……。

（二）人種展覽會

大阪の大博覽會に、支那人朝鮮人臺灣人などを陳列しましたと聞き及びましたが、此のシャトルでは世界の人種を年が年中陳列して置きます樣な者で御坐います、此シャトルに居ますると毎日幾百種の面相風俗、言語等に接する事が出來ます、今各人種の此

ジャトル及び其近邊に住居して居まする數を、御覽に入れまするど、一萬人以上は

加奈太英人、獨逸人、スキーデン人、英倫人、

次に五千人以上は

ノルウエー人、アイランド人、ポーランド人、日本人

日本人は五千七百六十九人で第八番目の數に當つて居ます、次に一千人以上は

スコットランド人、支那人、デンマーク人、クインランド人、ロシヤ人、アウストリヤ人、イタリヤ人、カナダ佛人、スキッツル人、ウエースル人オンガリヤ人、フランス人、

と云ふ順番になつて居ます、それからボヘミヤ人、ベルヂユム人、アウストラリヤ人、アフリカ人、中央アメリカ人、印度人、諸島人以下小數は切捨てます、私は當地の合衆國人と、アイランド人と、フランス人との樣子は、畧々視察を致しましたが、其他はまだ一向わかりませんたゞ辻々で通行人の靴磨きをするのが黒奴で、大路小路の道普請をして居るのが、伊太利亞人で、跣足で歩いて居るのがサイフッシユである位の事しか分りません。

(三)眞正の文明

は表裏の最も相反したる者であると或書に見えました、成程一通りの理由は御坐います、開けた人程人樣の前に無作法の無い樣に氣を付けます、米國に來て見まして婦人方のよそ行きの顏と、うちに居る姿と非常に違ひますのを見まして、成程米國は文明國で御坐ひますと感心(?)致しました。

虎穴に入らなければとやら申します、唯渡米したと申します斗で、親しく米人の家庭に入つて見ませんでは、米國婦人の眞正の有樣は見届けられませぬ、大倉喜八郎さんの息子さんは、色々米人の家庭に入れて貰はふと思つて、心配致されましたけれども、出來ませんでした、米人の家庭に入りますには、虎の穴に入るやうに生命の心配は御坐いませぬが、一通ならぬ苦心を要します、米國人は自分の家庭に金

持ちの息子や、學者や、氣慨家や、理想の高い者などを入れて置く事を好みませぬから馬鹿にならなくちや入れて貰はれませぬ、賢い眞似は誰でも致します事ですが、馬鹿の眞似するは實につらう御坐います。

私は米人の家庭に入りましたのが、是まで三ケ所で御坐います、髯を剃りまして、小僧の風をしまして、おかみさんの御小言は一日に十度も二十度も謹聽致しました、おかみさんに對して、抗議などは申込ません、又自分の身分などは知らせません、又自分は此家庭の様子を探つて、日本へ通信して貴婦人方の前にさらけ出す役目を以て、來たなんどは決して申ませぬ、讀者諸孃は私の通信を普通の視察談と同じなみに御覽わそばすな。

(四) 女學生の海軍帽

男學生は街路を往來しまするには、普通の人と區別が御坐いませぬが、女學生は一見して分ります、女學生の中には、日本で中學生が冠ります海軍帽、鳥打帽など冠りまする者多く見えます、年増の婦人で男と同じ麥藁帽子、中折帽子、まれには山高帽子など冠つて歩きますのが、見えますが、何やらうちの御亭主の帽子を一寸ひつかけて、來たやうに見えまして可笑しう御坐います。

(五) 支那婦人教育家

我が下田さんの様な方かどうか知りませぬが、ルーリンと申しまする支那婦人は、此度ニウヨルクへ參りまして、支那女子教育の任に當ります都合で御坐いますと當地の新聞に見えました。

(六) 在米國大學の日本女子

シカゴ大學へ此間日本の一介孃、しかも非常の美人が入學して、才色二つながら白人のおぢやうさん達を壓して大評判ですと、クロニクル新聞に見えました、御名前は森田貞さんと仰います、皆さんの中で御知り合の方が御坐いますか。

(十月中旬北米シャトルにて)

猿の話

倭翁

進化學者の説では猿と人間とは同祖じやと申すことでありますから、むかし〳〵大昔桃太郎が鬼ケ島遠征を企てました頃には我々祖先の親類仲間であつたかも知れません、所が二十世紀の今日でも流石の猿公がたつた三本毛が足りないので人間に爲りそこなつて矢張り畜類の群を離れられないとは、氣の毒笑止で何ともないでせうが、その同じ動物の中で一番人間に近きやうな所もありますから、旁二つ三つ猿の話を記すことに致しました。

○○○親子の愛　母猿子猿の情愛は彼の燒野の雉子どころでなく、産み落した其子猿をば母猿決して手離すことはありません、その谷を越へ樹から樹へ飛び遷るにも、必ず伴なつて居るものであります、その子を負ふさまは、全く人間と異なつて、頭を下にし、尻を上にして子猿の足を母猿の肩にかけさせて居るなど、全く逆さに脊負ふのであります、是れは猿の性が、斷崖絶壁を攀ぢ上り、樹から樹へと飛び行く習ひであるから、其の子の目や面を傷けない爲めの用心でありませう、されば子猿も同じ思ひで、常に母猿の脊にしがみ附て、放るゝとはないそうです、故にましら狩る獵師共はこゝの呼吸を考へまして子猿を傷けないやうに、母猿を銃殺して子猿を生擒するのじやそうであります、斯る場合でも子猿は母猿の死骸に纒り付いて離れませんから、容易に、捕獲が出來るのであります。

そこで生擒した子猿は、暫らく飼馴したる上で人に托して鳥問屋へ雉子、山鳥などゝ共に送つて、猿飼の仲間に目利せしめて賣渡のじやそうであります、滿二才頃が演藝の仕込期であるから直段が最も貴しと云ふことであります。

○○○猿の評價　世に四國猿てふことがあります、實に四國の深山で產するものが、最も鋭敏の資性を備へて居ります、これに次では上總地方から、日光近山、

秋田縣、新潟縣と云ふ順序であります、所が人里近き處に接めるものは、大抵役に立たぬものと極り、深山産でなければ藝猿の撰に當らずと云ふことであります、猿は人立して步行する時は、一見人類のやうでありますけれども、その山野に居るときは、四脚で步むものですから、人立せしめて諸藝を仕込むは中々容易でありません、俗に小股の切上ると申して後足の骨格逞しく丈夫なるが善しと申すことですが、此等の鑑定は、この道の經驗家でなければ、見別け難しと云ふことであります。

○○○猿の飼養法　猿飼が野猿を仕立つるには先づ猿箱と云ふ小箱の中に起臥せしめ、漸次馴るゝに從つて、其生活を自由にさせまして、座敷の中を走廻らせたり、又庭前に長き竿を樹てゝ上らすなどするのであります、その食物は三度に少量の握飯を與へる丈けであります、さて山野に生長するものには似ず、痛く冷飲を嫌ふ質でありますから、冷飯のときは湯浸飯として遣るのじやそうです、その外時々菓子又は菓物などを給することもあつても、成る丈け分量を定めて、過食せしめないのが宜ろしいそうです、前の如く食量は少くとも、常に強壯活潑で野生の折りは、顏面なども皺だらけで齒根も甚脆弱であつたものも、暫くするうちに五管の働きは鋭敏となり、顏面の皺も延びて若反るそうであります。

○○○敎育の時期　藝道仕込の時期と申さば、先づ滿二歲頃であつて、その頃敎育に掛つてから二年、或は三年經て始めて普通の踊を卒業する位であります、それより漸々上達して十二三歲より十五六歲の頃が最も踊盛りとなりて屢々見物の喝采を博するやうに成て參るのであります、所が此年頃になると猿自身も車輪となつて勉強するそうですが、此の勉強時代が濟むと、先生早や老練と云ふ所で、老成を氣取り往々見物を馬鹿にすることもあると云ふことです、されど藝道の進步は、益々老熟するもので、三十歲より五十歲の壽命を保つものだそうです。

○○○敎育の法　藝道仕込の方法は猿廻し家々の流儀に

よつて多少の相違はあるそうですが、孰れも猿と共に一室に閉籠りて、猿が心を他物に散らさぬやう戸障子を締切つて、第一に苧綱の使方、第二に鞭の振方、扇子の拍子などで、自然〳〵に覺え込ましむるものでありますから、山出の子猿から立派な踊子に育つるまでには、中々骨の折るゝことであります。

最初は其拍子甘く揃はないから、傍より手を取つて、或は起たせたり、或は坐せたりして、幾度も繰返し、その調子を馴すのであります、かくてその起坐の工合を呑込ましめた上で、次ぎには鞭にて疊を打つ音を聞て起坐することを敎へ、又鞭にて苧綱を打つ手加減で起坐する呼吸を覺らしめるなど、此等の調子を一通



り會得せしめた上で、いよ〳〵藝道に取掛ると云ふことであります、要するに其拍子は鞭一本の叩き工合にあるですが、これを芝居に仕組に當ては、常に立役を雄猿に、女形を雌猿に致すと、雄は勇壯活潑で、雌は柔弱でありますから、自然男女嵌り役わつて、踊に一層の興を添ゆると申すことであります。

○○○猿と人事　猿は大抵四五十歳の壽命を保ちますが、平素は無病息災で死するまで絶て病苦の色を見るとなく、世に珍らしき健康なる動物であります、かく無病なる上に、偶々疱瘡を患ふることがあつても、二三日で平癒する質でありますから、之を小兒に近くれば無病にして流行病に罹らぬとの考へで、昔から上下

ともに猿廻を愛したものであります、徳川幕府時代には猿飼人は邸宅を下されて、特別の保護を與へられ、將軍家繼嗣者の健康を祈らしめん爲に、特に西丸で猿舞の技を公達の縱覽に備へたものであります。

今もなほ猿廻しは古式を忘れぬ宮家諸華族方へ出入いたしまして、貴人の公達產衣を召す時などは、一度先づ猿に着せてから、御召用に供ふるのみならず此等の邸にては猿舞の節、猿に食物を與へ、又は酒を飲ましむるが例であつて、其時は侍女共猿の側に往きて、其食片を取つて之を公達へ進め、又酒は手布に浸して唇を濕すと申すことであります。

○○猿と馬　猿と馬とは天然仲の好き動物でありまして、其厩へ猿の來るときは、如何なる病馬も欣然として起ちます、又野馬が猿に誘引されて遠方へ連れ行かるゝこともあるそうであります、殊にその無病健康なるにあやからせやうと云ふ所から、古來厩へは一頭毎に祈禱札を張らしめたのであつて、厩の構には、爲に猿耳と云ふものが設けてあつたと云ふことです。

○○○○猿の人眞似　紀の屋文左衞門が、蜜柑畑で、旅人の危難を救ふた試はことふりたり、猿狩の一手段でありますが、山奥へ戶棚を擔ぎ行きて、猿の眼の前にて、戶棚の戶を開けては這入り、這入つては戶を閉ぢ、開けては出で、這入ては閉ぢ、事面白く開けたり閉めたり、出たり入たり、幾回となく繰返して後戶棚を放置して、他へ行く時は、猿公欣然として戶棚に近づき人の居ないを幸ひ、戶棚へ這入りて戶を閉ずるが最後、戶にはコットリとて陷錠の設けがあつて再び出づると叶はぬなり、かくて安々と生擒せらるゝのであります。

○○猿の智惠　朝三暮四と申すことは支那の話でありますが、猿智惠の淺慮なる中々可笑ふしも少なからず、その結目なき所が一入興味あることゝ思はれます、山里の子供が折節山林に入りて猿の群に擒にせらるゝことがあるそうです、その時は寄てたかつて

藤蔓などを採り來りて、ぐる〳〵と十重廿重に子供の體をまくそうですが、さて最後に蔓の切り端を遣る所がないから、即ち結ぶことを知らないから眼でも、鼻でも、耳でも、何處でも穴の明ける處を目掛けて突込のじやそうであります、猿は元來血を甚だ嫌ふものですから、若し鼻などへ突込で鼻から出血でもせうものなら、大に喫驚してキッ〳〵と叫びつつ、我れ一と逃るそうであります、それゆゑに猿などの出て來る山近き村里の子供には、常に鎌を携へさせてあります、若し林で猿にでも出會ふた時は、左の腕を差延べて右の手に、鎌を持ち力を込めて切る眞似をして、さて後に鎌をば猿に投け與ふるのじやそうです、即ち猿は鎌を拾つて前の子供の如く鎌を振上げて己れと自身の手を切ると云ふことであります、乃ち人眞似して自ら害を買ふのであります。

○。○。○。

猿と忌諱　猿の名を忌みて『エテ物』『ヤエン』などゝ稱する理由と申すは、猿廻しが猿を脊負うて諸方を行くその時はトケ輪と名くる綿布、又は絹布の頸輪を鉗めさせて居る所から、一見丁度罪人が縄付けられた姿に似て居るとの感じから嫌ふのじやそうで、殊に博徒、盗賊どもは、道でこれに出會ふことさへ忌むと云ふことであります、又猿「去ル」と國音相通じます所から縁談の時を始め總べて客商賣の仲間にては之を忌むやうになつたものですと云ふ話であります。

（をはり）

奥州訛り

文學士　濱田紅於

諸君は多分奥州白石噺と云ふ淨瑠璃を御存知でせう新吉原の段で、信夫と云ふ小娘が、奇妙な言葉を使つて居るのを、讀んだ時は、日本にこんな言葉があるものかと、何人でも一寸驚きます、其後私は或書籍を讀むで、これは其作者の揑造に出たものだと知りましたが、實際奥州に來て見ると、全くの空言でもないことを了解しました、實に宮城野の云ふ如く

浪花の蘆は伊勢の濱荻、所々で異るものながら、初めて奥州辯を聞いた時には、茫然として鴃舌國に入つた感があります。

さて白石噺の文句調べて見ると、眞僞相半してゐるやうです、赤はらとか賤そべるとか云ふ言葉は、白石の人々に聞いても知らぬと申します、併したゞあがまあ(父母)は現在仙臺で用ひてゐるし、申す、致すの如きは平常の對話に、一種の敬語として用ひられてゐる、これは奥州に限つたものではありませぬ、こゝに又別例を出して、奥州訛を御覧に入れませう即ち左の如くであります。

奥州の仙臺べツチヤ、オラヤンダ
　サウシヤ、ソデガス、ソデガエン

文學上の價値はない俗謡ですが、方言だから面白いのです。これを説明すると、ベツチヤは何々でせう(想像辭)、オラヤンダは私は厭です、サウシヤは左樣じや(決定辭)、ソデガスは左樣で御在ます、ソデガエンは左樣で御在いませぬ、かやうな意味なのです、一寸奇妙ではありませぬか、尚一々例を擧ぐれば際限がありませぬ。

そこで言語學者めいて、奥州訛を研究して見ますと、中々面白いことがあるのです。

(一)假名遣の傳訛 多くイ列とウ列とが顚倒して居る樣に思はれます、これは言葉上で顚倒してゐるのみでなく、耳にも顚倒して聞えるのです、その證據には書取を行つて見ると直に分ります、例へば、いひども(雖)、學を修め業を習へ(業を習ひ)、新國町少し、酢飯、すゞめ(雀にもしゞみ貝にも用ゆ)、降り雨(降る雨)、繻子の如き是れです、こゝに附言すべきは、白石噺に二階さあぶち上げ、いゝいゝ、江戸さお歸り申すなどの言葉があります、此さあは係關詞(外國語の前置詞)で、に或はえの意味であります、現今尚行はれて居ります。

(二)言葉の省略 東京の如き頻繁な都で、おつこちる、のつかゝるの如き婉曲な言葉が行はれるに反して、悠長な東北地方に、極て省略せられた言葉が用ひ

られるのは、一奇と云はなければならぬ、例へばござす、がす(共に御座いますの意)有りす(有ります)知りんせん(知りませぬ)、行きした(行きました)の如きものです、その代りに、あらさらすべえと云ふ類がある、これはありますでせうの意味で、一寸眞似の出來惡くい言葉であります、さて私が常々奇體に思ふのは此等の省略せられた言葉が、かの遊里詞に酷似してゐる點であります、抑も昔大江戸の北廓南里又は、遊里詞とて一種特別なものがありました、傳說によると、遊女なるものは、諸國から集まつて言葉が種々樣々であるから、これを一致させるために、庄司甚内なるものが、この遊里詞を創めたとあります、遮莫、ざんす、ざます、知りんせん、有りんす、行きんす、行きんせん等の遊里詞を東北の省略せられた言葉と對照してみると、その類似の甚しきに驚きます、その孰れが本家で、孰れが支店であるかは知りませぬが、かの仙臺侯綱宗が北廓に豪華を極めて、伊達姿のうき名をさへ流されたことを思ひ合すと、彼と此との間に、何等かの關係が有りそうに思はれます。

(三)南北語尾の類似　南は九州、北は奥羽の事です併し私は熊本と仙臺の外は知りませぬ、加之その類似の點も二三であります、さて熊本語にバイ或はタイと云ふ語尾があります、共に斷定の詞で、行きますバイ、知りませんタイと遣つてゐるが、其區別は熊本人にも分らないと云ひます　此バイと云ふ語尾が仙臺にもあります、或はベエとも云ふやうです、乍併仙臺のバイは想像或は假定の詞で、さうだベエ、さうですバイ(さうでせう)と云つてゐる、故にこれは只形が似てゐるのみで、別に關係はありますまい。

(四)時の混同　漢文を棒讀にすると現在ばかりで、過去も未來もないから、或先生は野蠻語だと云はれたが、仙臺では現在と過去との區別がないやうです、「一寸伺ひます、あの先生はお宅で御座いますか」「ハイ、居りました」、居りましたと云へば明かに過去

である、現在の問に對して、過去の答を以てするのは、甚だ不都合であるが、その意味は「ハイお宅で御座います」と、同じなのです、併し留守のときには「居りません」と云ひます。序に申しますが、語法が一體に不作法です「居りました」と云ひ放つのもその一例で、生徒が先生に對してオラ（私の意）と云ふ、別に先生を輕んじてゐるのではないが、兎に角に不作法ですね。

（五）古言の殘遺　古言はいづれの地方にでも、少しづゝは殘つてゐるもので、九州のゴッと云ふのはごと即ち如くの古言です、東北にも燒かへ（燒け）立たへ（立て）等がありますが、これも古言の例ではありますまいか、古事記神代卷に、此子を生みませるによりて、みほと灸かへて云々とあります、但し立てを立たへと云つた例は見當りませぬやうです、この外古言らしいものを耳にすることが、往々ありましたが、急に思ひ出せないから略しました。

（六）敬語の混同　東京では人々に對する敬語が、階級によつて大凡定まつてゐるのですが、東北ではその見界がつかないのです、上は舊藩主の御臺所、師團長や、知事の令夫人を奥樣と稱するのは穩當であるが、九尺二間の裏長屋の女房連が、矢張奥樣だから驚かざるを得ない、啻に奥樣のみでないですよ、所謂河嶽寂寥を判たざるものと云ふべきでせう。棚卸しはこゝらで措きまして、又改めて出直しませう、で一つお芽出度所で終結をいたします。

春の初に筆とり直し萬の寶を書きたてる。
金持錢持つ寶もつ、此方の旦那はお金持つ。

小兒の樂園（つゞき）

紅綠子

扨て諸君、諸君が此箱から出た醜いものは何であるかを知りたいなら、著作は御話し致しませう、あれは地球上の「苦惱」の種族です、此の種族の中に惡い根性もあれば いろ〳〵な心配もあり、百も百五十よ

り多い悲みもあれは悲しい傷ましい形の澤山の病氣もありましたし、迚も私共の話すことの出來ない程、種々雜多の厭なものがありました、結局其の後、人間の精神と身體とを惱ました處の凡てのものは、此の不思議な箱の中に封じ込めてあつて、そして世界の幸福な小兒が決して彼等のために惱まされない樣に、太郞とお花の家に安全と藏つてあつたのでした、此の二人が其の依託に忠實であつたら何事もなかつたのでした、どんな大人でも悲む事なく、どんな小兒でも一滴も淚を流す理由がなかつたのでしたらう、其時より今日まで。

諸君は之れを以て見ても、一人が惡い事をすれば、世界中に禍を及ぼすといふ事が御了解になるでせう、お花が此のいやな箱の蓋を開け、太郞が其れを制止なかつた爲めに、二人の惱みは、私共の中に足をとめて、迚も急には追拂ふことが出來ない樣になりました、其れは此二人が自分共の小屋に此の厭な虫を入れて置く事が出來ないからです、彼等は先づ此の虫を追出さうとして窓を開けました、それで羽の生えた「苦惱」は方々に飛で出て何處へ行ても小兒等を螫し若しめましたから、其れからといふものは前の樣に笑つて許り居ることはありませんでした、そして大變に奇態な事は地上のどんな花でも是れまでは一つも枯れなかつたのですが、一日二日の後に段々花は萎み、葉は落ちて來ました、又た小兒等は永久も小兒であつたのでしたけれども、是から日增に年取まして、直きに靑年及少女となり、大人の男と女となり、而て御爺さん御婆さんとなりました。

閑話休題彼の惡いお花と同じく惡い太郞は二人とも家に居りました、何方も甚く螫されて大變に痛んで居ます、世界が始まつてから、初めて感じた痛みですから、餘程若しんだ樣でした、勿論二人經驗がありません、又た如何して宜しいのかは知りません、只だ二人とも自分に向つても、互ひに向つても、非常に不機嫌でした、太郞は癪に障つて仕樣がないから、お花に面當てに、態と背後を向けて隅の方に無

悄々に坐つて居ました、其時はお花は床に倒れて頭をあの不運なる忌々しき箱の上にのせて、胸が張り裂けるばかりに泣いて居ました。

急に蓋の中で靜かな幽かな音がしました、お花は頭をあげて太郎に

『あれは何ですか』

と言ひました、併し太郎は音を聞きませんのか、但しは餘り腹立たしいので其れを聞く氣もありませんのか、どちらにしても返答をしませんでした。

『貴君は大層不親切ですね、妾に言ふて下さらないのは』とお花は泣て言ひました、再び音がしました、魔神が箱の中で輕く惡戯に叩いてる樣な音に響きました。

『汝は誰ですか、此の忌々しい箱の中に居るのは』

とお花は未だ少し殘つて居る前の好奇心から尋ねました、可愛らしい小さい聲が中から申します。

『何でもよろしいから、蓋を御開けなさいよ、そしたら貴孃はわかりませう』

『いゝえ〳〵、妾はもう此蓋を開けるのは澤山です、汝は箱の中にある惡棍でせう、汝は其處に止まつて御出なさい、汝の厭らしい兄弟姉妹はもう大變に世界を飛び廻はつて亂暴して居ます、妾は汝をも出すほど馬鹿な子であると、汝が御考へなさるに及びません』

とお花は答へながら、太郎の方を見ました、其中に太郎は何とか智慧を授けてくれるだらうと思つたのです、けれども太郎は、今更らお花が怜悧になつても、仕方がないと呟やきました、可愛らしい小さい聲が復た言ひました。

『ほんとうに貴孃は私を出した方が餘程よろしいのです、私は尾を以て螫した厭なものとは違ひます貴下方が一目御覽になつたら彼んなものと全く違ふことが御明解になりませう、さあ〳〵私のいゝ子の美くしい子のお花さん、私は 屹度貴孃が出して下さるだらうと思ひます』

直に此聲の中に樂しさうな、人を引付ける樣な音が

しました、ですからお花は其れを拒むことが出來兼ねました、お花の胸は箱の中から出る言葉を聞く度毎に輕くなりました、太郎も亦た隅の方に居ましたが、半分振いて前よりか大分心地快氣になりました。

『太郎さんよ、貴郎は此小さい聲を聞きましたか』

「さう、確かに聞きました、其れは何でせうか」と太郎は答へましたが未だ悉皆機嫌が直りません。

『妾は蓋を開けませうか』とお花は尋ねました

『貴孃の好きな通りに』と太郎は答へまして又た

『貴孃はこんなに苦しい事を仕出來して其れでも足らないでせうから、もう少し行つた方がよいでせうよ、貴孃は世界に飛ばした澤山の苦惱の中に、モ一つ位ゐ苦惱を增したつて大した差違がありますまい』

『貴君はモ少し親切に言て下すつてもよろしいぢやありませんか』とお花は泪を拭きながら呟きました。

『わゝいけない子ですね』と箱の中で笑つた樣な聲が言ひました。

『太郎だつて實は私を見たいのです、お花さんお開けなさい、私は貴孃を慰めやうと大層に急いて居ます只だ私に新らしい空氣を吸はして下さい、貴孃の思ふ樣な厭なものでありません』

お花は聞て。

『太郎さん、どんな事になりましても、妾はもう開けやうと思ひます』と言ひました。

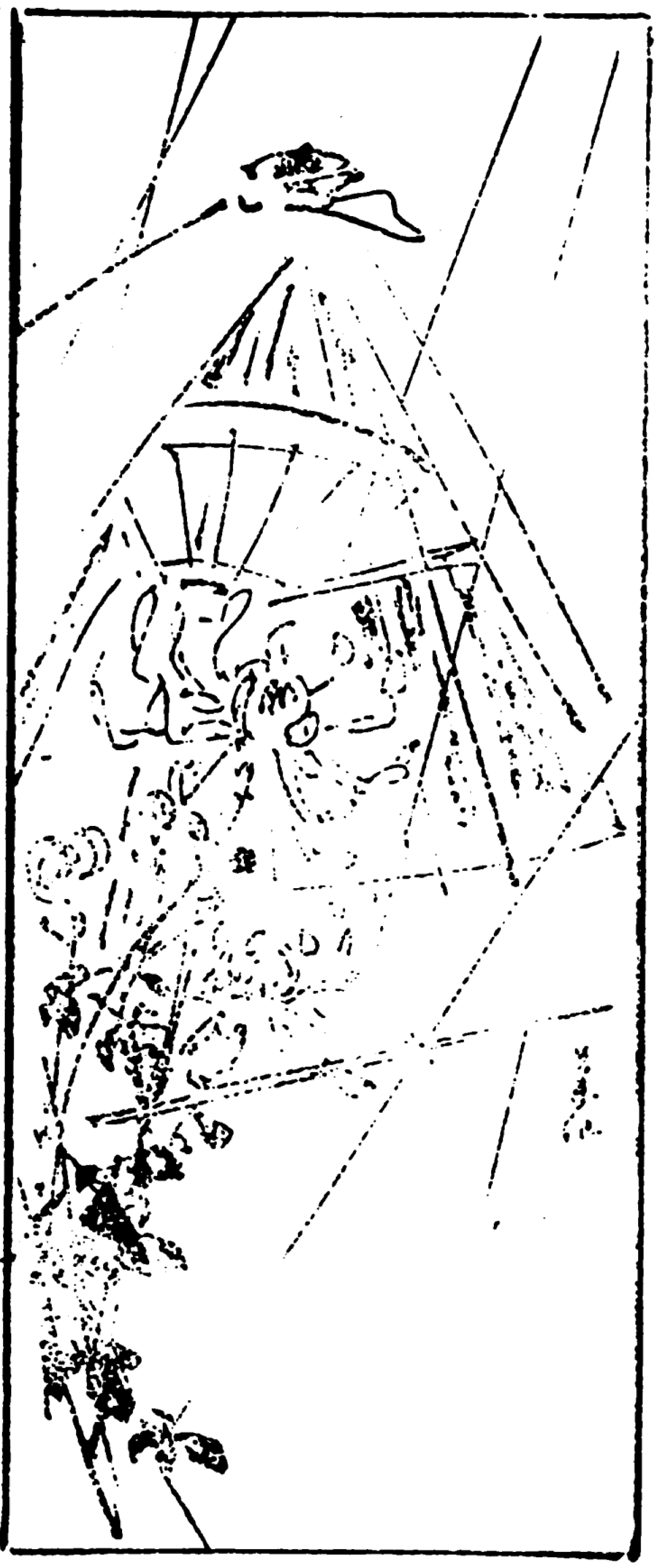
『蓋が重い樣ですから僕は手傳ひませう』

と太郎は室の隅から走り出て來ました、もう二人の心が同じくなつて一所に蓋を開けました、ぴか〳〵輝いたる美くしい小さい人が笑ひながら、跳び出して室中を舞ひ歩きました、其の人の行く方に五光が動いて居ます。

諸君はいつか、鏡を暗がりの方に向けて光線を反射さして動かした事がありませんか。扨て此の空氣の樣な人は薄暗い小屋の中を喜びの羽根の生えたものの樣に樂しげに見えて、先づ太郎の所に飛んで行き

ました、そして「苦悩」に螫された痛いところに、其の手を少し當てましたら、直ぐに痛みが無くなりました、其れから此人はお花の額に接吻したら之れも直ぐ癒りました。

此んな善いことをしてしまつてから、此の輝いた人は二人の頭の上を慰める樣に飛びあるきまして、大層に嬉しさうにして居ます、ですから二人は箱を開けたのは惡い事でなかつた、箱を開けなければ此んな面白いお客樣が矢張り箱の中で、あの尾に針を持つた厭な虫の捕虜となつて何時までも止まつて居なければならなかつたのですから。



「貴下は何人ですか、妾の好きな美くしい御方よ」とお花は尋ねました。

「私は「希望」といふものであります」と答へて又「私は此んな樂しい小さい身體でありますから、人間の中に放される樣に決まつてゐつた所の厭な「苦悩」の後に出て人を助けるために箱の中に入れられてゐつたのです、決して恐れなさるな、私共は「苦悩」がどんなにしても立派に善く暮して行けませう」と云ひました。

「貴下の翼は虹の樣に彩つて、大層奇麗ですとね」

とお花は叫びました。

『さうです、虹の樣です、何故なれば喜びは私の本性ですが、私は笑ひと涙と丁度半分づゝで出來たものですから』と希望が言ひました。

『そして貴下は私共と何時までも〳〵一所に居らつしやるでせうか』と太郎は尋ねました。

『貴君がお望みならば何時までもです、貴君が生きてる間は私は決して貴君を離れません、私はお約束申します時々貴君は私が全く消へてしまつたと思ふ事がありませう、そして幾度も〳〵〳〵、貴君が左樣思はない時は、貴君は貴君の天井に私の翼が光つて居るのを見ませう、左樣、私の好きな小兒よ、私は今後貴君等が授けられる美くしいよいものを知つて居ます』と「希望」が笑ひながら言ひました。

『私共に話して下さい、何ですか早く聞かして下さい』と太郎は叫びました。

『私にお尋ねなさるな、縱令貴君が此の世界に其んな事が出來ませんでも失望しなさるな、私の約束に堅く信りなさい、其れは眞でありますから』と「希望」か云ひました。

『私共は貴下に信ります』と一息に太郎とお花は叫びました、そして二人は其通りに致しました、啻に二人ばかりでなく、其後生きて居た人は誰でも皆な「希望」に信賴りました。

實をいふと著者は喜ばずには居られません（縱令お花の爲した事が普通ならぬ惡い事でありましたけれども）私 は、私共の愚かなお花が箱を覗いた事を喜ばずには居られません。勿論、勿論「苦惱」は未だに世界を飛び廻はつて居ます、そして減少なる事がなくて數が增す許りです、惡い〳〵惡魔の仲間で其の尾に毒のある針を持て跋扈して居ます、私は自分で彼れに螫されたのを感じます、そして私は年老る程段々深く感じて來るだらうと思つて居ます、併しながら、あの可愛らしい輕快なる小さい形の「希望」私共は彼れなくしてどうして世界に生きて居られま

せうか、「希望」は世界を靈化致します「希望」は世界を新らしく致します、そして地球がどんなに立派に、どんなに輝光ある時に於ても、矢張り「希望」は盡る事なく其後の無限界の只た一つの影の如く殘つてあります。

（完結）

水戸の婦人（四）

東臺小隱

貞婦やす女

那珂郡野上村に與次衛門と申す百姓有り、其妻の名をやすといへり、同郡岡崎村の百姓の娘なり、然るに彼女與次衛門に嫁して間もなく與次衛門あしき病を引受（楊梅瘡にて面皮を損せりといふ）人のまじわりもならざる體に相成候付、與次衛門女房やすに對して申候は、其方事年も若く生れ付も見にくからす候處に、か樣に癈人となり候我等につれそひ候段何ともいたましく候、殊に女は老後子に養はる丶事を賴むことなるに、か丶る病にか丶りてはモハヤ子も出生すべきにあらねば、旁我において本意に存せず候間暇をやり候ま丶、又いか樣なる者にも嫁し候へ、ゆめ／＼恨はこれなく候と言葉をつくし申候へば女房淚を流し、甚うらみ申候は夫婦となり候上は夫の癈人となり候とて見捨て他へ嫁候とや候べき、殊に老か丶まりたる姑のおはしまし候を、重病の身としていかゞつかへ給はんや、是又見捨申べきにあらずと申候へ共、與次衛門猶更言葉をつくし、しきりに暇の事申候へば女房とかくのいらへもせず、既に自害致すべきと仕候故、與次衛門驚きとりと丶め、感淚を流し此上はとかふいふべき樣なし、そこをいたみ思ふゆゑにこそ暇をばやり候はんと申候、さらば老母をいたはり給り候へとて、其後暇の事申出さゞりける。それよりしてしうとめおよび病夫をいたわり候事ます／＼あつく、且嫌疑をさけ貞節を守る事いよ／＼かたし、與次衛門年久しき病氣ゆゑ段

段家貧しくなりて、後は下人もなく馬も持たず、只夫婦計になり、女房看病のひま〳〵に女の身ながら鍬をとりて田をかへし畑をうつて夫を養育仕候。或時西山公其邊を御通りなされ候處に、彼女房田をうなひ居申候を御覽なされ、女の身として田をうなひ候は非道なる主人に仕へ候者か、又繼子などにて其親のにくみて申付候か、とかく子細あるべき事と思召御下部の者を以て御問はせ候へば右の段申上候、西山公一々聞召れ、御感嘆なゝめならず、その家へ御立寄彼の病夫をも御覽なされ、女房に御手自金一包下され、且此段綱條公へ仰遣はされ候、扨彼者の田畑永代作り取りに仕べき由仰付られ候、かく御惠あそばされ候よし承りつたへ有德なる百性共感じ奉るのあまり、心々に金銀米錢を彼夫婦に送り候(桃源遺事)

源義公三十五萬石の主君なる尊き身を以て親しく士民の茅屋を訪せ給ふ、其孝貞を賞し給ふに如何計り深く注意あらせられしや想像するに餘りあるなり、宜なる哉當時封内に貞婦忠僕等の多かりしこと。

權左衛門の妻兇徒を斬る

多賀郡小中村の百姓伯樂をも仕候權左衛門の妻を同郡折橋村の百姓戀慕いたし、密々に度々何かと申より候へ共、彼女節義を守り心をかたむけ申さず候。ある時夫の權左衛門馬を引て商の爲武州江戸へ登り候、跡にて彼不屆者よき幸とおもひ、夜半に女房か閨へ忍び入候を女房目をさまし、夫の刀のありしをさつとぬき、したゝかに切付候へば男動かず、たゝみかけて切付即座に討留申候、此段西山公聞召し、比類なき致方とて殊の外御感心なされ、其邊御通りの時分彼夫婦を召御目見仰付られ、御褒美下され候。(同上)

上の好む所下これより甚しきありと云へる如く、威義兩公自ら尚武の氣風を養ふ事をつとめられしかば、士民の妻女迄自然其風に化せられ、剛毅勇

決斯の如き者を生出せしなり當今風俗日に淫靡に流れ、謂ふに忍びざる行をなす者の、頻々として現はるゝは、抑何人の責にや。

三郎兵衛妻の勇氣

久慈郡金澤村の者同郡西染村の者と喧嘩を仕り、西染村の者多部田村の三郎兵衛と申者の家へかけ込申候所に、三郎兵衛は他出いたし、女房獨居申候が彼かけ込申者を隱し置候、然る所間もなく追手大勢にて馳來り、彼者出し候へといかめしく罵り申候。女房少もおそれたる色なく、棒を引さげ出向ひ爰許へは何者も來らず候、たとへ參候とて、懸込賴候者を出し申すべきにあらず、いはんや何者も來たらず候、若理不盡に押入、さがし候て、何者も居申さず候はゝ、女の身たりといふとも、其儘には差置申まじ、覺悟してさがさばさがし候へと申候へば、追手共おし込さがす事わたはず引返し申候。此段西山公聞召、いやしき者といひ、殊に女の身として神妙なる致方、常々夫の教も能こと相知れ候由御稱美あそばされ、北領の御出行の節彼夫婦を御旅館へ召し、御料理下され、且御金賜はりける。

（同上）

此事前に記したる埴和善七が妻の行爲に能く似たり、或は一事兩傳かとも思はるれども、又案ずるに、當時戰國を去ることの遠からず、士民共に殺氣充滿せる折なれば、かゝる事は幾何もありたるならむ、併記して當時士民の風習の如何に勇武なりしやを知らしむ。

老女小督

西山公七歳の御時雪の日

降る雪がおしろいならば手にためて
　小がうの顏にぬりたくぞある

と遊ばし候、彼小督（後高島と改む、近江七騎の内多湖刑部の女にて、石堂八兵衛義利の妻となる太郎八氏信の母なり。）と云老女は男まさりなる氣質な

りければ、西山公をよく守立くれ候樣にと御父賴房公御介添に御賴なされ御附候。依て日夜信心を盡し御守立候。西山公御壯年の後彼老女死去せり、病中の御悃意は云に及ばず、死後色々御追善あそばし、悼の御和文御歌を遊ばされ、御幼少より樣々深志にならせられ候事をのべさせ給ひ、殊の外彼死別を御なげきなされ候、（同上）

小將義公を繦緥の中に敎養し參らせて、啓誘開導遂に能く大材を成し、附托の大任を全ふせり、以て保姆感化力の鴻大なるを思ふべし。抑威公が稠人中より此女を拔擢せしを見れば、其平生の言行大に人に勝れたるものありしならむ、其行事の多く傳はらざるは誠に惜しむべきなり。

大福帳

文學士 白仁白楊

紫陽花の昨日に換る今日の色、人の世の遷り易きを喞たしめし夏は、晝寢の夢の醒めぬ間に過ぎて、露の干ぬ間を咲競ふ朝顏に、短き榮華を恨む秋も漸く老いぬ、朝夕の肌寒さは、吐く息の白きにも見え初むるに、重ぬ可き襦袢もやあると、煤けたる行李打開きて搔探れば、一冊の古手帳出で來ぬ、表に麗麗しく大福帳と記せるは、正しく記臆ある吾物なり披き見るに將もなき事何呉と書附たる、まこと左る事も有りけるよと打微笑まるゝ節もあり、怪しう初初しき議論めけるもあり、大方の人々も亦可笑と見給べしと自惚るゝには有らねど、其二三を書き誌す事とはしたり、冬の夜長の暇潰しにだにならば、筆者の僥倖此上無かる可し。

△我邦戰國の頃、京師の衰微甚だしく、公卿方の貧窮其極に達したりし事は、人の善く知る處にて、聞くも憐れの逸話最と多かるに、就中可笑しくも又憐れなる話あり、名は故に誌さゞるべし、今は華族に列せられたる某といふ公家に、會見を求むる人ありて、或人に其紹介を依賴したり、賴まれたる

人は直ぐに、其公家の許に云々と申入れけるに、折しも寒き頃なりしが、夏衣裳を着けたれば、知らぬ人に逢はんも恥かしとの斷りなり、夏衣裳なりとてなどて苦しかる可き、切にと重ねて申入れ、頼みたる人引具して行きたり、帷子か左なくとも、夏裝束を着け居らるゝならんと、二人共然思ひて逢ひたるに、這はそも公家は怪しげの蚊帳を身に引纏ひて、辛じて肌を隠し居れしとぞ、天正頃の事なるべし。

△是も其頃の事なり、近衞殿に歌の會など有るに、三方の臺、色飽く迄黒きに、ころ／＼とする赤小豆餅をのせて出されたりと江村專齋の老人雑話中に出でたり、五攝家の随一、今の公爵家の近衞家にて此の如かりしを思へば、當時の全豹察するに難からずと言ふ可し。

△凡そ遠慮と言ふ事知らぬ三人男、例の如く煎豌豆嚙り乍ら、惡口といふ惡口吐き盡したる頃に我は卒然一問を發したり、世には斯々の妻を持ちたし云々の人と婚したしなど、種々の注文する者あれど、皆積極的の望ならぬはなし、今我問はんとする所は如何なる者は妻に娶らじ、といふ消極的の望なり、試に思ふ所を述べ給へと、鹿爪らしう言出づれば一人の友言下に、我は日英同盟を論じたりといふ女學生を娶らず、君は如何にと反問せり、左なり我は年若きを娶らざるべし、而して君は、と我は今一人の友に向へば、自ら義太夫通を以て任ずる彼は、女學生なりとて恐るゝに足らず、年若しとて捨つるにも及ばねど、唯鳴門の子別れを聴きて泣かぬ女は、如何に辛棒しても娶る事能はず、と熱心面に表はれたり、彼は語を續けて、他所の子は母親に髮を結びて貰ひ、夜は抱かれた寢ると羨み、野にねたり山にねたり、人の軒下にねては叩かれたり、と一人旅の苦を語り、歸りともない泣いて下され、といふに至ては、お弓ならずとも誰か斷腸千百の思なからんと我を睨みて詰寄るに、我は呵々一笑し、乞ふ杞人の憂を止めよ、誰か吾曹の妻に來るものあらん、來る者もあらんかと註文するは愚の極にあらずや、と

打消せば二人も同じく哄と笑ひぬ。

△或秋の初　草花見に行きける歸途、唯有る場末の御休所とあるに入れり、日も暮近きに此所にて夜食を濟まさんと上がり込むに、庭の眺も捨て難く、室内の掃除も行屆きて居心地よし、麥酒わらばと命ずれば、十八九の女、漬物紫蘇の實などの小皿取副へ出で來る、我を秋草見の歸りと悟りてか何呉と其話などして、べつたり座りたる儘左右なくは動かず、醜しとにはわらねど、人の顔色を窺ふ如き眼差の下品なるに、先づは渡り者なるべしと思はる、心附をや待つらんと、幾何かの銀貨抓りて與ふるに、尙御神輿を据えて些も動かず、麥酒も二本目となりし頃、戯れに飲まないかと言へば、飲ましようと笑顔も作らず濟した物なり、生意氣な酷い目見せてやるぞ、と思ひ乍ら新に盃を取寄せて、波々と注げばグッと一息に煽る、其勢の凄まじさに鮮やかとも得言はず、興醒顔に打守れば、女はも一杯頂きますと、手づから注ぎて又一息に飲干したり、餘りの事にはしたなしとも、蓮葉とも言はう樣なく不快に覺えて、苦り切つた我顔を覗き込みて、吃驚なすつたでしよう、妾はね學生の方に限つて無理仰しやらないから、何時でも斯な失禮な事もするんですよ、と言ふ聲も次第に力なく、顔色も恐ろし



く蒼褪めたり、扨は斯る境遇によくある慣の自暴酒かと、坐ろに憐を催ふして、憂晴しに身の上話でもしないか、と二本の麥酒の附元氣に正面より切り出せば、是非聞いて頂きたいんですよと笑ふ、はぐらかしちや困ると眞顔になれば、彼は居住を直して、今にお話しますよ、と制するも聽かず又一杯を煽ぎ苦し氣に胸を叩いて語る所は、

△お菊は世　に克くある里流の身なり、兩親は健在に或る商を爲し居るも、何所に住みて何と稱するやも知らず、今尙絕えぬ月々の仕送りは有れども養母は甞て實父母の事を語らず、從つて實の姓も名も知らず、養母は元堀のお〇と一時嬌名を轟かしたる粹者の果にて、お菊の外には一人の身寄も無ければ、お菊がおつ母さんと呼ぶを此上なく喜び居るとなり、思へば二人共世にも不幸の身の上かな、と浸々と耳峙つれば、お菊は思ひ出でたる如く語を繼ぎて、

△何時かで　した、自家から帶が贈つて來ました今も緊めてる是ですがね、ほら菊の模樣でしよう、だから妾は最初菊つて稱けられたのだと思ひましてね、夫から自分で菊と言つて居ますの、此帶も隨分永らく緊めて汚ならしくなりましたけどね、若しか眞實のお母さんでも縫つて下すつたのでは、無いかしらともつてね、何うしても放したくないんですよ、言葉は少時是に途絕えて、庭の薄に夜風物悲しう、籠行燈の光も幽かに、怪しき夜禽の聲さへ彼方の森の梢に響きて、言はう樣なき憂たき夜の色とはなりぬ。





不如意

小說

木村翠山

「こら芳江、何うぢや、其麼に考へる事はないぢやないか、先方は知事殿の悴ぢや、而も大學出身の學士で今では高等官の參事官ぢや、恁麼好い緣は又とあるものぢやない、殊にお前が緣附く樣になれば、この私も非常に利益を得る事ぢやから、な、其邊も考へて快く承諾して呉れ、な、芳江、先方からは早やく／＼と此の通り急がれて居るのぢやから。」

と一通の書翰を示しつゝ云つたのは、毿々たる頰髯のある、今では警部長と云ふ好地位を占めて多少は人にも名を知られる樣に成つたけれど、元を正せば、學問もなければ、識見もない無能な一巡査、其が諂を呈する事が巧なばかりで、當時名聲赫々たる關山知事に愛顧され、其御蔭で今では威張つて居られるけれど、云はゞ虎の威を借る狐同樣、何一つ能るでもなく、人の道さへ知らぬ。利慾の爲には人は何んな迷惑を

蒙らうと一切打棄てゝ、利得の前に脆く輕侮者。下卑な相のあるのも無理はない。

「さあ早やく返事をせい、これ何をして居るのぢや、お前に取つては分に越えた良縁ぢやないか。」

玻璃窓の室内圓卓子に娘芳江と對ひ合つて斯う云ふた、芳江は首俯垂れた儘、尙も默然と。

「ハヽヽ、分曉つた、それぢや何んだな芳江、お前はあの雪田の悴に不義理だと云ふのぢやな、ハッハッハッ不義理も何もあるもんか、あんな素寒貧書生に、許嫁だと云つてもお前が嫌だと云へばそれで濟む事ぢやないか、殊にお前考へて見い、あんな素寒貧書生の妻に成つた方が幸福か、また知事殿の悴の妻に成つた方が幸福か、假令お前が雪田に嫁つた方が幸福だと思つて居つても、そりや此の親父の得にならん事だから不可、お前が關山の方に嫁つて與れば、俺が甚麼に幸福に成るか知れない、利得の爲には義理だ人情だなど丶云つて居られる世の中ぢやない。」

父が頰髭捻り〳〵調子高に云つて居るが、芳江は默然として依然俯向いた儘。果ては其目には涙さへ持つたのである、が、父は其を見付けなかつた。

ふと遽かに急用でも思ひ付いた樣に、父は椅子を放れて娘を顧み、

「是非嫁く樣にせい」と命令的に云つて去つて仕舞つた。

芳江は今自分の居室に閉籠つて、机には對つて居るが本を讀むでもなく又筆を採つて書くでもなく、眉の間に憂波を湛えて、時々吻息を吐いて何をか深く考へて居つたがヌッと顔を上げて天井を眺めふウッと吻息を吐いて、又、グッタリと頭を下げて、憂の思に沈んで仕舞つた。

「芳江さん、何う成すつたの。」

と心易く入つて來たのは、年も芳江と同じ今年は丁度廿歳で學校時代からの親しい友である、容貌は芳江よりは一段落ちて居るけれど、下膨のホヤ〳〵とした顔は、頗る愛嬌があつて、殊に其目付が頗る愛くるしい。

「何處か加減でも惡くつて。」

と芳江の顔を差覗いて言つたが、芳江は返答をせぬ。

「若し芳江さん。」

と再び呼び返へされて始めて氣が付いた樣に、

「オヤ光子さんですか、何時の間に來て在つしやつたの？」

「あら、芳江さん、妾の來たのを知らなくつて？ほゝゝゝ。」

と厭味を持たせて笑つた。

「はわ少とも知らなくつて！。」

「ほゝゝゝ然うでせうよ、嬉しいんだから其に計り氣を奪られて居なさるんでせうよ、眞實に羨ましいわ。」

「あら、光子さん、何んですつて妾に何か嬉しい事でもあるつて？。」

「オほゝゝ其麽知らぬ顔なんかしたつて無効ですよ、ちやんと知つてますから。」

「ほう可笑い事ね、何でせう、妾には嬉しい事なんか少ともありませんよ、近頃は何だか氣が鬱々してね、何うも心持が惡くつて少とも面白い事なんかありませんよ。」

「其が嬉しい故なのですよ。」

「あら嘘ですわ、其麼道理がありますか、誰でも嬉しい時は顔に露はれるものぢやありませんか、光子さんは毎でも宜い加減な事ばかし云つて！。」

「ほゝゝ然うかも知れませんね、だけれど――眞實に嬉しい事はなくつて？さう隱して在つしやるなら、妾から云ひませう、よう厶いますか。」

「はあ、あるなら云つて御覽、妾には少とも其麼事はありませんから。」

「それぢや云ひませう、芳江さん眞實に羨ましいのね、高等官の奧樣になぞならるゝなんて、……「法學士縣參事官關山夫人……關山芳江。」

「あら嫌――嫌な、あんな人――。」

とサッと顔に紅葉を散らしたが、見る〳〵紅が失せて仕舞つて軈ては眞蒼白な顔に變つた。

光子は今何故に芳江の顔が激しく變つたと云ふ原因は知らぬので、只自分が餘り揶揄たものだから其で腹を立てたのだと思つたので、氣の毒らしい顔で其儘口を噤んで仕舞つた。

暫しは雙方無言である、芳江の顔の色が餘りに惡るく成つたので光子は何處迄も氣の毒に成つて、果ては餘り言ひ過した樣な感じがして來た。

日常隔のない親しい友の間から、從來は隨分共に揶揄た事もあつたし、又、氣に障る樣な事も云つて居つたけれど、雙方氣にも掛けず、心にも留めずに居つたのが今日に限つて恁麼事を氣に掛けて、而も顔色迄も變へるとは何事であらうと疑の雲が起つたけれど、而し其を解釋しやうなぞと云ふ深い疑ではない、只奇異な感が一寸頭に湧いたのみであるが、それも直ぐ消え去つて仕舞つて何か不快な事でもあるのであらうとの念が殘つた計り。

それで今度は眞面目に詞を換へて他の事を語り出した。

「若し芳江さん慍つて？氣に障つたら許して下さいよ、あの、時にね芳江さん！。」

「はい。」と芳江は幽かに答へたのみで、顔色は矢張り蒼い。

「あの貴女も御存知の葦村の秀子さんね、妾等と一緒に學校を卒業すつた──彼の人が可憫想で堪まらないのよ、あんなに薄倖な人もありませんね、心にもない人へ無理やりに嫁られて、其上其夫があの教科書事件で有罪の判決を言渡されて、今は牢屋に繋がれて居られ後には秀子さんが唯一人で、世間からは罪人の妻などと爪彈され、友達からは見放されてよ、その上兩親まで罪人の妻に用はないなぞと云つて在しやるとの事で秀子さんは始終泣いて計り居なさるつてよ、御兩親も餘り殘酷いぢやありませんか、それも自分から好き望んで嫁つたのなら仕方がないけれど、嫌だと云ふのを無理やりに嫁つて、今あんな事に成つたから見放すなんていくら繼母だつて餘り殘酷い仕打ぢやありませんか、秀子さんには利根山と云ふ許嫁の夫が御有成すつたのですよ、妾も一度逢つた事がありますが、中々好い人でね、小學教師こそして在つしやるが、年が若いし學問があるし將來の見込が充分ある人でしたよ、委しい事は知らないけれど其人の阿母さんがね、秀子さんの實母さんの臨終の時、是非秀子と貴女の息子とを添はして下さいと、呉々も頼まれたそうで、それで許嫁と定まつたのだそうで、元より其人の阿母さんと秀子さんの實母さんとは兄弟の様な關係だつたそうですよ、それで許嫁と云ふ事に定つたのだそうで──雙方共中々睦ましく兄弟ともない様でしたが……。」

と愛嬌ある顔も何時しか憂の雲に鎖されて仕舞つた、顔色變へて無言で居つた。芳江は此話に熱心に耳を傾けて居る。

「芳江さん――眞に女と云ふ者は辛いものですね、現の世の中に女位割合の悪い者はありませんね、法律では男に許り權利を與へて女には少しも與へず、又親や夫の云ふ事なら無理でも從はなければならぬのですものね、妾は其を考へると女に生れたのは、眞に口惜しくて堪まりませんよ、それはそうとしてね、其麼仲を遂々利慾の爲に秀さんの御兩親が割いて仕舞つたの、餘りと云へば餘りぢやムいませんかね、芳江さん、利慾の爲に切るに切られぬ仲を割くなんて而もちやんと許嫁と定まつて居る中をね、是が男であつたならね、嫌で貰す事が能るけれど、女の身の悲しい事には、恁麼愛して居る中でも親の命とあれば割かなければならず、什麼嫌な人でも、親の命とあれば嫁かねばならんのだもの、若しも反けば、女の道に悖ると云はれ、眞實に女位辛い者はありませんね、秀子さんは眞實にあの時は泣いて、目も腫らして泣いて嫁かれましたよ、本當に誰だつてね、恁麼塲合には泣かないでは居られませんわ。」

光子の目には何時の間にか涙が浮んでる、ふと頭を上げて芳江の顔を見た時、芳江の眼には光子のそれよりも尙多くの涙が溢れそうに堪えられて居る、果てはポロリと二滴三滴膝の邊の衣物を染めた。知らず此の涙は果して如何なる哀恨の意味が含まれて居るのであらう。

話が漸々濕つて來た。

只さへ靜かな秋の日にもう夕暮近く成つて來たので一層寂しく成つて來た、のみならず雨さへしと〳〵と降り出した、軒の石叩く雨の音も恁う云ふ時には一層の哀しさを添えるものである。

石打つ雨の音、土叩く雨の響、今二人が話して居る窓の外からよく聞える。

「親の命に反く不孝者と云はれる切なさに切つても切られない中を割いて、其こそ血の涙で嫁かれましたでせう、そうして遂々嫌な人に添はれたのは丁度去年の春頃でしたの、後に殘された利根山さんの心の中は

甚麽で厶いましたらう、什麽に殘念で厶いましたらう、非常に恨まれたそうでね、其からは一度も顔を合せられないで、今も何非常く恨んで居られるそうですよ、其時は秀子さんも色々と言譯をされたそうですが遂々先方には通じないで、返事は何時も不貞腐者には用がないとばかり、聞けば其人は其時から學業は悉皆打棄つて仕舞つて、毎日々々酒ばかり飲んで、良からぬ者と交はつて遂々破落漢の樣な者にお成り成すつたつて其れも誰れの爲にと云へば皆兩親が惡い爲にね、秀子さんも嫌だ〳〵つて非常に言はれたそうですが、あんな小學敎師などに嫁つたつて何になる、此方は縣視學官だ、殊へ此方に嫁けば私等の爲に什麽に利益だか知れない、何の利慾の前には許嫁も何もあるものかなど、、無法な理窟で遂々從はせられなすつたそうですよ、さあ嫁つて見ると夫は不正な人間、今度の敎科書事件で罪が露はれて遂に牢屋の人となられ今では秀子さんが只獨り、後に泣いて居られるんですつて、眞實に可憫想ぢやありませんか、妾はお可憫想で涙が溢れますよ……。」

と張り切つた胸が俄かに破れてハラ〳〵〳〵と際限もなく涙を溢した。

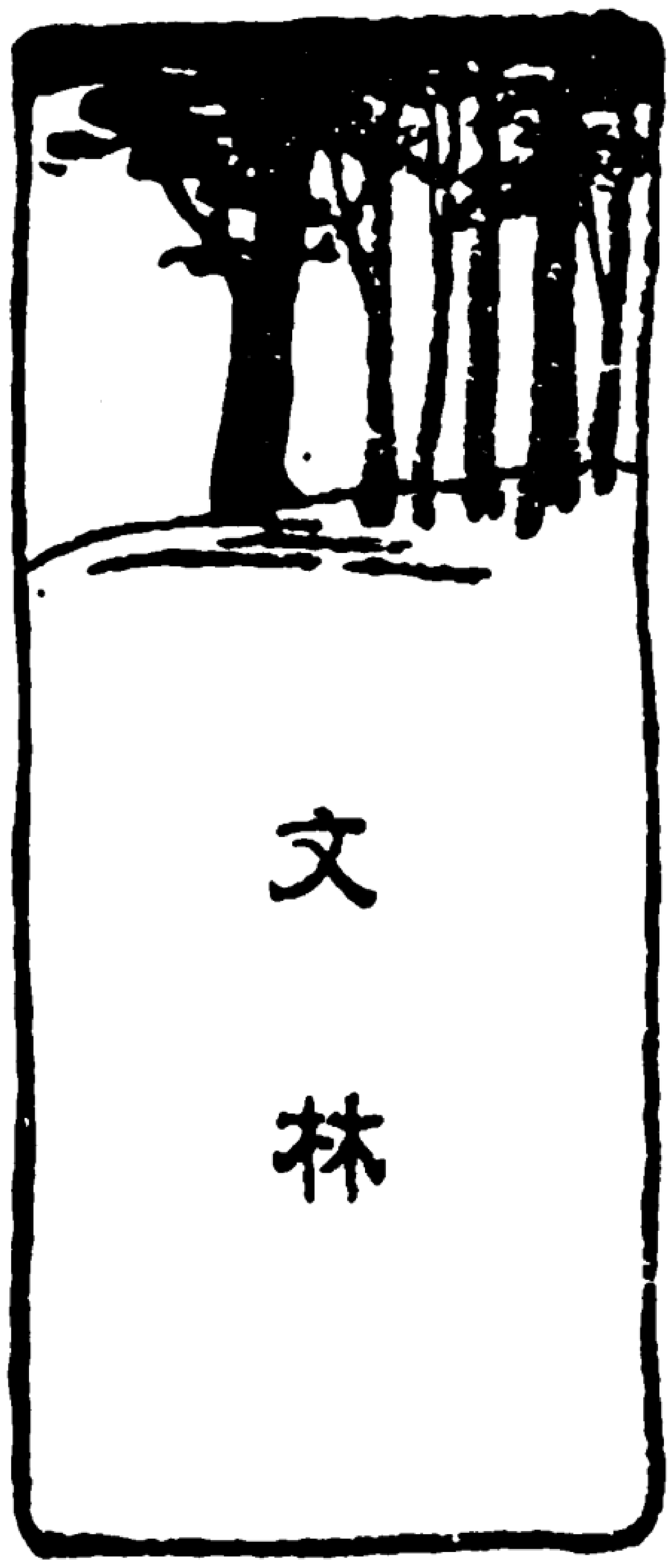
光子は同情に堪え兼ねて泣いたが、芳江は我身につまされて、一層厚き同情を表して一層熱き涙を灑いだ、然うして自分も亦恁う云ふ境遇に陷らねばならぬ事かと思ふと、其狹き胸が寸々に引裂かるゝ樣で、果ては堪え兼ねてかつぱと計りに泣き伏した。

其後芳江は秀子と同じやうな境遇に沈んで、今は毎日々々泣いてばかり、儚ない月日を送つて居るとの事である。

雪田は如何せしにや、多分は利根山と同じ軌道を辿つて居る事であらう。

（完）



天長節御題詠進寫（明治卅六年十一月三日）

尾張濱主

七御代につかへしおきなよび起し このみうたけにまはせてしかな　高崎　正風

七代まで君に仕へしおきなとも みえぬは舞の手振なりけり　鍋島　直大

おいの浪百重に十重をかさねきて かへすま袖や花とみえけん　本居　豊穎

みよ長くおほましませと言ほきて 世の長人の袖かへすはも　黒川　眞頼

みつからに作りいてたる舞の手も ならふものなき翁なり覧　津輕　承昭

百年にあまるおきなかふりはへて なかきよ祝ふ舞の袖かな　松浦　詮

もゝとせを麓にみつゝ嬉しくも まひのほりけむ大内のやま　渡邊　清

老ぬれと立舞ふ袖のかろけれは けに類ひなくみそなはしけん　梅溪　通治

おいの浪たつ濱主のまひのそて わかきにかへす姿とそきく　竹屋　光昭

よはひをも君に捧けて百年に 餘るおきなのまひかなてけむ　前田　利鬯

たちまひし翁か袖はちよへても ひとの心にひるかへりつゝ　藤井　行徳

いとなかき齢の舞をかなてつゝ 君かよ祝ふこゝろゆかしも　水野　忠敬

百年にあまるよはひを重ねても たちまふ袖の輕くやありけん　唐橋　在正

そて輕くたちまふさまは百年に あまる齢のおきなともなし　柳原　愛子

もゝとせにあまる翁のたちまひし　清岡　長延
　ほまれは世々に猶殘り見
ゆたかなるみよを嬉しと老の身も　常磐井堯熙
　老を忘れてまひいてにけん
百年にあまる老ともみえさりし　藤枝　雅之
　まひの袂をおもひこそやれ
もゝとせの齡かさねし老人の　千種　任子
　たちまふ袖やゆたかなりけむ
わらはへか立舞ふ様にみえつらん　小倉　文子
　もゝとせこえし翁なれとも
百年をこえしおきなの舞の手は　園　祥子
　よに傳はりてのこりける哉
もゝとせにあまる翁の立舞ふを　宮地　嚴夫
　あな樂しとやみそなはしけん
やはらかにまひの袂やかへしけむ　坂　正臣
　草木さかゆる御代の春風
大宮にけふあたらしくうたはれぬ　小池　道子
　翁かまひのふるき手振も

もゝとせをこえし身にして大前に　藪　嘉根子
　立舞ふ影は老せさりけむ
百年にあまる翁もわらはへの　北島以登子
　たちまふさまにみえし君かな
雲の上にまひし舞の手今もなほ　津守　好子
　鈴となりにし名こそ高けれ
限りなき君かめくみに老にける　吉田　鉦子
　身をも忘れてまひやしつらん
きみを祝ふ言葉の花もそひてけり　荻原　嚴雄
　よの長人のまひのま袖に
草も木もさかゆく時に老人か　平田　三枝
　たちまふそてや豊けかりけむ
そてかろくたちまふさまに百年の　吉田　愛
　齡かさねし人としもなし
ふるきよの舞の手振はしらねとも　植松　有經
　老は若きにたちかへりけん
かゝやきし雲井の庭の舞の袖　小出　粲
　おいもわかきにひる返しけむ

若竹につゆもかはらぬおきふしや　中村　秋香
よのなかひとの姿なるらん

まひつゝものほる雲井の龍の尾の　小杉　榲邨
みちは迷はぬ御代の長人

百歳にわまれる老もかくれけむ　鎌田　正夫
雲井の庭のまひのたもとに

草も木もさかゆる時にわひてこそ　大口　鯛二
老の浪にも花はさきけれ

草も木もさかゆる時と立舞ひし　猪熊　夏樹
心やいかにうれしかりけむ

わしたつもうらやむ齢かさねつゝ　千葉　胤明
まふ袖かろし九重のには

うれしさにおつる涙はたまものゝ　遠山　英一
みけしの袖に包みかねけん

九重の大内山もとよみけむ　加藤　義清
をはりのはまのわしたつのこゑ

ふえ竹の林のおくもきはめきて　則武　正副
高きしらへを世に傳へけむ

君か代に七代つかへしなかひとの　尾崎　宍夫
身の喜ひをまひかなてけん

たちまひし其いにしへの面影は　須川　信行
今も草木のめにそみえける

流星　山本細柳

月のひかりはさえさえて
水もしづまるさよなかに
庭の千草をふみわけて
大空たかくながむれば
綺羅をつらぬる星のかげ
黄金を砕くごとくなり
思はず空を見つむれば
かなたに下るながればし
下界に落つるきらめきは

卯月なかばに風たちて
名にあふ井出の玉川に
ちる山吹に似たるかな

くだりし星のまたさらに
消えてゆくゑは見えわかず
天の河原のをりひめを
つまどひせむとしのびしか
そはあさましの心よな
はぢずや清くてる月に
またもやくだる星一つ
細くさゝやきいへるやう
清き雲井と人はいへど
紫微垣今は風あれて
曲順星のかげくらし
さればのがれむ人の世に

下ると見えしその星も
またも姿をかくしけり
ゆくゑやいづこおぼつかな
もゆるほむらの山を見て
思ひにくるふひとの子の
うらみの息と恐れしか
たゝしはげしくふく風の
雨にまじりてすさぶ時
しげる深山の杉の樹の
梢にさわぐさまを見て
無間地獄にありきてふ
鬼の姿とひがみしか
そはあやまれりあまつほし
しのゝめ鶏の一こゑに
わが世のやみのはれゆけば
なさけの露の色ふかき

うき世の花はほゝゑみて
下界は綾となるものを
さてもたのしき人の世の
きゞす鳴くなる春風に
すみれつむ野の大空の
ひばりのうたをよそにして
まふや蝴蝶とうちむれて
櫻かざすもよからずや
夏は野にさく藤の花
松の梢に紫の
たくみのひもをひるがへし
色なつかしき花あやめ
いさゝ小川の水をそめ
空には淸きほとゝぎす
秋は千草の花ざかり
山の裾野に風すぎて
桔梗苅萱をみなへし
亂れて花のゆらぐ時
たれをまつむしいとゞしく
ふりすてがたきねにぞなく
冬となればさよ中に
軒のむら竹風さわぎ
板戸にそゝぐ玉あられ
とくおきいでゝながむれば
世は白銀にうづもれて
一本の松も見えわかず
四時の色香にうつりあふ
人の心の花園の
なさけのいろのなつかしき
ゑみのしらべをきくときは
うき世にうさはなかるべし
くだれみそらの夜のほし

敎の庭

十二月十五日兼題

正三位子爵 黑田清綱先生選

（代選菊池武則先生）

寒月

天

山口縣都濃郡末武下村 村上操子

くまもなく霜夜にさゆるつきかけも
なほ見すてゝはねられさりけり

地

下谷區下根岸町三十三番地 椎野秀子

いかはかりこほりはてけん池みつの
かけもうこかねふゆの夜のつき

人

秋田縣由利郡本莊町裏尾崎町 古瀨椎子

なかむれはゆきよりほかのくまもなし
いつれかつきのかひりなるらん

甲

愛知 後藤のふ子

夜をふかみかけも軒端にかたむきて
つらゝにやとるつきのさむけさ

東京 戸木貞子

霜こほるおち葉かうへにわかかけを
みるさへさむきふゆのよのつき

東京 山崎文子

しろ妙のゆきにひかりをさきたてゝ
やまのはさむくいつるつきかな

熊本 日高かず子

みつとりもうかはすなりし池の面の
こほりにさゆるつきのさむけさ

美濃 吉村せむ子

ふゆのよのと鎌に似たるつきかけは
みをきるはかりさむけかりけり

横須賀 岩橋花子

みし秋のおはなかそてもしもかれて
野すゑおらはにさゆるつきかな

東京 山田ふみ子

橋の上におくしも見えておほそらの
つきかけさゆるふゆの夜半かな
大和 栗山たか子

あらしふくにはの枯はのしもの上に
ひかりさえゆく夜半のつきかな
埼玉 横田やな子

隅田かはつくはねおろしさゆるよは
なみまにすこきつきのかけかな
下野 若林とよ子

ありあけの月なほさむしみつのおもは
かけうつしつゝしもやおくらん
東京 林 環子

たに川のおとはとたえてまつか枝に
こほりてかゝるふゆの夜のつき
埼玉 横田音羽子

玉あられこほれてはれしあしふきの
のきはさむけきふゆのよのつき
東京 大江春子

きらきくも雪と見るまてさむけくて
かけさへこほるふゆのよのつき
東京 川和晴野子

風はやみしくれもよふすくも間より
もるかけ寒むしふゆの夜のつき
東京 清水はるみ

ふく風になくおほかみのこゑさえて
ひろのさむけくてらすつきかけ
東京 敷島うた子

みつとりのこゑきくたにも寒けきを
こほるいり江のふゆのよのつき
秋田 小嶋いわ子

かゝみなす池のこほりにかけとめて
いとゝひかりのさゆるつきかな
[illegible]

たにみつもいはまくくやこほるらん
さえこそわたれふゆのよのつき
東京 大町律子

山くくはみなしろたへにうつもれて
ゆきよりいつるつきそさむけき
東京 金原玉城子

池みつのこほれるきしにゐるかもの
はそてのしもにさゆるつきかけ
壬生 岩岡壽子

村しくれはれゆくそらのくも間より
もるかけさむしふゆの夜のつき
筑後 武田外代子

山のはにゆきふりつもるたかねより
くまなくさえていつるつきかけ
神戸 それ女

ものみなの氷のうちにねむれるを
まもりかほにもさゆるつきかけ
千葉 森田元子

みつとりのこゑあはれなる池の面に
やとれる月のさむけくもある哉
名古屋 木下鶴子

野きつねのこゑもきこえて霜かれの
尾はなにさゆるつきのかけかな
東京 河合粂子

よひのまにみそれふせきし板まより
もりかはりたるつきのさむけさ

乙

よあらしの木すゑをわたる音すごく
こほりて出つるふゆの夜のつき
東京 荒井せい子

いはてやまおろすふゝきのかせよりも
おとせぬつきのかけそみにしむ
秋田 古瀬隆子

ひさかたのあまのかは風さえぬらん
くものなみちにこほるつきかけ
埼玉 前野ふさ子

きつれなくかれ野の原のしもの上に
さゆるもすこきふゆのよのつき
豊橋 鵜野くわ子

寒けさは身にしみしみとこからしや
よはにこほりてさゆるつきかな
横須賀 上田馨子

もみちははみな散りはてゝ木の間より
もるかけさむしふゆの夜のつき
出雲 柳楽綺子

ふりつもる雪のひかりにあらそひて
かけたにさむきふゆのよのつき
肥後 徳永萬壽子

ふくろふのこゑ淋しくも夜はふけて
木の間にこほるつきのかけかな
東京 積山きやう子

ふる雪はいつしかやみてしろたへの
やまのはいつるつきのさむけき
攝津 大岡化子

冬かれのこすゑさびしき木の間より
洩れくるつきのかけのさむけさ
攝津 塩見文子

やま里はふゆそさむさもまさりける
しも夜にこほるつきのさやけさ
東京 荒井満武子

高との ゝ戸ほそのうちより雪みれは
いつしかはれてにひつきのかけ
東京 荒井幸子

こからしにそらみかゝせて燒たちの
かけものすこくにほふつきかけ
攝津 森本みち子

さえさえて池のかゝみにうつりけり
武藏 松本松子

しもよのつきのかけもこほりて

白つゆのひかりもいまは置きかへて　かれ野のしもに冴ゆるつきかけ　横濱　小泉はろ子

にきはしきみやこ大路もおとたえて　てるかけすこしふゆのよのつき　東京　松村あさ子

さえさえて池のかゝみにうつりけり　ゆきけもこほるふゆのよのつき　武藏　佐々木八重子

ゆきさそふあらしに影はさえ〳〵て　こほりにやとるつきのさむけさ　但馬　田尻保代子

きつれなく蟲みにしみてふくるよに　ねやもるつきのかけのさむけさ　東京　山口琴子

霜さゆるをたのそほつのそてのうへに　やとるもこほるふゆのよのつき　東京　大枝庸子

よさの浦はこほりやしけん月かけの　さえわたりゆくあまのはしたて　埼玉　前野須賀子

時雨ふるくものたえまにもるつきの　かけとゝもにそこほりそめけり　東京　椎野薫子

ましらなくこゑもあはれに山かせの　こすゑをわたるつきのさむけさ　羽後　三浦さわ子

ふけわたるよはのあらしに霜さえて　つきかけさむししはしのしたみつ　羽後　三浦ふさ子

かせさゆる外山のゆきにてりあひて　ひとつにこほる夜半のつきかけ　東京　篠田圓子

山かせのつきはえかほにさゆれとも　ひとこそみえれしもよさひしき　東京　荒井あさ子

しもふかき夜さむの月のさひしきに　こゑもあはれによふはたか子そ　東京　荒井こと子

ゆきかよふちとりのほかのくまもなし　すまやあかしのふゆのよのつき　秋田　古瀬とよ子

世のちりはみなから雪にうつもれて　いつるもさむしやまのはのつき　羽後　三浦みれな子

しつくするのきのつらゝの音やみて　むすひこめたる夜はのつきかけ　羽後　佐藤かつ子

むらしくれはれゆくそらのくもまより　ものすこきまてつきさえにけり　秋田　梅村きよ子

ふきおろす峯のまつかせ身にしみて　さむさいとましつきのかけかな　秋田　和田りつ子

ちりしける庭のおち葉のつゆの上に　やとるも寒ししふゆの夜のつき　壬生　岩森みと子

ひろき野のたまちる露のさよふけて　かけさえさむきふゆのよのつき　下野　長しま子

白たへのゆきふりつもるやまのはな　こほりていつるつきそ身にしむ　肥後　佐々小琴子

夜あらしに月のかゝみはみかゝれて　たもともこほるねやのうちかな　肥後　佐々有鄰子

かゝみ野のかれはのすゑに月をちて　きつれなくなりゆきのあさあけ　福井　平田そう子

ふくろふの聲ものすこきふゆのよは　つきのひかりもさむけかりけり　北見　中川伊代子

秋ならはふくろもしらて見んものを　しもにてりそふつきのさむけさ　東京　石川学子

まつかゑにおく霜しろくかせさえて　かけすさましきふゆのよのつき　東京　河田いし子

枯たけにしもはまはらにおきそめて　てるつきかけのさゆるよはかな　東京　小杉きよ子

あれし池の蘆まもけふはこほりそめ　てるかけすこきふゆのつきかな　東京　小杉うた子

いけ水のむすふこほりのそこにさへ　筑後　武田龜子

こほる風ふすまもさむししろたへの
こゝろふかくもやどるつきかけ　肥後　仁保基子

ゆきにみかけるふゆのよのつき
時はかるうつはのおともさえ〳〵て　肥後　吉弘周子

さよふかく霜にしもおくふゆのそら
ゆきよりこほるふゆのつきかけ　肥後　岡山登喜子

木がらしに雲はあとなくはれゆきて
こほれるつきのかけのさむけさ　肥後　徳永多瑠子

みる人もたえてあらしのさむそらに
さむけくてらすふゆの夜のつき　肥後　徳永廣子

音さゆるたにの小かはにつきすめる
てるつきかけのひかりさひしき　三河　堀田伊勢子

にはのものいけにむすひしうすらひに
夜半そさむけきやまのしたいほ　伯耆　樋口つる子

霜ばらふなはすてやまのかせさえて
かけもうこかすうつるつきかな　水戸　田所やす子

いつしかもかけひの水のおとたえて
田ことにこほるふゆの夜のつき　水戸　千種須賀子

軒端なるつらゝつらゝにかけさえて
そらにもこほるつきのかけかな　水戸　田所たけ子

なきわたるちどりの聲もとだえして
きらめくつきの見らくるむしも　東京　山本蕉子

月かけのしもにこほりにやどらすは
つきかけさむきすたのかはつら　松山　上原のふ子

身にしみてふくさむ風にしもさえて
かくもさむくはおもはさらまし　東京　林艶子

冬かれののへのちくさにつきおちて
ゆきけのそらにつきそこほれる　東京　岩谷淺子

しもさえわたるありあけのそら

霜ふかくきつれのこゑのさゆるよの
つきかけさむしなすのしのはら　京都　坪田りき子

玉さゝによひのあられのおとなくは
よふかきつきなゆきとみましや　東京　岩谷梓子

木からしの庭のもみちは散りすきて
しもの夜さむしかた破れのつき　東京　石川蕙子

丙

月きよくみつのなかれもこほりけむ
木からしさむきれやのうちかな　陸前　前田河千年子

かけきよく光りさやけきつきみれは
夜半のさむさやいとゝましけむ　陸前　前田河みさを子

いろかへぬ庭の小まつのいたゝけゐ
ゆきのはなかさつきもめてけむ　陸前　三浦ゑん子

結ひてしこほりのうへに冴えわたる
かけなほさむしふゆの夜のつき　壬生　きよみ子

はりつめし池のこほりにかけとめて
さむけく見ゆるふゆの夜のつき　尾張　渡部淑子

よあらしにさむ夜のとこの夢さめて
あふけはすごき夜半のつきかけ　伊豫　うたかた子

うたゝねになきたらちめの影みえて
さむれはさむしふゆの夜のつき　伊豫　山崎匡子

かせさゆるみそらの月のかけ見れは
さなからこほるこゝちこそすれ　伊豫　梯たけ子

宵のまのあらしにくもははらはれて
いよ〳〵さゆるふゆの夜のつき　伊豫　梯京子

いそちとり友よふこゑもうらかれて
なきさにこほるふゆの夜のつき　東京　篠田久子

いにしへのしがのみやこの古寺は
われしまゝなるつきそさむけき　大和　栗山俊子

見る目さへこほるはかりにおもはれぬ
ふりにしゆきのうへをてるつき　東京　藤澤文[illegible]子

こすゑみなはらひ盡しゝこがらしの
なごりにさゆるやまのはのつき　東京　すゞしろ子

ゆきふかきやまよりいづる月かげは
こほるはかりにさえわたりけり　長野　岡田千[illegible]子

うすごほりむすへる川にゆくふれの
さをにくだくるそらのつきかけ　東京　椎野鋭子

冬のよのしもにふけゆくいけみつの
かゞみをみがくつきのさむけさ　東京　甲藤若子

玉あられみたれしそらのくも間より
みがゝれいづるふゆの夜のつき　埼玉　横田秋子

木からしのふきしくみれの松の上に
いてたるつきのかげのさむけさ　三河　永井きい子

つむ雪とまがふはかりにかけさえて
さむけさまさるふゆの夜のつき　和泉　稲原菫子

ふり積るゆきもこほれるやまのはに
みにしむはかりさゆるつきかけ　沖縄　仁保しま子

小夜更てしもしろ／＼と人たゑて
かせのこまとのつきそさむけき　三河　白井よし子

みつとりの羽音もさむきいけみつに
こほりてやとるふゆのよのつき　熊本　田代艶子

あらしふく音さえさえてしつかやに
もるかけさむしふゆのよのつき　熊本　田代綾子

よもすから空すみわたりてるつきの
かけもこほりてさむけかりけり　肥後　徳永[illegible]子

ゆきおろしふくやしもよにてる月の　呉　和住千鶴子

かけさへいとゞさえまさりける

こゝろから寒しと見ゆるなにはえの
みつにそやとるふゆのよのつき　香川　大山豊子

夜を深みやまのはちかくつきさえて
あまかふゑの音あはれなりけり　北見　横澤あやめ子

みつあせてくさかれはてし冬川の
こほりにやとるつきのさむけさ　三河　服部萬子

白雪のふりつむにはのうめか枝に
さすつきかけそさむさましける　茨城　中里俊子

たま川にみかけるたまやこれならむ
こほるみきはのつきのさやけさ　三河　河合ぬひ子

空たかくさえわたる夜のつきかけは
こほるはかりにてらしつるかな　長野　山本直枝子

見わたせは晴にし夜半のそらさむみ
かけもこほりててらすつきかな　長野　山本基子

ぬきすてゝ雲のころもゝなかりけり
さむさになれしふゆのよのつき　鳥取　大塚信子

小夜ふけて羽音さむけきみつとりの
こほれるとこにやとるつきかけ　東京　三好珍子

おもふとち火桶によりてかたりつゝ
ふけてしもよのつきを見るかな　静岡　竹内みつ子

あつふすまこほるはかりに冬の夜の
しもにさえゆくまとのつきかけ　東京　椎野ぬき子

みゝなれしかけひの水のおと絶えて
こぼるはかりのつきのかけかな　東京　山田静子

冬の夜はしもにこほれるかたよりも
あらしにさゆるつきのさむけさ　東京　青木たま子

おいきつれうゑになくらむ聲きけは
いやものすこきふゆのよのつき　兵庫　駒井登雄子

千鳥鳴くこゑはる〴〵と冴え〴〵て　こゝろしも夜のつきのさむけさ　攝津　大岡幸子

遠方の山のあなたもさえぬらん　こほりて出つるふゆの夜のつき　近江　杉田こと子

霰やみてなり〴〵てらすつきかげは　あきのつきにもてりまさりけり　河内　小山英子

窓あけて夜半のあらしをながむれは　いよ〳〵さむくこほるつきかげ　東京　松内郁子

おいまつのしげれる山のこのまより　ゆふしもみえてつきいてにけり　河内　竹内敬子

夜もすから松吹くかぜにしもはれて　そらにこほれるありあけのつき　東京　松田信子

いろりたく我やのまとのそのまより　さむくもるゝふゆのよのつき　河内　小山房子

かんの朝そらながむれはときあけの　かゝみにまさるしふこやのつき　兵庫　兒島千年子

かれわたるさびしき野邊の霜の上に　やとれるつきのかげそさむけき　三河　田中文子

冬の夜のつきかげことにさえたるは　たかれのゆきにみかゝれにけむ　長野　松澤まつ子

霜こほる夜半にさえたるつきかげを　めてんと訪ひ來ん友もなきかな　長野　松澤まつ子



十二月十五日兼題

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

歳暮

天

下谷區御徒町三丁目廿四　岡田柳子

哀れ、今年もはや暮れ行きて、殘んの日數、指をりかゞなふべくなりぬ、街は家毎に、塵打ち拂ひて、緑りの松竹立てわたし、年のいそぎの知らるゝを、己れ將如何にしてか、新年を迎ふべき、積れる文机のちり、打見るにも、まづ怠りの思はるゝよ。あすありとのみ頼みつゝ、過ごしぬる身は、一年の長き間、一の業もなしえで、朝に見むと思ふ山櫻の、夜半の嵐に散るをもえ悟らで、空しう過ぎぬる事の愚かさ、さりながら、今更悔ゆとも甲斐なし、來ん年よりは心の駒に鞭うちて、學びの道を勉め勵み、せめては此悔なからむやう、心がけばや。あはれ此年の暮よ、學びの友の君達は、定めしわざをもなし終へ給ひて、來ん年を喜び待ちまさむ君の、さわにおはすらむと思へば、いよ〳〵我身のせめられて、時計のはりの進

みゆくさへ、今はうらめしう、打見やられてなん。

地

本郷區東片町四十二番地下田方　篠田圓子

一年のありし事ども、かにかくと思ひ出でらるゝは、年の暮になむありける。强ち花にあくがれ月に浮れてのみ過しゝにはあらぬ物から、隙行く駒の足早きには、兎角遲れがちなる身の程こそ、うたて口惜しかりけれ。未だ少女なる己等は、世の事業には、かかつらはねど年の暮とし云へば、又應はしき物思ひありて同しく松賣る聲にも追ひたてらるゝ樣心せはしく覺ゆるぞをかしき。いでや來む年は何をかなさまし。今年の如き墓なき月日は、いかで再くりかへすべき。年々仇にのみ打ちすごしなば飾海老の如く腰の屈る迄も樂しき境には至りつくまじ。然ばにや門松や冥土の旅の一里塚と云ひけむ僧もありとか。朱文公は少年易老と曰ひ給ひけむかし。何れもよき敎へにこそ。今日しも宿に植木師のもてこし早咲きの梅よ、能く雪を凌ぎ嵐に堪へてこそ、かゝる高き香をそへて、百花には先き立つなれ。況て人と生れて辛苦に堪へざるべけむや。哀、廣き世の中にはこの年浪をこえ兼て、寄るべ定めぬ螢もあらむを、己は親の情のうち庭に、唯々隙行く駒と心の駒の鞭とりに心せかるゝ年の暮こそ嬉しけれ。

人

東京府荏原郡下大井村百四十八　三好珍子

花にあくかれ月にうかれ遊びて、散り行を惜み明安きをうらみしも、げに白露の草葉にねぶる胡蝶の夢の間にて、流るゝ月日は飛鳥川の水よりも早く、今年も早殘少なうなりぬ。いつも年の始は意の鬼に追はれつゝ、夢さめし心地して、ことし社はいそしみ年の阪をも安らかにこえばやと、思ふはならひなれ共、其おきてつる牛もえせで、あはれことしも又暮んとす。幼き妹どもは、さることも心にとゞめず、年明けなば歌加留多よ双五六よと、樂しげに指折かぞへつゝ待わぶるもいと羨ましう、我身もかくして過し來りしなるを、いつの間にか幼心のうせにけんと、思ふにも、己か腰の弓となり頭につもる白雪をわぶる老人とならん世まで思ひやられて、若き、若める、老いたる、とりぐ\大路を行かよふ人の樣を見につけ、何となう心世話しき年のくれに社。

さりながら一年〳〵に開けゆく樂しき大御代に生れ出で、年の阪を越ゆるたつきもなくして苦しめる人もあるを、御惠深き父母の御側にありて、身のつゞかなく過せしをこよなき幸と悦ばせ給ひつゝ、何くれと春着など調へさせたまふを見奉りては、いたづらにふりゆく身をも忘れて、幼子とともにこんとしをまたるゝもみな父母の御めぐみぞかし。

肥後　德永　房子

春の花秋の紅葉とゆびなりかぞへ、まつまの月日こそ、疾くおぼゆれ。四時うつりかはる、野山のけしきに、あこがれて、夢うつゝに日をおくり、はや一年も名ごりすくなくなりぬ、されば、門前をかよふ人の足音しげく、童子は松たつることをよろこび、童女は羽根つかんことをたのしみ、心々に年頭のしたくをなすに、姿はいまだなしうべき業の中にだも、終ぬものから、立かへる年のたのしき心も、いづこにか失はてゝ、年中のあやまちをくゆるも、年ごとにてせんなく、いとはづかしく思ひにしづむなりしも、心にうかびし古歌は、明日ありと、思ふ心のあださくら、夜はに嵐のふかんものかは、とかよめる意は、愚かなる身にも眞にしみじみとかんぜらる。又來む年をむかへなば、朝あることをわすれず、夕あることをたのまず、年のはじめにさきいづる梅花ともろともに、心の駒にむちうちて、此のおこたりをも、つぐのはんばかり、業をつとめはげまばやと、心にちかひ正しくそのかひあらまほしう、ねがひ侍るになん。

三河　堀田　伊勢子

怪しき音の耳に響きて、目を覺ましぬれば、極月二十五日の空は、東天僅かに白みかゝりて、隣れる家は今ぞ餅搗けるなる、そを聞けば今更のやう年の暮れ忙しう思はれて、日頃朝寐勝の我が身も何んとなう耻かしう、やをら臥戸を起き出でぬ。

杜の彼方烏の鳴ける、軒端近う雀の喧しきにも何んとなう年の暮るるらしう、只さへ澄み渡る冬の曉方、物の音冴へて憐れは深きに、ましてや年の暮れと思へば、道行く人の足音にも一入の感じは深う成りまさるなり。

あゝ新らしき年は迫り來りぬ。

煤を拂ふ人、買ひものに出る人、世は樣々の、立つ年迎ふる準備のみに忙はしき時とはなりぬ、無邪氣なるは五つ六つなる幼兒の、手先き覺束なう折りては、樂しき年を待つなる、思へば我身など成すこともなうて歲のみ重り行く愛はしさ、術のあらむには再び昔の幼兒にも成りて見たきに。

術車の音高う響きて、幾臺となう門松の市に運ばるゝ、彼處の辻、此處の空地、何時の間にやら松林となりて、靜けき世はことなうかしましき世とはなりぬ。

餘りよからぬ家の、枝松など釘打にしたる、與の外手まはり能く、見事に立てなむとての大松、中々に飾りも濟まで遲くまで軒端に立て掛けたる夫々の人の心こそ又なうをかしけれ。

一と年の暮とし思へば、何事も改まるやう心地のせられて、常になう掃除も行き届き、早くより贈り物などの支度も調へ、なにかなと心も落ちつかで案じ煩ひ居れば、時折り昔のことの思はれ、何時の年は斯くなりしを、母君の斯くのたまひしかば斯くして斯くありけるをなど、いとゞ胸に浮びては、獨りなかしうほゝゑめば、我にもあらで時は過ぎ行くなる。

長野　松澤　まつ子

まことやげに、春秋のくれゆくをだに名ごり惜しきを、まいて一年の終りになりぬるをや。さはれ例のうつろひやすき心には、新らしきをむかふる事のかぎりもなう嬉しくて、春着の用意とりどりにせ

はしきよ。
外面には市より物さはに求めて歸れる人あれば、學びのやより、古里の己が家庭へといそぐ女學生の袴の色はあせつるも心のにしきさばかりと思ひやられて笑ましげなり、男の童の顔にも手にも手ならひの名殘とゞめしまゝ走り出で、『松竹久』と打誦すれば、女の童の聲もやさしく『今幾夜ればお正月』と歌ふなきけば、心にかゝるくまもなし。いづこもく〳〵煤打拂ひ、松竹かざり、注連結ひかはし、年の神に來るもちひなば大きやかにつくりて來む年の幸を祈るもをかしきやとかいつくる間も、身も心も空なるよ。

伯耆　樋口　つる子

光陰矢の如し一度去りてはまた歸らずとは古よりのことはざながらげに日月は水のながれのごとし門松たてゝ千代を祝ひしも、いつしか杉田の梅見時となり、闇に匂ふ春月も、涼風を納るゝ夏の夜も、野邊のかるかや萩女郎花袖にまかへるすゝきにまれがれ、叢にすだく虫の聲空晴れ渡る秋の夜も、夢にてやありけんあなはやかりき、この一年思おこして、妾がけふまであゆみきし學びの道をかへり見るに、しら雪のなかにさきいでし梅のいちじるしきにほひもなく、只だうつらうつらと明しくらし、いともたふとき月日をば、心なくすごせし事の口をしく思はるゝのみにて、今更如何ともせんすべなし、年月はしばしもとゞまらず、はげしきながれのごとく過ぐるは、いともはやけれど、再びかへることはなしこぞのくれ庭面のひめまつにむかひ、かたくちかひを立置きしかひもなく、只あるは禍のみ夏季の際には不幸にも傳染病發生しおそろしいかな妾等の第五號室宿舎に蔓延し之れに罹りしもの數名なり、爲めに妾等は永らく休業しかてて加へて妾は胃病にて、數旬を古里に費し、親々の課業をさまたげ重れ重れの心配を懸け何たる不幸の今年ぞや、嗚呼げに不幸のきはみと云つべし、今更如何に殘念に思ども惜しむとも再び三十六年は來らず、今年はいざと送り置きて、新年を迎へあらたに勉勵して、今年の如き結果を見ない様修身書にもある如く歲月人を待たずとかや、妾も此言葉を手本にして、今より學びをはげみなば、庭の松にも耻ちない打ちかつ事もありなん、つとむ可きはまなびの道にこそ。

光陰の矢にいつか張る梓の弓

年暮れぬことしはいざと契りおきて
讀み盡し得ぬふみの數々

今更に何か惜まむ神武より
二千年來暮れてゆく年

東京　林　環子

年の暮に、身の怠り思ひ出らるゝばかり、世にかなしきはなし。うへ、年月に關守なきと云ひけむ。あらたまの年の始めつかたには、年の中に彼れもしなむこれもなさむと心に誓ひし事共、十が一だもえ果さで、早此年の暮るゝよと思へば、日比の怠り打なげかるゝにつけても、疾く過ぎゆく年月こそ、恨まるゝぞかし。三百六十五日、決して短しとは云ふべからず、たゞ我身の一日一日と此月日をあだに過したるぞ、こよなきなげきなりける。もし此一日をあだに過さゞりせば、などてかゝるうらみの起りぬべき。さなり、過ぎたるをなげゝばとて歸り來らず、益なきことに打愁むよりは、いでや雄心ふり起して、やがて來らん年にこそ、いそしみ勵みて、こそよけれと、心にちかひたるまゝ、後日の誡とてかくなむ。

東京　林　艶子

うべ白馬の隙を走るにたとへけん、年月の進みゆくさまこそ、いと早けれ。年ほぎの客打むかへ、屠蘇くみかはして、遊びたるも、むかしと過ぎて、はや一年の暮とはなりぬ。打見れば、大路は人のゆきかひはげしく、商人の店には、提灯したゝかにともし、商ふ品など山のごと打つみて、客打むかへんと、のゝしりかはすもをかし。古への人の、犬の足さへいと忙はしといひけんも、うべ、吾等學びの窓にあるさへ、何となく心せきたつこそをかしけれ。さても世の人、年の暮とてかく殊やうに打騒ぐこそおろかなれ。今日の苦勞は今日にて足れり、と教へられたる、基督の御言の儘一日をいそしみ

たらば、何とてかゝる忙しの思ひあらめやなど思ほゆる中に、除夜を告ぐる百八の鐘の音なり響きぬ。あはれ此鐘つき終らば、世は三十七年の光いやてりそひて、人は、美しくよそほひして、新年を祝ひかはすかと思へば、元日や後に近き大晦日といへる、古き俳師の調まへ、おもひ出られて、いとゞゆかしさのきはみなりけり。

東京　石川薫子

故郷を出でしは五とせの昔、妾が十五才の折なりし、あすは東へ出立せんと、何にくれと旅の用意せし折のうれしかりしよ、まがれ路走しる車すらもどかしく、道すがらの景色だにながめもやらで、心は東の空に飛び通ひぬ、やがて新橋に着しては目もはるかに降る人昇る人迎ふる人の多きに驚かれ、あたり嚴々と神々しき計りのかまへに、さすが世なれぬ身は何となく恐ろしく、めづらしき心地せられしよ、嗚呼されど〳〵妾が最もたのしくうれしかりし、未だに忘れもやらぬなつかしき〳〵、年はすでに五とせの昔にすぎさり、今や又片手折らぬまに六とせの昔に返らんとす、天ぎる雪に遮ぎられたる月の光、見よ盛もなく恨みもなくいかに靜かに笑ふが如きを、あすは新らしき年を迎ふとて、人の心のせはしげに、家ごとに笑ひさゞめく聲、あるは人の門敲き走りありき、足も空にこと〴〵しくののしる聲など、絶えてさびしきほとりも、いとさわがしく、其の日其日を送るだにくるしき人東の奧のはて西の路道のたれかれとなくあすは、たのしきめでたき年を迎へんとし、小松門松ひさぐあき人の聲、寒き空にひゞき渡り、雪やう〳〵晴れてあたり眞白く、夜半過る頃迄にぎはしくせはしさも忘れはてし心地して、たゞ何となく新しき年の來る事のうれしくおもへど、曉がたよりさすがに、音なくなりぬるこそ、年の名殘りも心細く、返らぬ年のいとをしうて、さびしきかなしき心地こそすれ。

石狩　後藤きみ子

まがきに匂ふ白菊に、君がよはひの千歳を祝ひ、み空にきこゆるかりがねに、千里の友を忍びし秋の日も、いつしかむかしとなりて、世はなべて淋しさまさる冬枯の時とはなりぬ、それさへきのふと暮しけふとすごして、いよ〳〵呉竹の一夜のかぎりとはなりぬ、實に年の名ごりばかり、こよなうあはれなるはあらじかし。

古き人が光陰は矢の如し月日は流るゝ水に似たりなど云ひけるが、げにことわりとぞおぼゆる、我より始めなべての人、今日は暮れても又あすありなどいひつゝおこたりがちなるはそも何たることぞ、明くれば暮るゝならひを覚らざるにあられども、さすがに今更の如くうちなげかるゝことの、さてもおぞましや、眺むれば、おのこ、おみなの、けじめなく、袖すりかはす市のにぎはひ、さながら衣をおるが如く、引きもきらぬさまの物くるほしさよ、あるは、すゝはらひとて、かほばせのいろさへ變りたるもいとをかし、しめかざり、松竹ひさぐ家々、うるはしうおしたてたるに、あはれこの松竹のためしをひきて、めで度一年の業を常盤堅盤につとめなさんには、いかに立別る年と袖をわかつも、猶惜まるゝ事なかるべきを、おさなご達は一年を遊びに日をわすれ、朝夕身を休むる折もなく、長き月日を一日の如く、おひたち、すこやかに、せんと祈りてのつとめならん、いぢらしうけなげさよ、斯あればこそ、年の暮れ行くををしむなく、新玉の年を迎へんのみと何くれと思へばなり。

あはれ過ぎにし事はいかにくゆともせんなき事にしあれば、淀の流れにしがらみなく、いとも清らかに打ち流し、猶、あらたまる年の始めの朝より、共に心の玉もあらためてみがき〳〵て、雪に盤にたゆみなく世のなりはひにいそしまん、暮れ行く年の名ごりやるせなきまゝに、むらぎもの心をなぐさめんものとて斯くはかいしるしぬ。

和泉　稲原蒹子

里人も新しき年むかへんとや、煤拂ふ音かしましく、おさなき子らの樂しげに、指折るもありけり。實に年月には關守なく、花と移り時とすぎて、今年もいつしかのこり少なくはなりぬ。つら〳〵顧れば、此一年何事をかしつゝすぐしたりけん、あらまし事も亦おもひせし事も何一つこれぞとなしはてたるはなし、あはれ拙なるわが心かな、小

年爲老學難成てふの詩のいましめは知りながら、つい明日よりなどと思ふものゆゑ、遂に明日明日と過ぎゆきしこそ口惜けれ、いでや今より心をとりなほして、こん新としよりは、及ぶ限り德を修めわざをねりて、他日良妻賢母となりてあやまらぬやう必ず心ふり起していそしまん、ゆめ來年は來年はとて暮れにけりの笑ひは殘すまじと、歲の暮るゝに及びて、思ひの一ふしかくなんしるしぬ。

肥後 佐々有鄰子

今はかしのことなれど、父母の君より、うけたまはりしは、舊藩の時の歲暮のさまなり、妾が家にても知行あまた、領したりければ領地よりは十二月の二十日ころより、城下の屋敷に、根元といへる領地の百姓の主宰が、數多の人夫を引つれて、役間に毎夜結番してありけるとぞ、今日は門松たつる吉辰なればと、朝日影と共に起いで、勤務にいそがしかりけり、今夕は明日のまうけの、餅搗の用意にとて人みなのはたらくさまも雄々しかりき、除夜となりぬれば明朝の嘉儀式をつとめんとて、老臣も老女も、若黨はした女も、上をかけ下をかけまはり、とりどりにざはひたりし、今度の歲暮は、廢藩維新のころより、父君は家族を引まとめて、舊領地の片山里に居住なしたまひぬれば、除夜には神前に、供ろ式を、かたばかりむかしのかげをのこしおきたまひ、三十六年の今日とはなりぬ、爐火を圍みて酒をくみかはし、母君の筑紫琴とり出たまひ、六段とかいふしらべ彈したまへば、父君は硯ひきよせて、

玉くしげふたたびえがたき年のくれ

と筆のかはかぬうちに下の句つけよとのたまへば

天皇のみよは萬代

うちうちたはふれも、歲暮のなぐさにこそ。

三河 田中文子

物すごきさびしきいそがしき年の暮、松賣の人朝早くより車に松をつみてかしこの辻こゝのあき地に松の林のごくと、漁夫は魚をかつぎて行き、花賣は花よく〱とよびながら行く、しめ賣るおきな、物買ふ人とり〲ににぎやかき年の市に、なぜ我身はさびしいであらうかなぜたのしくないだらうか、新き年はせまりきたのであるけれど、どうも心さびしく、あゝ遠くはなれている兄上やなき母上の事を思ひ出し、兄上は今年がそつげふの出來ろ年だが、此頃は便りの風もなくゝらしていたが、こんどの試驗はどうだろうかと思ひ、なにやかやをあんじながらくらし、でも私も年の市ゑ行きちひさき松にしめなはでもかひましよと思ひながら、おもてを見れば、むじやきな子供の遊び、雀の聲、庭鳥の啼く聲もなんとなく物さびしく思はれて此の年の暮をくらしてゐた。

明治三十七年 女鑑月並兼題豫告

	歌	文
一月	松 待春	歌留多會の記 おもしろきもの一ッ二ッ
二月	富士山 餘寒月	雪中梅園に遊ぶ 春日局の傳記を讀みて
三月	旅行 春雨	春季運動會の記 月夜櫻花を賞して
四月	海上雲 遠山花	故鄕の友に試驗成蹟を報ず 春を惜む詞
五月	猿 夏朝	硯 吾が常に愛讀する書籍に就て
六月	親友 郭公	藤花を贈る 梅雨中日記の一節

一月一日發行

新年の女鑑

本號紙數百五十頁餘

新年何故に目出度きか。

門松と鏡餅、屠蘇と雜煮と、追ひ羽子と歌かるた、とは初春の目出たきを示して餘あるにあらずや。

されば女鑑も既に初刊以來十四年目の目出たき新年を迎えてわが壹萬有餘の愛讀者諸子に向ひ、聊か祝意を表するの義務ある也。

來る一月一日に發兌する新年の女鑑は則ち祝意を表して此の義務を果たすべく作られたるものに外ならず、乞ふ左に記せる豫告に就きて此言の過當ならざるを知り給はんことを。

口繪

富美宮泰宮兩内親王殿下最近御肖像(アートタイプ)外數葉

記事要概

◎女子教育に關する予の意見　文部省普通學務局長　澤柳政太郎君
◎慈善事業に從事する婦人の心得　錦鷄間祗候男爵　松平正直君
◎勸學の説　華族女學校校長男爵　細川潤次郎君
◎家庭及女子教育に於ける三個の要求　三輪田眞佐子刀自
◎グランビー夫人　濱田文學士
◎更科日記摘撮　境野文學士
◎英文和譯　宮森麻太郎君
◎元日の御大食　有本松濤君
◎鏡餅の話　清水橘村君
◎ハンカチーフの模樣縫方　上村百世君
◎裏店に於ける歲晩の家庭　内田茂文君
◎嬰兒の保護　ドクトル　淺田繁太郎君
◎春の料理　石井湧太郎君
◎新年接客の用意　宇野彌太郎君
◎年始の食物　岡野知十君
◎内外遊戲百番　白井規矩郎君
◎お正月の福引　安藤謙吉君
◎鳥の飼法　囀々子君
◎婦人と客舍　土肥月巴君
◎初日の出　卜部觀象君
◎支那の正月　森又八君
◎花物語　田中花郎君
◎龍の話　半佛君
◎女子小觀　三宅靑軒君
◎米國だより　澁谷馬頭君

新年附錄

小説　漁村の新年　江見水蔭君
未定　幸田露伴君

(本號に限り定價一冊金十五錢



○新年歌御會始御題

明三十七年一月宮中歌御會始御題は「巖上松」と御治定の旨仰出さる詠進期限は明年一月十日限り書式は例年の通り用紙は檀紙、奉書、杉原紙、美濃紙を用ふ可く一人一首に限るとの事にて封筒には「宮內省御歌所御中」詠進在中と認むべしとなり

裏面は某府縣下某國某郡（市）某村（町）住
華士族又は平民　苗字　名

官位勳功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

注意

此書式を地方新聞に轉載する往々誤謬を生ずるを以て年々地方の詠進には違式頗る多し

竪　詠　草

但五ツ折

御題

○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○

名上

裏面の某府縣名族籍官位等を記載せざる者は御歌所に於て整理の際大に困難を生ずべし

折角詠進したるも違式甚しき爲めに天覧に奉ること能はざるが如き遺憾千萬なれば詠進者は十分注意ありたし

○勇ましき女教師（蒙古王の家庭教師）

清國の女子教育漸く萌芽を生ずると共に女教師を我邦に聘する者多きは最も喜ぶべき現象なるが賢明聞えたる蒙古喀拉沁王の如きも亦其家庭教師として本邦女子を招聘したり其人を誰とか爲す即ち河原操子女史其人なり女史は信州松本の產にして其父は福島少將とも懇意の間柄と聞えしが女史は初め高等女子師範學校に學び三年級にして病の爲に退學し其後は下田歌子女史に

從學し業成りて橫濱の大同學校に聘せられ支那人の女生徒を敎授し居けるが昨年五月と云ふに其師下田歌子女史の推薦に因り淸國上海の城內に設けられし務本女學堂の敎師と爲りて渡淸しつ時に年二十五にして才貌雙絕の女史は勇氣さへ堂々たる男兒を凌ぐ許りの有樣にて男々しくも上海着後は日本旅館にだに入らず直に學堂に關係ある支那人の家に止宿し一週間ばかりにして遂に城內の同學堂內に移り住み熱心に敎鞭を執れり當時は惡疫流行して殊に不潔を極めたる城內には一日百餘の棺桶を出すに際して年倘少き女子の平然として其職に盡せるは鬚眉の徒にも得易からざる例なるべし斯くて一年の約束なりければ今年五月にて滿期と爲らんとせし折節喀拉沁王より女敎師聘請のことを北京なる日本公使に託せるより公使は上海なる小田切總領事に照會ありて總領事は女史に相談せしに女史は快然として之を諾せるにぞ總領事も其健氣なるに歎服せりと聞く北邊路遠く塞外雲迷ひて寒鳥の聲腸を斷つの境に入り番語の間に嬌音を操らんとする年少秀麗の女史が壯圖を耳にして誰か其勇氣に驚かざらんや女史は其後三箇月許の間は彼の電奏事件に有名なりし經元珊氏の宅に寓して支那語を研究しつゝ喀拉沁王より使者來るを待ち去月二十三日迎接の蒙古官吏と共に上海を發して北行の途に就けりと云ふ

○嫁の龜鑑　廣島縣尾道市なる戶田某の家庭は親子相親しみ、夫婦相和する花笑らひ鳥歌ふてふ、藹然たる春の趣きを堪へ居たりしに、花には嵐の恨みあり月には叢雲の喞ちたえぬ世の例とて、今より凡そ十年あまり前、即ちコウ子が嫁ぎ來りしより四年目に老母りうは不圖多望性巢囊腸病とかや呼ぶ病にかゝりて蓐の上に呻吟するの身とはなりぬされど發病このかた三年の間は、別に身體の自由を失ふこともなく打過ぐせしに四年目より漸次に手足の自山を奪はれ起臥は固より厠に上ることすら叶はぬ迄に病勢は募り行きぬコウ子は老松のときはに榮えませかしと只管其健康を祈り參らせし姑の類少き病に

かゝりしをいたくかなしみ寢食を忘れて看護に心を用ひ良き醫師と云ふ醫師には必ず診療を乞ひ一日も趣かに御本復あるやうと旦夕に祈りしに其誠意の甲斐もなく老母の病氣はひたすゝみに進みて遂には身動きさへ叶はざるに至れるものから愁傷さらに甚しく常に枕邊に侍べりて看護の傍ら病める老が心を慰め大小用に至るまで人任せにては麁畧ありとて自ら手一つに便器の取運びをなし十年の長の月日をば唯一日の如く變のふ仕へ行くには見きく人々其いみじき孝心に感せぬはなししかしてコウ子は母の看護に甲斐〴〵しく立ち働くのみならず夫婦の間に生れし二人の男兒を保育するにも赤心をこめ良人は常に役所の勤めに忙はしく我家には不在勝のことなればことに世の人に後ろ指さゝるゝ様の事なかれと家庭の教訓には一層に心を配りきまたりう子は斯の如く病める母親と稚きもの二人を控へながら良人をして內顧の憂なからしめしのみならず其貞操の正しき事、千代色かえぬ常盤樹のます〳〵其の緑を増して霜にも雪にも折れず挫けずいと凛々たる慨あるはこれまためでたさの極みなり以上ものし來れる如くなればコウ子の孝貞は、今や隣近にかくれもなく喃ばれ婦人の摸範なり妻女の龜鑑なりとて讃め稱へぬ人ぞなかりける誠とに得易からざる賢女になん

○感すべき少女（眞田を織て家計を補く）

兹に最とも感ずべき少女こそあれ兵庫縣赤穗郡鹽屋村の內鹽屋村中川石松（四十二）の長女およそといへるは當年漸く十歳にして未だ遊び盛りの少女なるにも拘はらず父石松は往年眼病を患ひて一眼明を失し他の一眼も常に煩ひ勝にて思ふやうに仕事も出來ず又母おちか（三十）は云はうやうなき不幸福ものにて六歳の時兩眼失ひ歩行も出來ぬ身となりたれば長ずるに從ひ按摩を學び現に今日も按摩を業とし一錢二錢を得て家計の援けを爲し居れどもおよその外に尙おみか（五つ）といへる幼女もあり都合四人暮しなれば僅に其日々々の煙も立て兼ぬる次第にて一家常に足らぬ勝なるに幼少ながらも怜悧きおよそは兩親の不幸と吾家の貧しき有樣を見如

何にもして家計の手助をなし兩親の心を慰めんものと昨年即ち九歳の時より毎朝早くより起き出で自ら食事の拵へをなし自ら髪を梳りて甲斐々々しく登校し居れるが斯る女子の常として品行もよければ自然成蹟も優等（二學年）にて又絶えて休校せしことなく昨年末にも精勤賞を貰ひし由而して課業を終りて家に歸れば食事拵の合間々々に眞田を編み日曜日には親の吩附を待たず附近の山にて木の葉を拾ひ歸るなど纎弱き少女のいぢらしさばかりの孝養に誰とて感ぜぬものはなしといへり

○健氣な子供　巖手縣利賀郡藤木村柴田太郎長男作太郎（十二）は尋常小學四年級の首席なるが父は他家に奉公し母は人の手傳をして其日を送れど一家八人の口を支ゆべくもあらず時には食を缺く事もある程なれば作太郎の學資抔思ひも寄らず作太郎は學校より歸りては豆腐を賣り夜は終夜草履を造りて家計を助けつゝ今日までは送り來しが愈々家計は窮苦を告げ迚も高等科へ入るの資もなく又登校する時は母が

仕事の手足纏ひなる弟妹の守に困り子供心に人の登校を見ては小さき胸を痛め居れりと云ふ▲茨城縣北相馬郡高井村の秋葉作兵衛の長女ツノ（十三）は父が山に木を伐り母が川邊に貝拾ひて僅に飢を凌ぐ辛苦を痛み留守居のみの役目では罰が當るとて近隣の人に頼み子供の守をさせて貰ひ又は走り使ひ抔して三四錢の稼ぎを爲し父母の喜ぶ顔見ては此の上もなき樂とし孝養怠りなしと云ふ▲徳島縣麻植郡樂島村大字學村の西村仙藏長女ナニ（十七）は至つて器用の者なるが既に機織る事さへ覺えて此の頃は絣を織上げたる由なるが一反目方百八十五匁もありて柄は矢絣に似寄り耳、織物等賣品と異らず少女が手にて織りたる物とは思はれぬ程なりと

○日本産婆學校　榊醫學博士が千家男、床次、鈴木兩法學士の贊成を得て麹町山元町二丁目十五番地に設立せんとする日本産婆學校は去る廿八日其筋の認可を得たるを以て愈來年一月より開校することとなりしが同校は學説科實地科の二部に分ら隨意入

學を許し附屬看護婦講習所をも設けられたり講師に
は鈴木醫學士其他専門家を聘する筈なりと

○明治女學校女生徒の柔道　かねて女子教育に勵精せる巖本善治氏が校長たる北豊島郡巣鴨村の明治女學校にては夙に纎弱なる我國女學生の體育に注意し曾ては劍客伊庭想太郎を聘して有志の生徒に撃劍を教授せしめたることもあり目下同校の音樂教師三浦鶴子(二十五)體操教師山本よう子(二十七)本多かね子(二十二)の三人は親しく伊庭の薫陶を受け就中揃ひも揃ふて柔術に練達しけるにぞ女ながらも手足の筋骨逞うして胴の肥太ものゝしく巴、山吹、板額など昔の女傑の面影も此の三人の女教師に偲ばるゝ程なれば校長巖本氏も同校生徒體育のことは爾來此の三女史の手に一任し三女史も熱心校長の意を體し柔道を以て有志の生徒を督勵したりければ其初めは風に堪へざる糸柳のいとも纎弱かりし姫御前、箱入りの令孃達までが自然と此武風に感化されて休憩時間の雑談にも芝居小説の噂よりは胸倉を取ッての稽古三昧一朝御國に事あらん折は娘子軍の眞先かけて日頃の手練を見せて遣らんなど勇ましくも雄々しき言の葉のかりにも丹花の唇より漏るゝこそ嬉しけれ、さて同校より程遠からぬ處に家庭學校といへるあり校長は監獄學校の教誨師留岡幸助氏といひ無賴の悪少年六十餘名を收容し専ら基督教主義に據りて薫陶しつゝあるが傍ら體育の爲め柔術教師を聘し件の學校にも劣らず盛んに柔道を教へけるに何が扨孰れも元は累々たる喪家の犬の宿るに家なき時は菰に包ッて雪の中にも寢轉んたる悪太郎等のことゝて智育より體育の結果は與太郎に肉を喰はせて肥太らせるより易く今は自慢の手腕を撫ッて何處かの道場に合ひ手は無きやと孰れも力みに力み居れり、然る程に此の學校と彼の女學校とは殆んど近隣の如くなる上かねて兩校長教師等も互ひに往復ひて親しくせるより時々兩校教員生徒等男女混合にて柔道の勝負を試みることありて頗る奇觀を極めたるとありしが本年は明治女學校の創立十八年に當るを祝し且つ今回學資無き女生

の爲めに半日勤勞半日勉學の便を得させん爲め女子學園といふを設立し其開園式を行ふ爲めに去る頃其餘興として兩校の柔術大會を催し明治より十人の女教師及女生家庭より十人の男生孰れも拔群なる者を選拔して男女双方に立合せて晴れの勝負を爭はしめけるに第一番の取組には前記三浦鶴子相手の男何某の剛の者に三番續けて見事に勝ち第二番の取組には本多かね子四番續けて勝ち第三番には家庭の宮本某女生四人を相手にして全勝し第四番は家庭の木下某明治に勝ち第五番は明治の山本よう子全勝を得たり、此結果五番の中三番は見事明治の勝に歸して件の三女傑の勇ましき振舞ひは幾十の男女來觀者をして坐ろに舌を卷き膽を冷さしめたりとなん

○余は余自身の祖父たり　直系の親族間に於て婚姻を爲すときは奇異なる親族關係を生ずるに至るべし伊太利ナアポリスの一水夫ベッポ、ブルゾニなるものが語る所によれば「予は妻として或寡婦を娶りしが妻が連子として伴ひ來りし娘は予の養父に愛せられて終に養父の後妻となるに至れり玆に於てか予は父に對して子たると共に舅たるべき資格を有し予の妻は其娘に對して母たると共に嫁たる身分となりたり其後余に一男子生れしが斯兒は妻の生みたる點より予の子なれども父の後妻と兄弟たりとせば予の叔父にも當る事となる也然るに更に父の方にても後妻に一男子生れしにより關係は益複雑となり予は嬰兒に對しては一方兄弟たると同時に一方其祖父たるべき關係を有する事となり予の父は其嬰兒に對して父たると共に予の妻の娘が生みたりとの點より曾祖父たるべき事となりたり併し更に可笑しきは予の妻は父の後妻(即ち予の養母)の母たりと思へば一轉して予の祖父に該當する事となり而して予が祖母の夫となりたる時は予は偶然にも予自身の祖父となり居る事を發見したりと

○亞米利加の老人結婚流行　西洋人は體が丈夫だからと云へば「ウム成程」と云ふ樣なもの丶、八十九十になつた老爺さん連が若い花嫁を迎へるのが大

流行とは、ちと御盛ん過ぎて呆れる話だが、まあ餘計な批評は止めとして、一つ亞米利加近時流行の、老人と妙齡婦人との、二三結婚談を紹介して見やう米國のジエームス、レーンと云ふ人は、九十　歳にして十三番目の若き夫人を迎へ、ジヨシア、チルトンと云ふ人は八十六歳で一人の美女を娶り、ジエラツドポメリーと云ふ人は、八十九歳で第十二番目の年末だ二十二にしかならない少女と結婚し、ピーターウエストと云ふ人は六十六歳で第十番目の妻を娶り、又エリジヤ、ハツチヤーと云ふ人は、六十と云ふ歳にマーリー、カメーと云ふ五十八歳の老婦人に懸想し、二十二年間燃ゆる想を胸に藏めて耐へて居たが、終に包みきれず、其所で八十二歳と云ふ老年になつて、此の婦人と高砂的初結婚をしたといふ

○米國人の結婚年齡　米國では此頃漸々晩婚の風が流行つて來るさうだが、今ドクトル、メコンネルと云ふ人の說だと云ふのを聞くのに、此の五十年間に、米國ではもと男子は二十二歳が結婚年齡なりしもの、今は平均二十九歳となり、女子は十九歳であつたものが、今は二十四歳となつたさうな小兒見たいな顏つきをして、奥さんとかおかみさんとか濟まし込むのも餘り見好いものでもないが、去りとて餘りの晩婚も感心できない

○大日本音樂會忘年大會　去る五日神田區美土代町青年會館に於て開かれたる同會は來賓八百人餘もありて頗る盛會なりき、會主中川愛氷氏本會開催の主旨を演じ奥野市次郎氏（音樂と風俗）福地源一郎氏（音樂と演劇との關係）それ〴〵演說ありたり次いで演藝に移れり今其の奏演順序を擧れば下の如し

一、清元彌生太夫（四季の三葉草）
二、歌澤龍美太夫（蓬萊島、落し文、潮出來）
三、富本豊志太夫（道行、初音旅）
四、三曲合奏（佐藤左久氏の琴、小山喜子の三絃、三宅玉堂氏の尺八）
五、常盤津文字太夫外四名（八犬義士譽勇猛）

六、林とく子（鳥部山）吉住小三郎氏外五名（長歌）

余興（踊り松の綠）

○第二高等女學校父兄懇話會　同會は去月二十七日小石川區竹早同校内で開かれしが會合した父兄二百餘名頗る盛會で有つた校長は二時間餘に亘つて種々演說されたが特に注意を惹いた主要の點だけを摘記して見れば從來御約束した家庭に於ける復習の時間割に就いて其の利害を腹藏なく言つて貰いたいが先づ差當り申したいのは抑も本校は實用を尊ぶのであるから女子に必要なる圖案を課するのであるが未だ世間に多く例がないので本校は力を此に用ゐ奬勵して居る其の成績は展覽して有るから御覽になれば御了解になりませう又此度セントロイス大博覽會も有るに付いて其に出品するやうにとのことであるから可及的生徒を敎養して居るのである夫れにまゝ父兄より匿名で圖案課題に就いては家庭に於て時間を費して困ると云ふ投書が來る實に意外の事で慨かはしい次第である、願はくば今後決して匿名投書などは被成ずに、どうか本校に來て胸襟を打開いて御話して貰い度いのであると滔々として而も懇切に云はれた猶ほ習字の如きは約一時間位しか一週課せられないから本校では特に注意して肉筆の細字の手本を與へ其れに據つて勉强させて行くから實用上より見ても大に成績好良である其の他裁縫英語家事科殊に英語の如きは一層注意して敎授するから上級の生徒は大抵普通の會話位は出來るやうにまで成つて居る家事科には和洋料理法を設けてあるが社會は段々進で行くから洋食に重を置いて敎授して行かふと思つたら父兄の注文により今では半々にしてやつて居るとマアこんなもので有つた終つて展覽品を觀茶菓の饗應も有つて午後散會した

新刊書目

女子之友	一四七	東京神田區鎌倉町	東洋社
婦女新聞	每號	東京牛込區東五軒町	同新聞社
日本婦人	四九	府下豊多摩郡澁谷村	帝國婦人協會

婦人界	二卷八	日本橋通	金港堂
音樂の友	四卷七	府下北豐島郡巣鴨村	樂友社
東京經濟雜誌	一二一〇	東京京橋區彌左衛門町	同雜誌社
愛國婦人	四二	同麹町區下二番町	大日本女學會
工談雜誌	一六四	同京橋區新榮町	工談會
大日本婦人教育會雜誌	一五九	麹町區永田町	同教育會
婦人と子供	三卷一二	女子高等師範學校内	フレーベル會
女子新聞	毎號	東京麹町區有樂町	同新聞社
商家の友	二一	同京橋區南鍋町	時事新報社
近畿評論	五卷一九	京都市上京區	同發行所
平民新聞	五	同麹町區有樂町	同發行所
家庭の友	九	神田區南甲賀町	内外出版協會

◎新刊概評

◎侠男子　稲岡奴之助著　弘文社發行

江湖放浪の一男士が一言の然諾を重んじて種々の侠骨を樽俎兵火の間にあらはすところ快絶とも奇絶とも評すべし文章は涙六流の妙味のみを有して一種の厭味なきは確かに一進境とするに足るべし但し本篇は侠男子の前半生を記して未だ盡さゞるものあれば後篇に至りて愈よ佳境に入るを見ん(定價四十錢)

◎ちぎれ雲　渡邊霞軒 渡邊光風編　東洋社發行

日本歴史十二月中の第八月分にして例に依り中々面白く作られたり家庭の讀本としても歴史の參考書としても有益なる讀物といふべし(定價二十錢)

◎料理化學　小林増作著　冨山房發行(定價三十八錢)

家庭に於て實際に應用し得らるべき事柄を適當と認むる程度に於て通俗に編述せりとは編者の緒言なり兎も角家庭有益の著書なり

◎名和唱歌　落合直文校閲 三島吉太郎作歌　伯爵　伯文堂發行

名和長年が勤王の事蹟を流麗に作歌したるものにして小學校生徒の唱歌として寔に格好のものなるべし(定價五錢)

◎唱歌菊乃薫　同上　同　同上

後醍醐帝の皇女瓊子内親王が孝養をつくさんとてまだうら若き御齢もて伯耆の土となり給ひし御事蹟を最と悲哀に作りたるものにて婦女子の唱歌に適當せり(定價六錢)

◎行雲流水　堀内新泉著　民友社發行

春の山里、夏の海、花吹雪、返らぬ水、失望の人など數十篇を集めたるものなり文章簡潔にして流麗毫も惡徳文字の跡を留めざれば清き家庭の讀物として上乘のものといふべし(定價二十錢)

◎名著文庫十二よものあか　上田萬年校訂

◎名著文庫十三國姓爺合戰　關根正直校訂

よものあかは蜀山人の戯筆を集めたるもの國姓爺合戰は近松巣林子の戯曲を校訂したるものにて例の通り美麗なる袖珍本として冨山房より出版せるものなり(定價二十錢)

讀者の意見を求む!!

女鑑記者謹むて本誌愛讀の令夫人、令孃諸子に向ひて御相談致したき事あり、そは他にあらず

女鑑發兌の回數

に就きての事なり、御承知の如く女鑑は十三年來毎月二回の發兌として今日まで永續し來りしが、今後愈々大擴張を施し大改良を行ふの氣運到來したるに就きては此際二回の發兌を改めて

毎月一回の發兌

となし、從來の二回分を集めて一回分とし頁數百頁を二百頁に増し又た口繪其他も四枚若くは五枚なりしものを十枚以上とし一冊の定價を二十錢とせんか、或は依然是迄の通り

毎月二回の發刊

として(定價は從前の通)口繪及び頁數は從來のまゝに止め益々材料を精選し、記事を豊富にして諸子の高顧に酬ひんか、是れ記者の再三熟慮して尙ほ未だ決する能はざる所なり、云ふまでもなく新聞雜誌は讀者と記者との意思相投合融和して始めて妙境に入り讀者の心益々躍りて記者の筆益々動くものなれば記者が躊躇して容易に決する能はざる此の問題の如きも當然

讀者諸子の意見

を聽きて、兩者の一方に決定すべきものなりと信ずるにより、玆に世に有振れたる

多數決の方法

を以て諸子の御意見を求め、來年二月十一日即ち

紀元節

の日を以ていづれにか決定斷行せんとするとせり、就ては各位以上の趣意を諒せられ

御遠慮なく

はがき、電話(匿名にてもよろし)其他の方法によりて女鑑編輯局へ御申越しあらむことを希望に堪へず、且つ其の御意見及び可否の點數は一々本誌に掲載して諸子の一覽に供すべければ又一の興味あるを見るべきなり

明治三十六年十二月

東京京橋區築地二丁目國光社
女鑑編輯局
特新橋八八番
新橋二六九三番

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

新按

明治三十七年
女生日記

菊袖珍製本頗優美

上製 總クロース金文字模樣入 定價 卅錢 郵稅 四錢

並製 背クロース厚表紙石版刷 定價二十錢 郵稅四錢

本書は特に女學生の爲め編纂したる者にして古今東西の婦人に關する金言俚諺和歌等を日々の紙欄に掲上し且つ日曜日の欄には特に英和對譯の一項を挿入したれば日々の出來事を記錄すると同時に知らず識らず古今の聖賢學者哲人等の名言と詩文とを諳誦し其の學識を深くし品性を高うするを得べし又卷頭には女子職業案內學校案內其他種々の事項を載せ每月の初めには大祭祝日の唱歌古賢の訓戒及び四季折々の遊樂料理等を明細に記しあるを以て學校にあると家庭にあるとを問はず女學生は勿論一般婦人の必ず座右を放すべからざる良日記なり

第十五版 細川十州翁序 三輪田女學校長 三輪田眞佐子著
●女子之本分 全一冊
菊判大和綴美本 定價廿五錢郵稅六錢

第八版 西村茂樹翁序 三輪田眞佐子著
●女子處世論 全一冊
菊判洋裝美本 定價廿錢郵稅四錢

第四版 副島種臣題字 堀內新泉著
●家庭の鑑 全一冊
菊判洋裝美本 定價十八錢郵稅四錢

新刊 磯部武者五郎著
●家計簿記法 全一冊
菊判厚表紙 定價十五錢郵稅四錢

東京市京橋區 發行所 株式會社 國光社 築地二丁目

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

少年武士道史傳

菊判洋裝美本全八冊
各定價十九錢郵税四錢

第一編 ●山中鹿之助 文學士大町桂月著
第二編 ●上杉謙信 國府犀東著
第三編 ●本多平八 文學士笹川臨風著
第四編 ●小早川隆景 田岡嶺雲著
第五編 ●立花宗茂 文學士白河鯉洋著
第六編 ●木村重成 法學士太田蒼溟著
第七編 ●大石良雄 文學士中内蝶二著
臨時發刊 ●藤田東湖 法學士工藤重義著

發行所 東京築地 株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京高等師範學校附屬小學校編纂

茗溪叢書

學校生活

東京高等師範學校附屬小學校に於ける訓練に關する研究報告

菊判洋装 全一冊
定價廿錢 郵税四錢

本書は東京高等師範學校に於て多年實施せられし經驗と佐々木訓導の研究報告とに基きて編述せられたるものなり學校生活を系統的に研究せんとするものは一讀せざるべからず

茨城縣師範學校教諭岡部時次郎氏
茨城縣師範學校教諭森田廣吉氏 共編

● 教育適用

舞踏遊戯法

菊判洋装全一冊
定價金貳拾貳錢
郵税四錢

西　主一
野木衛佐美 合著

● 新案

海軍遊戯法

菊判洋装詳圖入
定價二十錢
郵税金四錢

發行所 東京市京橋區築地 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

醫學博士森鷗外著
新刊 ●長宗我部信親●
菊判半切 定價金十錢 郵税二錢

本書は著者森博士が、土佐出身の某子爵の需に應じて作られたる琵琶歌なりといふ。吟誦一番すれば戰國武士の面影の髣髴として躍るが如きを見るべし嗚呼中津留川原の血戰に骨を曝らしめたる此の若武者の芳名は、靈山の頂と共に高く、戸次川の流れと共に長し。

水主天姥著
千古靈魂 石田三成 及其時代之形勢
四六判洋装 定價三十錢 郵税四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶも其寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も秋官の刑を斷するが如く。毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間文舞ひ、句躍て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ヶ原を過ぎて、鬱葱たる松尾南宮の諸山を望みし者此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、眦裂け、腹斷たざれば已まざるべし蓋し近來の快著なり

在法科大學矢田七太郎著
●幕末之偉人 江川坦庵 全一冊
四六判洋装定價卅錢郵税四錢

清藤正輔編
●西郷從道 全一冊
菊判洋装定價廿五錢郵税四錢

清藤正輔著
●聖德太子傳 全一冊
四六判洋装定價十錢郵税二錢

發行所
東京市京橋區築地
株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

結婚と家庭

松川霓洲著

四六倍判三ッ切
定價拾五錢郵稅四錢

結婚と家庭？是れ未だ解答を與へられざる一大問題なり。抑も兩性結合は天の大倫、男女相愛は人の常情。誰れか又之を防遏するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず、是を以て或は失戀に泣き、或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて。厭世の人となる者、古來其幾多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや、著者の麗筆を以て此の大問題の解決を試み。近く證を取り遠く例を引き、縱横論議して毫も憚かる所なし、希はくば青春妙齡の士女此書に據りて以て、相愛の結儀を擧げ和樂の家庭を構成せば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

藤野天城著 ● **女子小觀** 四六判洋裝全一冊 定價廿錢郵稅金四錢

森田廣吉 岡部時次郎 共著 ● 教育適用 **舞踏遊戲法** 菊判洋裝全一冊 定價廿二錢郵稅四錢

堀内新泉著 ● 家庭小說 **少女讀本** 花月雪の卷 全三冊
菊判洋裝美本
各定價拾八錢郵稅四錢

發行所 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

伯爵副島種臣題辭
從二位尾崎忠治題辭
鹿川宮內默藏著述

王學指掌

菊判總クロース　定價一圓　郵稅十錢

王學の吾人身心の修養に大益あることは。既に天下識者の認むる所にして。今更論辯を要せじ。而るに從來この學に志すもの。三輪執齋考定本の傳習錄に由りてこれを講究すと雖。奈何せむ該書は雜錄體にして。初學この學の統緒を繹ぬるに便ならず。本書は著者が古傳習錄及文錄等より。この學の講究に最も必要なる條項を擇び。系統的にこれを編纂し。部門を道體學術の二類に分ち。その內又各目を種別し。これが義解と評語とを施したれば。一讀の下直ちにその要領と下手の方法を理會するを得べし

文學士　遠藤隆吉著

新刊　菊判洋裝

公民心得

定價卅五錢　郵稅六錢

本書の目的　日本公民の讀本として編纂せり特に高等小學校補習讀本として最適當なり

本書の特色　法制と經濟とを巧に調和安排して然かも之を統一的に記載したるは此種の讀みものとして未だ曾て有らざる所蓋し著者は將來の日本公民讀本として本書は其模範を示すものなることを疑はじと

文學博士栗田寬著

天朝正學

菊判洋裝　定價卅五錢　郵稅四錢

文學士吉丸一昌編纂

名家修養談叢

菊判洋裝　定價卅六錢　郵稅八錢

國光社編纂

日本教育

菊判洋裝　定價十三錢　郵稅四錢

發行所　東京築地　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

衛生無毒 クイーン白粉

皮膚艶美 クイーン水



發賣本舖 花陽堂

東京市日本橋區新和泉町

明治三十六年十二月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第廿四號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地國光社印刷